昭和56年度神戸市埋蔵文化財年報

1983

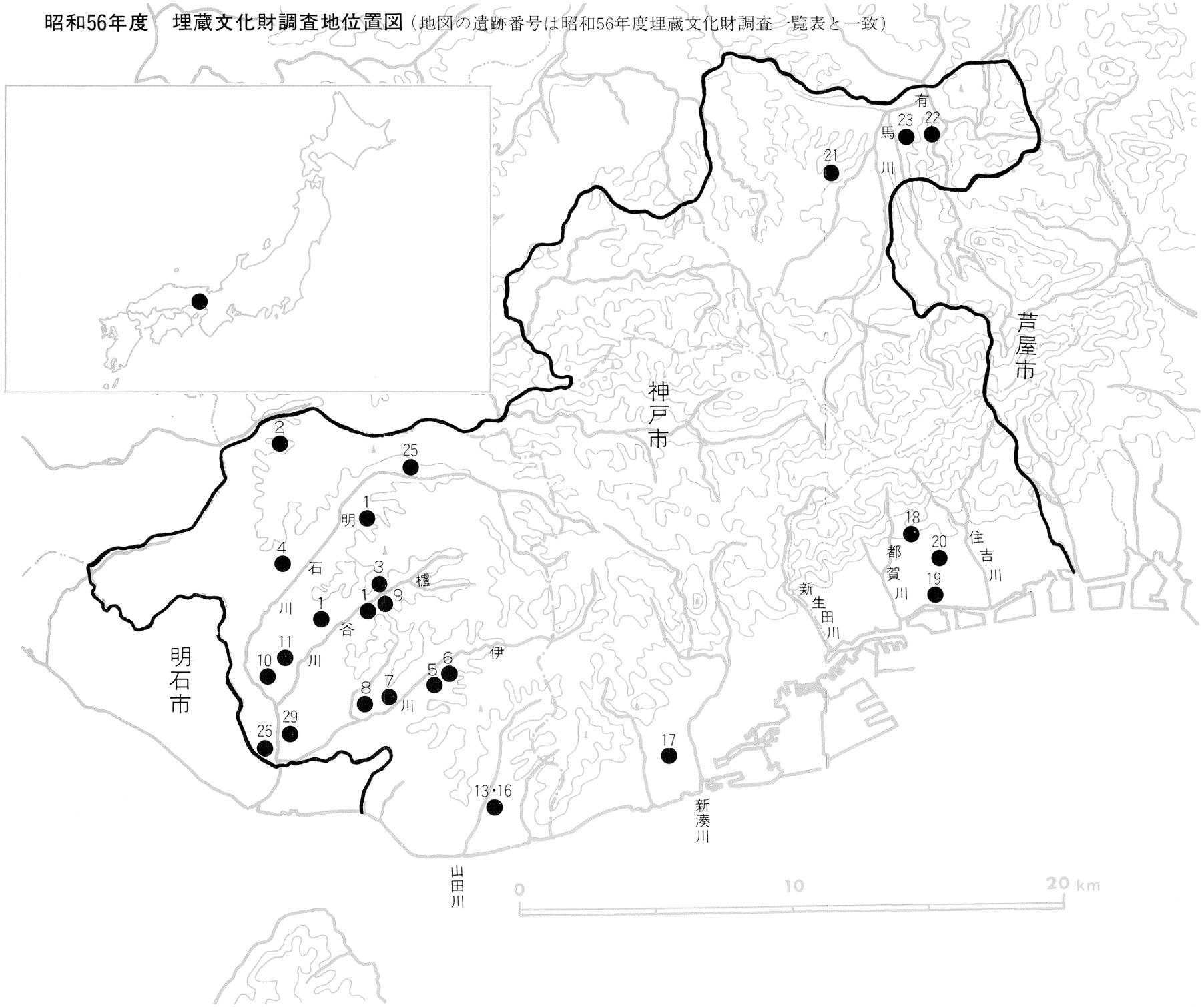
神戸市教育委員会

滝ノ奥遺跡出土和鏡

滝ノ奥遺跡出土青白磁壺形合子

滝ノ奥遺跡出土経筒

昭和56年度　埋蔵文化財調査地位置図（地図の遺跡番号は昭和56年度埋蔵文化財調査一覧表と一致）



昭和56年度　埋蔵文化財調査一覧表

番号	遺跡名	所在地	調査原因	調査主体	調査面積	調査期間	調査担当者	調査内容	備考
1	西神ニュータウン内遺跡	垂水区櫨谷町菅野 〃　〃　長谷 〃　平野町堅田	西神ニュータウン建設及び関連事業	神戸市教育委員会	950m²	56.6.22～10.16 57.1.29～3.31	宮本　郁雄 西岡　巧次 菅本　宏明	第62号弥生時代後期住居址 古墳時代後期（６Ｃ）溝 第30号古墳（円墳、木槨、木棺）、第32号古墳 中央線中世火葬墓	第15次 試掘
2	神出古窯址群	垂水区神出町北、田井	圃場整備	〃	2,500m²	56.6.22～9.6 56.10.28～12.25	丹治　康明	須恵器窯址　宮ノ裏支群４基 釜ノ口支群７基	
3	池谷遺跡	垂水区櫨谷町福谷	〃	〃	700m²	56.6.29～9.31	西岡　巧次	古墳時代（６Ｃ）住居址 鎌倉時代（13Ｃ）掘立柱建物３棟	
4	西戸田遺跡	垂水区平野町西戸田	〃	〃	680m²	56.9.7～10.27	丹治　康明	平安時代（12Ｃ）掘立柱建物、土坑	
5	小寺遺跡	垂水区伊川谷町小寺	〃	〃	370m²	56.11.4～12.26	菅本　宏明	７Ｃ掘立柱建物	
6	頭高山遺跡	垂水区伊川谷町小寺	神戸研究学園都市建設事業	〃	450m²	57.2.1～3.31	渡辺　伸行 森田　稔	弥生時代中期住居址	第３次調査
7	池上北遺跡	垂水区伊川谷町上脇	神戸市池上北特定土地区画整理事業	〃	690m²	56.5.25～7.31 56.10.12～10.15	口野　博史	弥生時代後期住居址	試掘
8	北別府遺跡	垂水区伊川谷町別府	神戸市北別府特定土地区画整理事業	〃	1,100m²	57.1.7～2.28	丹治　康明	平安時代（10Ｃ）蔵骨器、柱穴 弥生時代後期土坑	
9	櫨谷中学校内遺跡	垂水区櫨谷町池谷	櫨谷中学校内増改築工事	〃	130m²	56.10.15～10.18	口野　博史 森田　稔 丹治　康明	中世火葬墓、土坑	
10	居住遺跡	垂水区玉津町小山	西区総合庁舎建設事業	〃	900m²	56.4.6～4.9 56.5.2～6.10	西岡　巧次	12～13Ｃ鎌倉時代柵列 弥生時代後期土坑	
11	居住・小山遺跡	垂水区玉津町居住・小山	居住・小山住宅街区整備事業	〃	144m²	56.11.24～12.2	千種　浩	鎌倉時代　溝	
12	神出古窯址群	垂水区神出町		〃	23,000m²	57.2.18～2.26 57.3.10～3.12	丹治　康明	地磁気探査	指導 ●奈良国立文化財研究所 ●兵庫県教育委員会
13	舞子古墳群 西石ヶ谷１号墳	垂水区舞子坂２丁目	宅地造成	〃	150m²	56.7.1～7.10	森田　稔	石室掘形検出	昭和55年度調査
14	舞子古墳群 西石ヶ谷４号群	〃	〃	〃	150m²	56.7.10～7.17	〃	〃	
15	舞子古墳群 西石ヶ谷３号群	〃	〃	〃	200m²	56.10.12～10.30	宮本　郁雄 渡辺　伸行	古墳（６Ｃ）横穴式石室	
16	舞子古墳群 西石ヶ谷６号群	〃	〃	〃	100m²	56.11.2～11.26	〃	〃	
17	松野遺跡	長田区松野通４丁目	市営松野住宅建設事業	〃	3,750m²	56.9.9～9.16 56.10.14～57.1.18 57.2.3～2.28	西岡　巧次 渡辺　伸行 口野　博史 千種　浩	古墳時代後期（６Ｃ） 掘立柱建物５棟 柵列（２時期） 溝　２条	指導 ●奈良国立文化財研究所
18	滝ノ奥遺跡	灘区高羽字滝ノ奥	マンション建設事業	〃	1,800m²	56.4.25～6.30 56.7.27～57.2.19	森田　稔	平安～鎌倉時代（10～13Ｃ）掘立柱建物、礎石建物、基壇、経塚（銅鏡、合子、独鈷杵、刀子）	
19	史跡処女塚古墳	東灘区御影塚町２丁目	文化財保存修理事業	〃	600m²	56.6.10～57.3.31	千種　浩	前方後方墳 葺石	
20	郡家中町遺跡	東灘区御影中町	マンション建設	〃	120m²	56.12.14～12.31	〃	古墳時代祭祀跡、勾玉、臼玉、須恵器、土師器	不時発見
21	北神ニュータウン内遺跡	北区長尾町宅原 〃　道場町日下部	北神戸第１地区建設事業	〃	2,000m²	56.4.1.～10.26 57.1.6～1.22	宮本　郁雄 菅本　宏明	第10号 一字一石経塚 第36、46号　近世墓 第13、35号　石室移築	第３次 指導 ●奈良国立文化財研究所
22	生野遺跡	北区道場町生野	圃場整備	〃	340m²	56.8.3～57.3.31	口野　博史	平安～鎌倉時代（12～13Ｃ） 掘立柱建物３棟、溝　１条	
23	塩田遺跡	北区道場町塩田	〃	〃	200m²	56.12.15～57.1.8	渡辺　伸行	平安時代～鎌倉時代（12～13Ｃ）	
24	今津遺跡	垂水区玉津町今津	宅地造成	〃	324m²	56.4.1～4.8	菅本　宏明	弥生時代中期住居址、土坑	昭和55年度継続
25	福住遺跡	垂水区押部谷町福住	圃場整備	〃	180m²	57.2.1～3.31	口野　博史 千種　浩	遺構なし	
26	吉田南遺跡	垂水区森友１丁目	玉津環境センター建設事業	吉田片山遺跡調査団		56.4.1～11.19		遺物整理	昭和50～55年発掘調査

なお、調査内容の欄では世紀をＣと略称

序

神戸市は、「福祉都市づくり」、「文化環境都市づくり」、「国際港湾・産業都市づくり」を３本柱として市政を推し進め、活力のある、魅力あふれる街づくりの実現に務めています。

特に昭和56年度は、新しい海の文化都市の創造をメイン・テーマにしたポートピア'81が開催され、半年間の会期中に16,102,752人の人々が会場を訪れ、成功裏に幕を閉じました。

このような華かな催し物が行われる中で、昭和56年度も開発と文化財保護の調和を目的として24件の文化財調査が実施されました。

今回、ここに「昭和56年度神戸市埋蔵文化財年報」として事業の概要を刊行できることを大いなる喜びとするものであります。調査に際し、協力を賜わった関係各位に深謝するとともに、本書が活用されますことを切望いたします。

昭和58年９月

神戸市教育長　山　本　治　郎

目　　次

序

例　言

昭和56年度埋蔵文化財調査地位置図

昭和56年度埋蔵文化財調査一覧表

Ⅰ．昭和56年度事業概要 …… 1

Ⅱ．昭和56年度の発掘調査 …… 3

1．西神ニュータウン内遺跡 …… 3
第62地点Ａ遺跡 …… 4
第63地点遺跡 …… 7
第62地点Ｂ遺跡 …… 8
第30－１号墳 …… 9
第31－３号墳 …… 13
第32－１、２号墳 …… 14
西神中央線内長谷遺跡 …… 16
2．神出遺跡 …… 18
3．池谷遺跡 …… 29
4．西戸田遺跡 …… 35
5．小寺遺跡 …… 38
6．頭高山遺跡 …… 42
7．池上北遺跡 …… 48
8．北別府遺跡 …… 53
9．櫨谷中学校内遺跡 …… 56
10．居住遺跡 …… 59
11．居住・小山遺跡 …… 63
12．神出・井吹地区分布調査報告 …… 65
13．舞子古墳群西石ケ谷１号墳 …… 67
14．舞子古墳群西石ケ谷４号墳 …… 70
15．舞子古墳群西石ケ谷３号墳 …… 73
16．舞子古墳群西石ケ谷６号墳 …… 78
17．松野遺跡 …… 81
18．滝ノ奥遺跡 …… 86
19．史跡処女塚古墳 …… 97
20．郡家中町遺跡 …… 105
21．北神ニュータウン内遺跡 …… 109
第46地点遺跡 …… 109
第36地点遺跡 …… 111
第10地点遺跡 …… 112
第19地点遺跡 …… 113
第13地点、第35地点遺跡 …… 114
22．生野遺跡 …… 115
23．塩田遺跡 …… 120

例　　言

1．本書は、神戸市教育委員会が昭和56年度に実施した埋蔵文化財関係事業の概要である。

2．事業に関わる発掘調査は、神戸市文化財専門委員の指導のもとに、神戸市教育委員会が実施した。調査組織は、以下のとおりである。

調査関係者組織表

神戸市文化財専門委員（埋蔵文化財部会委員）	野地脩左	神戸大学名誉教授
〃	小林行雄	京都大学名誉教授
〃	檀上重光	神戸新聞社編集局長
事務局　教育長	安好匠	
社会教育部長	畑岡瑞夫	
文化課長	安田博司	
埋蔵文化財係長	奥田哲通	
事務担当学芸員	丸山潔	
〃	渡辺伸行	

調査担当

埋蔵文化財係長	奥田哲通
学芸員	宮本郁雄
〃	西岡巧次
〃	菅本宏明
〃	口野博史
〃	森田稔
〃	丹治康明
〃	千種浩

3．発掘調査では、以下の方々の御指導と御教示を得た（敬称略）。記して謝意を表する。奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長　岡田英夫　同遺構調査室長　宮本長二郎、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター保存科学処理室長　沢田正昭、同研究指導部主任研究官　西村　康。

4．本書に掲載した遺跡の所在地、調査内容、調査担当者は、一覧表に記した。

5．本書に掲載した位置図は、国土地理院発行の1/25000地形図のうち「神戸首部」、「神戸南部」、「西宮」、「須磨」、「前開」、「東二見」、「明石」、「三木」、「三田」、「武田尾」の一部を使用した。

6．本書に掲載した図版のうち、口絵写真は徳永囡治が撮影し、本文写真は各調査担当者が撮影した。

7．本書は、一覧表に示した各調査担当者が執筆し、校正を奥田哲通、渡辺伸行、編集を渡辺伸行が担当して作成した。なお原稿の浄書には、大森敦子、図面のトレースには和田早芳子の協力を得た。

Ⅰ．昭和56年度事業概要

ここに報告するのは、神戸市教育委員会が昭和56年度に実施した埋蔵文化財関係事業の概要である。

1.緊急発掘調査

神戸市は、阪神間にあって温暖で風光明眉な自然環境の下にあり、居住環境として適しているため、公共・民間を問わず開発事業が活発で、そのために破壊の危険にさらされる埋蔵文化財も多い。昭和56年度、神戸市では500㎡以上の開発行為について事前審査願の提出が189件あり、そのうち緊急発掘調査を要したもの24件、試掘、立会調査を要したもの24件であった。緊急発掘調査箇所24遺跡のうち、その殆どが新市街地の北区、垂水区内の遺跡であり、神戸市内での大規模な開発がこの地域に集中していることを物語っているが、近年、旧市街地内からも再開発にともなって遺跡の発見があいつぎ注目を集めている。中央区楠荒田町遺跡（弥生）や東灘区郡家遺跡（弥生～鎌倉）などはその代表例であるが、今年度調査した長田区松野遺跡や灘区滝ノ奥遺跡もその一つである。なお、今年度緊急発掘調査を実施した各遺跡の概要は、後に記すとおりである。

2.古墳の移築保存

神戸市北区の北神ニュータウン内に存在する２基の古墳（第13地点遺跡、第35地点遺跡）の移築保存事業を住宅都市整備公団と神戸市土木局の協力を得て実施した。第13地点遺跡は竪穴式石室、第35地点遺跡は横穴式石室を埋葬施設とする古墳である。前者は主体部を切り取り、後者は解体して移設した。将来、ニュータウン内に新設される学校用地内に復元する予定である。

3.史跡処女塚古墳環境整備

史跡処女塚古墳の環境整備は、国庫補助金を得て昭和54年度から実施している。これまで、主として周囲の石垣整備を行ってきており、今年度は前方部南東隅の石垣整備と防護柵を設置した。整備範囲は13.5ｍである（fig. 1 参照）。

石垣は、径25㎝程度の御影石の玉石を使用して、0.3の法勾配で２ｍの高さまで整備した。防護柵は、錆止めを施した中空の角パイプを用いて石垣の上部に設置した。柵の高さは1.3ｍである。石垣の墳丘内部は、石垣の高さまで盛土を施した。

4.現地説明会の開催

神戸市では、埋蔵文化財への理解と関心を深めてもらうために、例年、一般市民を対象に遺跡の現地説明会を開催しているが、今年度は下記の８ケ所について実施した。

番号	遺　跡　名	説明年月日	説 明 者	見学者数
1	池上北遺跡	昭和56年７月19日	口野　博史	30名
2	北神ニュータウン内遺跡	昭和56年７月19日	宮本　郁雄	80名

3	処女塚古墳	昭和56年８月９日	千種　　浩	250名
4	神出古窯址群　宮ノ裏支群	昭和56年８月30日	丹治　康明	150名
5	舞子古墳群西石ケ谷3、6号墳	昭和56年12月６日	渡辺　伸行	280名
6	神出古窯址群　釜ノ口支群	昭和56年12月13日	丹治　康明	70名
7	松野遺跡	昭和56年12月20日	西岡　巧次	150名
8	滝ノ奥遺跡	昭和57年１月24日	森田　　稔	280名

５.大歳山遺跡復元住居の公開

文化財保護週間にちなんで、11月１日～11月７日まで垂水区西舞子４丁目にある大歳山遺跡の弥生時代復元住居を一般公開した。公開期間中にのべ750名の見学者が訪れた。

６.五色塚古墳の公開

五色塚古墳は年間を通じて無料公開を実施しているが、今年度はポートピア博覧会が開催され、大型バスの駐車場が新たに設けられたこともあって見学者数は増え、団体で16,166名、個人35,226名　合計51,392名を数えた。前年比9,645名の増加である。

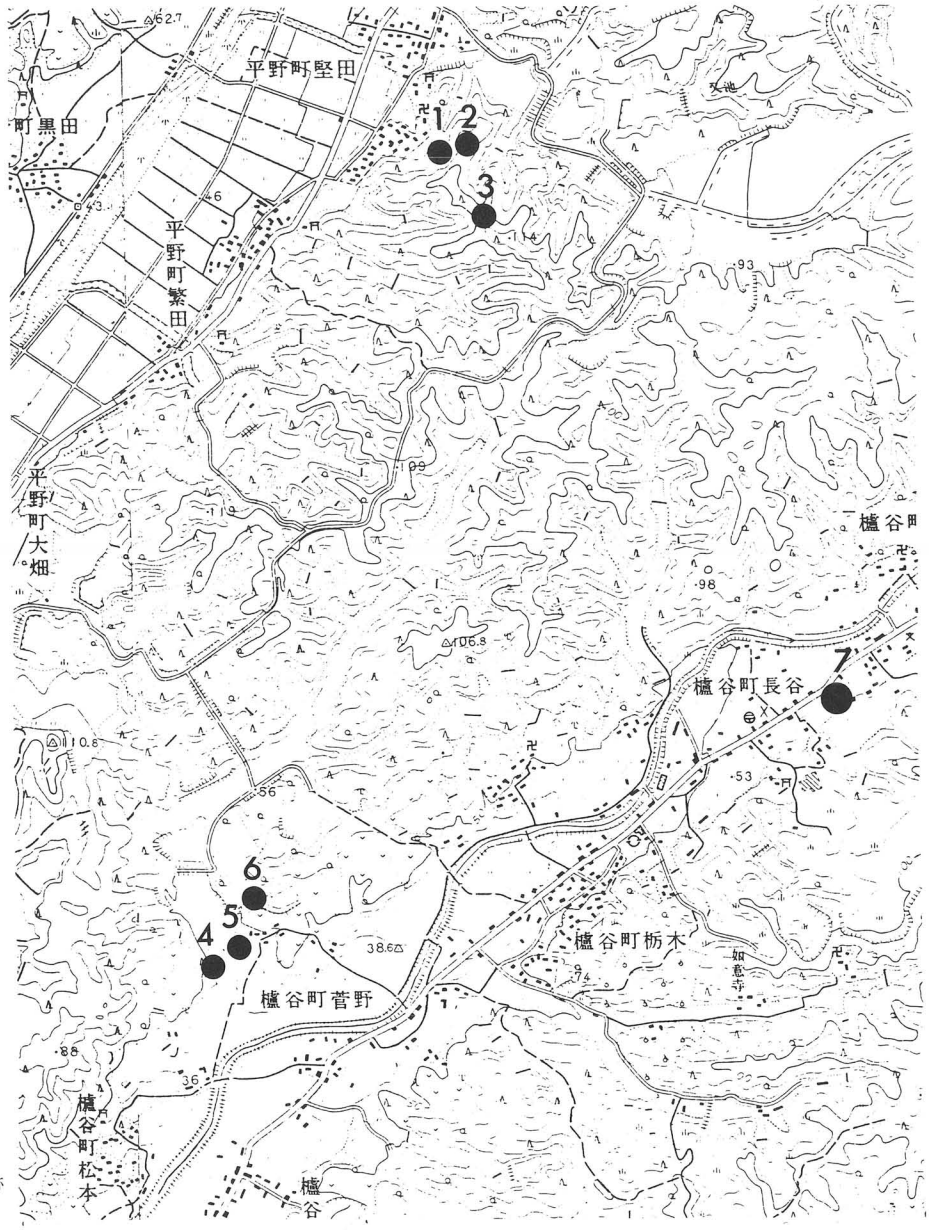
fig. 1　史跡処女塚古墳
環境整備実施図

昭和54年度　整備箇所
昭和55年度　整備箇所
昭和56年度　整備箇所

II． 昭和56年度の発掘調査

1．西神（せいしん）ニュータウン内遺跡

昭和56年度の西神ニュータウン及び関連事業区域内の発掘調査は、次の８ケ所について実施した。第62地点Ａ、第62地点Ｂ、第63地点、第30－１号墳、第31－３号墳、第32－１号墳、第32－２号墳、西神中央線長谷地区の８ケ所である。



1 第31―３号墳
2 第32―１、２号墳
3 第30―１号墳
4 第62地点Ａ遺跡
5 第62地点Ｂ遺跡
6 第63地点遺跡
7 中央線内長谷遺跡

fig. 2　西神ニュータウン内遺跡位置図

第62地点Ａ遺跡

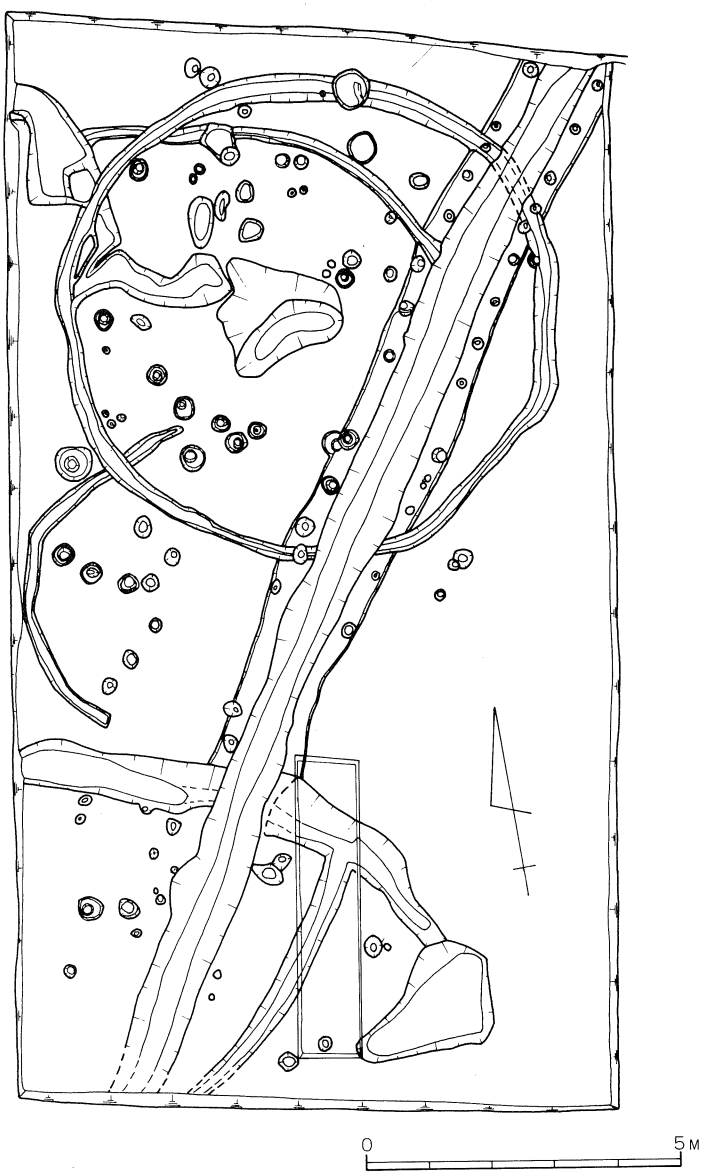
１．調査経過　第62地点は神戸市垂水区櫨谷町菅野にあり、県道小部・明石線と櫨谷川がほぼ平行に走り、その西側の平地が一部入り込んだ最奥部に位置している。遺跡の海抜は37ｍ前後で、櫨谷川に注ぎ込んでいる菅野谷川がすぐ横を流れている。今回の調査は、菅野谷川の河川改修に伴うものである。

２．調査概要　発掘調査は、当初の分布調査で須恵器を採集した地点を中心に、２ｍ×２ｍの坪掘りを実施し、遺跡の範囲確認を行った。坪掘り調査では、第３グリッドと第７グリッドから遺物包含層を検出したため、この２個所のグリッドを中心にトレンチを設定した。

トレンチは南北10ｍ、東西15ｍの範囲で掘削した。その結果、第３グリッド、第７グリッドを中心とした周辺より、12～13世紀の土師器片（羽釜）や須恵器片（坏）が出土したが、遺構は検出されなかった。また、トレンチの北端で一段高くなった堅いベース面を検出したため、トレンチを北側に10ｍ拡張し調査した結果、土坑２基を検出した。土坑１は直径60cm、深さ35cmで、焼土を含んだ黄褐色粘質土中から須恵器の大甕が、口縁をやや斜め下にした状態で出土した。甕は土坑内で割れたと思われるが、底部がなく底部を打ち欠いて埋めた可能性が高い。土坑２は、直径50cm、深さ27cmの円形土坑である。土坑内は、土坑１と同じく焼土を含んだ黄褐色粘質土と灰褐色粘質土が詰まっており、拳大の石と須恵器片が入っていた。また、土坑の周辺より柱穴を検出した。

fig. 3　第62地点Ａ遺跡遠景

fig. 4　遺構全体図



この中世遺構面の下から、古墳時代と弥生時代の遺構面を同一面で検出した。弥生時代の遺構面は古墳時代に削平されたらしく、住居址の周壁溝のみが検出された。

住居址　住居址の大きさは南北８ｍ、東西7.5ｍ、周壁溝の幅約40cm、深さ20cmと大形である。この住居址の内側でさらに１条の溝が検出され、建て替えが行われたと考えられる。住居址に伴う柱穴は確認できなかった。この住居址の周壁溝中より、弥生時代中期の器台と砥石が出土した。

fig. 5　古墳時代溝、弥生時代住居址（北から）

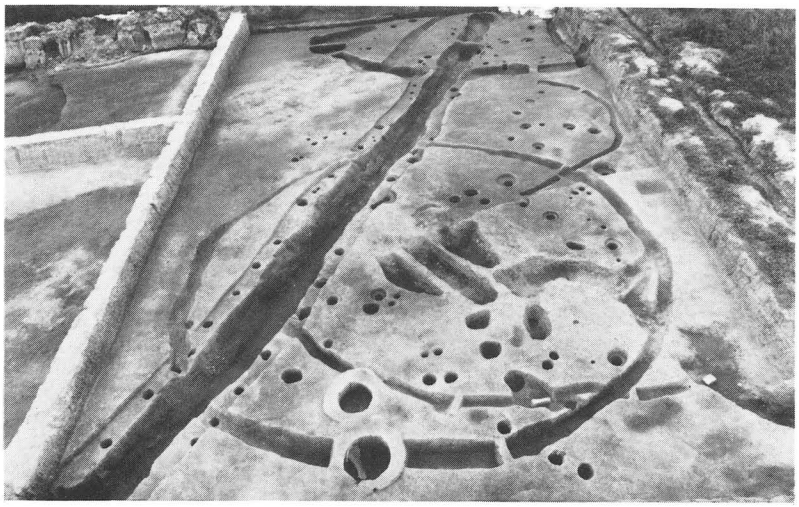


fig. 6　弥生時代住居址全景（北から）

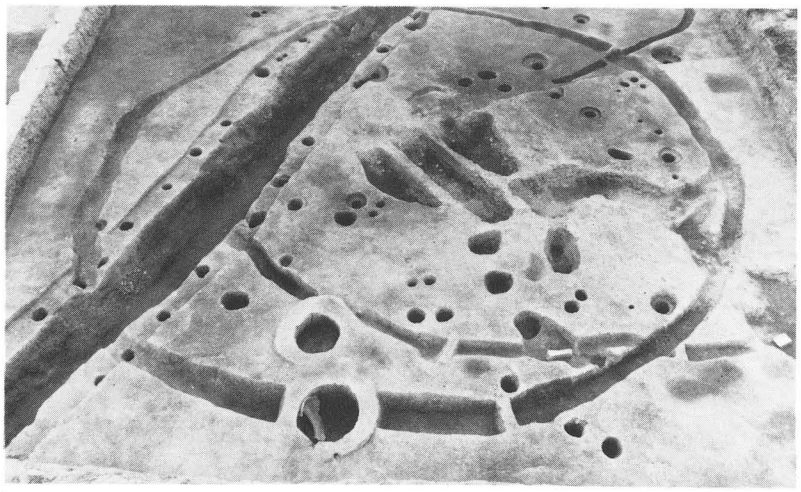


fig. 7　古墳時代溝（南から）

溝　また、住居址を切って、ほぼ東西に走る溝跡を検出した。溝の規模は幅1m、深さ約60cmで、長さは16m以上を測る。溝の勾配は東から西にやや深くなっているが、西側は山裾がせまっているため、全体としては東に流れる構造だったと推定される。溝の上面から6世紀中葉の須恵器、土師器が多量に出土したが、溝底からの出土遺物は皆無であった。おそらく、溝の廃絶時期に廃棄したものと思われる。溝は、弥生時代の住居が廃止された後、古墳時代中期までの間に使用されたものと考えられる。この溝の両側に各1列20cm前後の柱掘形が50cm～1mの間隔で並んでおり、おそらく、溝に沿って柵をめぐらしていたものと推定される。

今回掘削したトレンチの西側では整地面があり、下から弥生時代の遺物が出土するため、弥生時代には西側が低くなっていたものを古墳時代に盛土し、溝を造ったと考えられる。

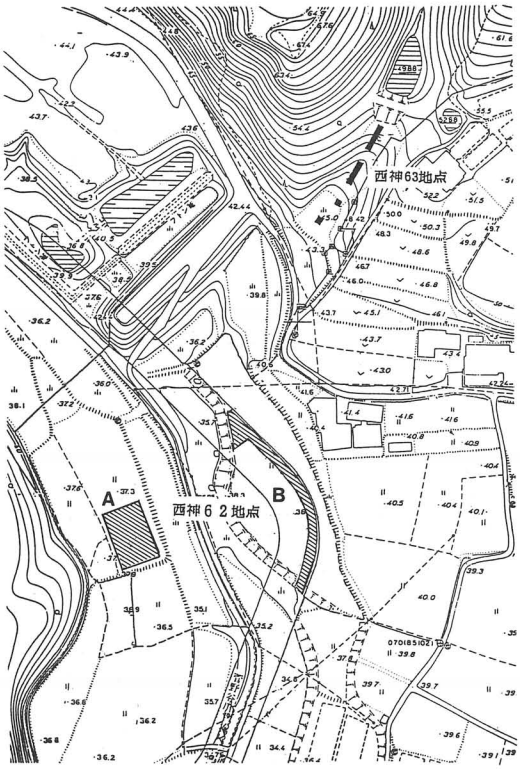


fig. 8　第62地点、第63地点調査区設定図

fig. 9 第62地点A遺跡中世土坑遺物出土状況

第63地点

第63地点は、62地点の北約200mに位置し、現在は竹藪になっている小さな谷筋である。分布調査では、サヌカイト片が採集されている。

谷筋に沿って上下2段の耕作面跡があり、上段には2m×10mのトレンチ2か所、下段面には2m×2mのグリッド2か所を設定し、掘削したが、いずれ

も、後世に谷筋を埋めて耕作したらしく、１ｍ前後掘削しても盛土であった。その上、湧水のため掘削不可能となり、調査を打ち切った。

第62地点Ｂ遺跡

１．はじめに　第62地点Ｂ遺跡は、菅野谷川の左岸、62地点Ａ遺跡の北東50ｍの河岸段丘上にある。用水路予定地（幅12ｍ、長さ75ｍ）のうち、北側に幅３ｍのトレンチを設定して、遺跡確認調査を行った。

現地表からの層序は、地表下40cmまで耕土と床土で、その下が灰色砂質土層・黄褐色粘質土層（地山）となっている。灰色砂質土層中からは、古墳時代須恵器、鎌倉時代の土師器、須恵器が出土した。

２．検出遺構　遺構はすべて、黄褐色粘質土の地山から検出された。

検出した遺構は、古墳時代竪穴住居址１、溝１、鎌倉時代土坑１、自然河道２、ピット約80か所である。ピットの中には、掘立柱建物の柱掘形と考えられるものもあるが、建物としてのまとまりを確認することはできなかった。

竪穴住居址　竪穴住居址は、１辺4.8ｍ、深さ約25cmの方形竪穴に柱間寸法2.5ｍ等間隔の支柱をもっている。壁溝は東辺・南辺で幅20cm、深さ５cm前後で掘られていた。北辺では、壁溝はなく、30cm間隔で小ピットが５か所存在した。遺物は埋土内から須恵器坏身が２点出土している。

古墳時代溝　溝は、幅70cm、深さ30cmのＵ字溝である。遺物は、埋土内から須恵器提瓶が出土している。

中世土坑　中世土坑は、長径80cm、短径50cmの楕円形土坑で土坑内より、須恵器甕、埦、土師器羽釜、小皿が出土している。

fig. 10　竪穴住居址、古墳時代溝

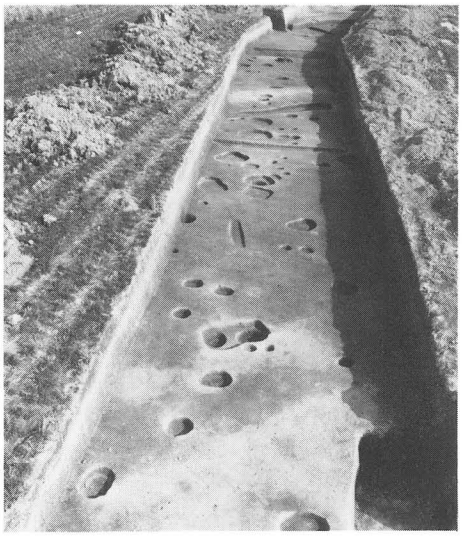


fig. 11　トレンチ西部全景

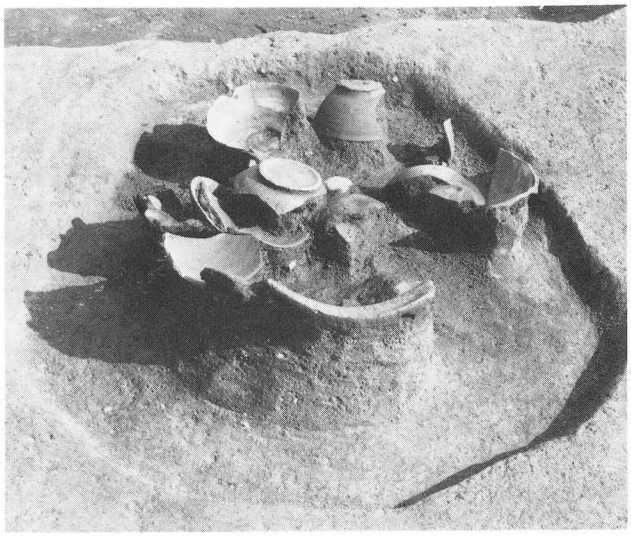


fig. 12　中世土坑遺物出土状況

3．まとめ　以上のように、62地点Ｂ遺跡においては古墳時代・中世の遺構を検出した。したがって、用水路敷全域に本格的な調査が必要である。

第30－１号墳・第31－３号墳・第32－１・２号墳

1．はじめに　第30－１号墳、第31－３号墳、第32－１・２号墳の調査は、昭和45年度に実施していたが、当時は保存の可否について未定であったため、その調査は古墳の埋葬主体部を中心としたものにとどめていた。

今回、これら古墳の存在する尾根一帯が造成されることになり、前回未調査である主体部掘形、墳丘を中心に、再度調査を実施することになった。

2．調査概要　第30－１号墳

東から西にのびる標高約 110 ｍの尾根上に位置する。墳丘は、南西部が崩れ、約½が失われている。前回調査の結果、古墳は径16ｍ、高2.2ｍの円墳で、主体部は墳丘のほぼ中央にある割竹形木棺で、現存する規模は、棺部で長1.3ｍ、幅0.4ｍ、掘形規模長2.7ｍ、幅1.9ｍである。主体部については、「二重の掘形を掘って行われており、下部は地山を掘り込んでいる。短軸方向の断面では、地山は両端が少し落ち込み、溝状になっており、その埋土には礫が混入して、排水溝ではないかと推定」している。また、前回の調査では、二重の掘形の内側掘形の埋土を取り除き[註]、粘土床と棺側の粘土をしいた上に形成された礫床を検出し、南北の両棺側の礫床上から、鉄剣と束ねられた鉄鏃が出土した。

今回の調査は、未調査である主体部掘形を中心に行った。棺部にあたる土坑底は一段掘り込んであり、二段掘りの土坑となっている。また粘土床は、内側掘形内に敷かれ、掘形全面には及んでいなかった。礫は、棺側部と棺底部にあ

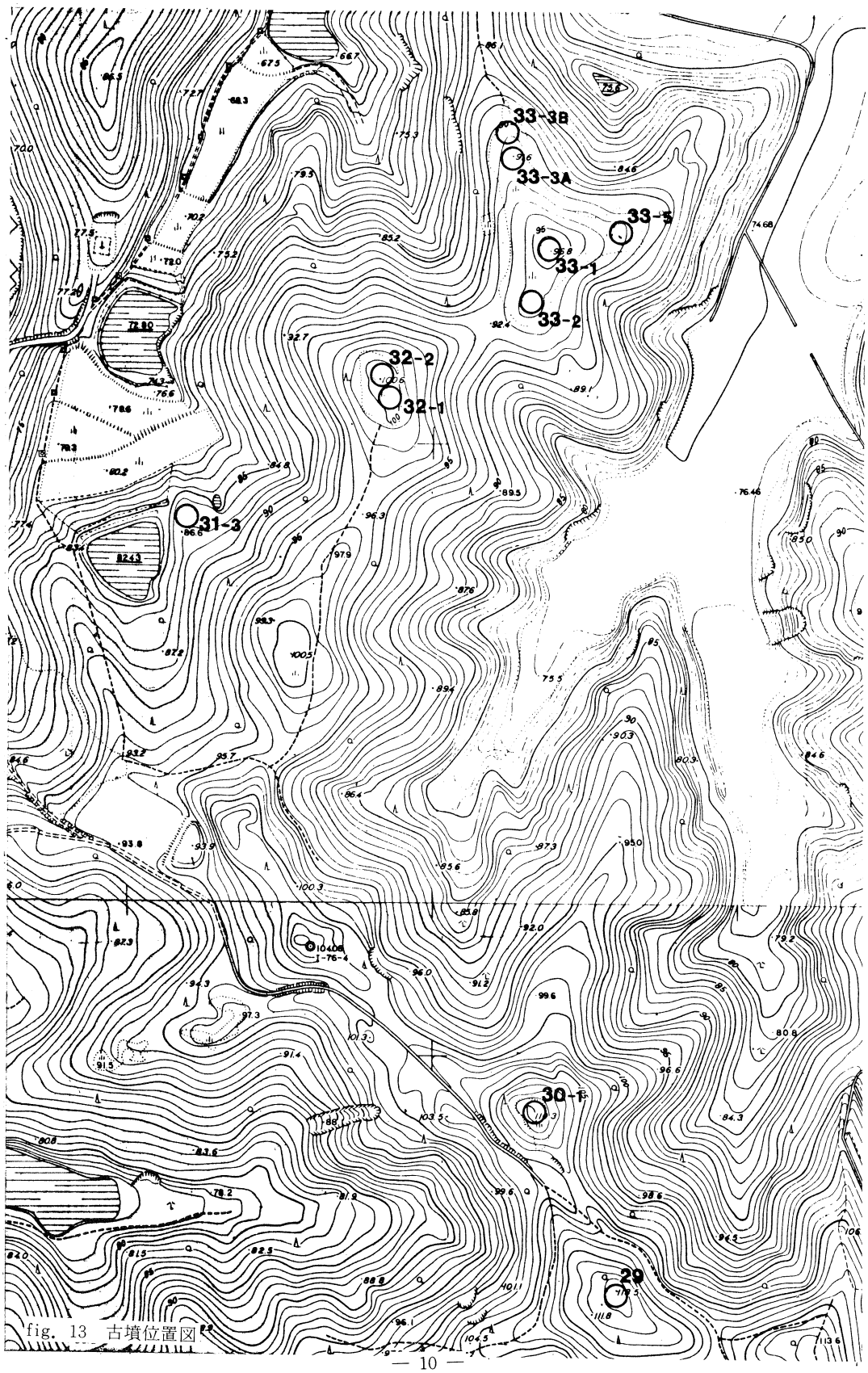


fig. 13　古墳位置図

たる一段低く掘り込んだ土坑の肩部の粘土内にも落ち込んだ状況で検出された。このことから、粘土床を築き、棺を置いたのち、礫を棺側に詰めたと推定される。朱は、粘土床全面にみられ、粘土内にも２～４cmの厚さで浸み込んでいた。

木槨様痕跡

外形の掘形埋土は、灰白色と黄褐色が混じった粘土で、この埋土を除き、掘形全体を検出した結果、粘土床との境に、幅６～７cm・深さ0.5cm程度の溝が検出された。この溝は、H状を呈しており、木槨様の板材の痕跡であると推定される。埋土は灰白色粘質土で、底面付近は灰白色の細砂質土であった。

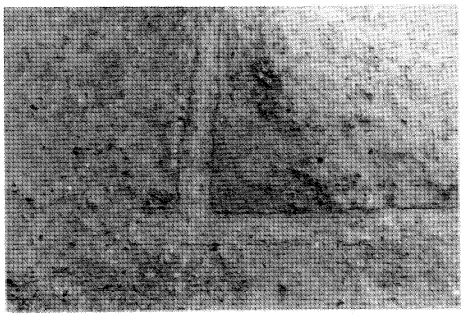


fig. 14　木槨様痕跡

また、小口部のほぼ中央に円形のピットが検出された。前回調査の断面観察で排水溝と推定していたものも、円形のピットであることが明らかとなった。このピットは、木槨様の痕跡と組み合わせる際に柱状のもので補強したのではないかと思われる。

以上の調査結果から、主体部の構築法を推定すると、二段掘りの土坑をつくり、木棺を囲むように板材で組合せ式の木槨様のものをつくり、外形を埋め、その後、粘土床をつくり木棺を納め、棺側に円礫を敷いて、副葬品を埋納したと考えられる。

fig. 15
第30－１号墳
墳丘測量図

fig. 16　第30－1号墳
遠景（南から）

fig. 17　第30－1号墳
主体部(今回調査前)

fig. 18　第30－1号墳
主体部（調査後）

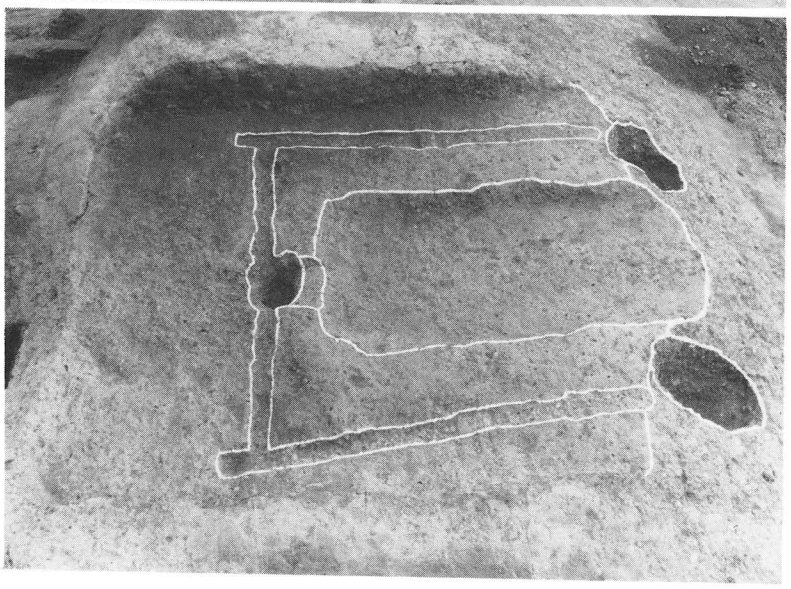
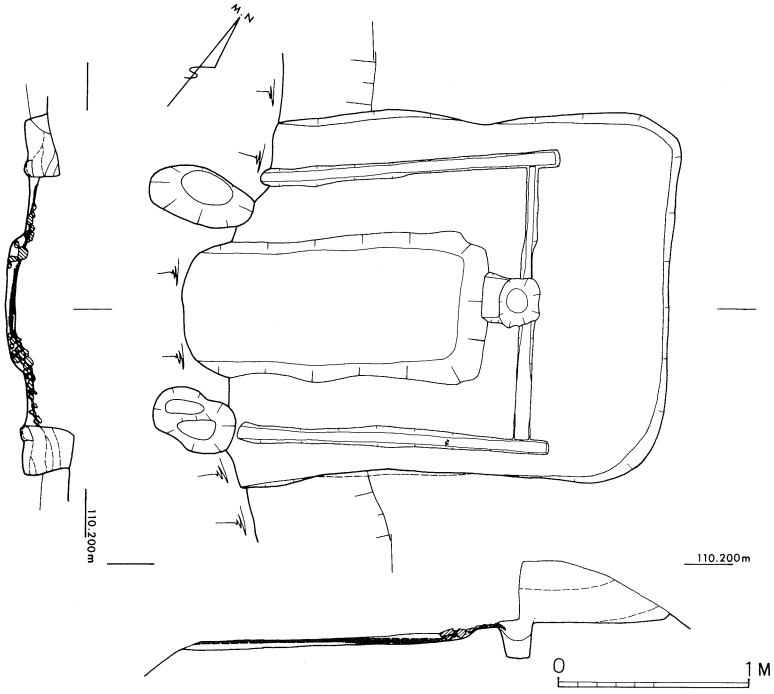


fig. 19　第30－１号墳
主体部掘形実
測図



第31－３号墳

第30－１号墳から西へ延びた尾根が、北と南西の二方向に別れるあたりの北側尾根西側の斜面に位置し、標高は約90ｍである。

前回調査の結果は、「主体部は流失してしまったようで検出されなかったが、周溝らしきものが墳丘の北東および南西部において検出された。周溝付近の流土から多数の須恵器片が出土し」墳丘の東部で、径約80cmの不整円形の近世墓坑が検出された。墳丘、遺構[註]については、不明な点が多く、前回調査では、明らかにされていなかった。

前回調査を行った部分では、その後の土の流失が著しく、今回の調査で新たな知見は得られなかった。東側拡張部では、著しい地形の傾斜変換が見られ、墳丘裾と思える範囲が露われ、尾根を切り、墳丘裾を造り出していることが明らかとなった。尾根を切って墳丘裾を造り出した部分は周溝状を呈している。

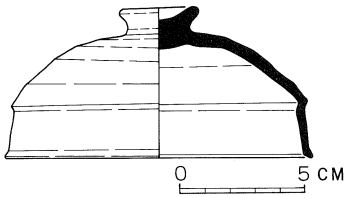


fig. 20　第31－３号墳出土須恵器

流土中より、須恵器片とサヌカイト片が出土した。

fig. 21　第31－3号
墳全景

第32－1・2号墳

標高約 100 m の尾根頂部に位置している。

前回の調査では、「両地点ともほとんど墳形をうかがい知ることができないほどに墳丘は流失しており、わずかに遺物の散布状態から古墳と認めることができ」[註]、1号墳の平坦面で主体部の痕跡らしき浅い長方形の落込みが検出された。また2号墳では、遺構らしきものは検出されなかった。

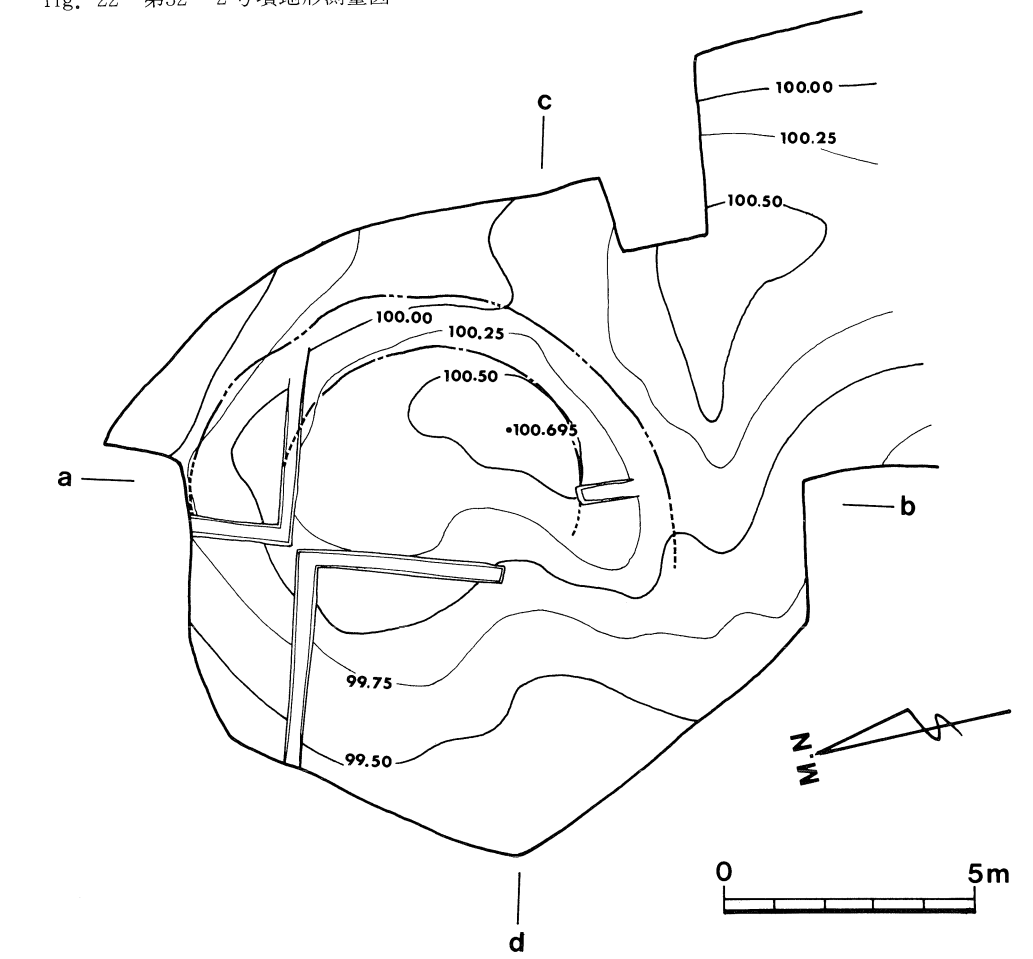
今回の調査結果で、1号墳については何ら墳形、規模、その他の遺構は検出されなかったが、2号墳は径約10mの円墳であることが明らかとなった。2号墳は、墳頂部から西半部にかけて大きく流出しており、すでに地山が現われ、遺構は検出されなかったが、前回未調査の南東部で、周溝状の落込みが検出された。

周溝は、尾根が続く南側を切って墳丘を造り出すために設けられたと考えられ、この埋土より須恵器の有蓋高坏の蓋1、身4個体、壺1が出土した。

墳丘規模は、径10m、現存高0.7mであった。周溝埋土より出土した須恵器より、古墳の造営された時期は5世紀末と考えられる。

註　神戸市教育委員会『西神ニュータウン内の遺跡　中間報告Ⅰ』1972.11

fig. 22　第32－２号墳地形測量図



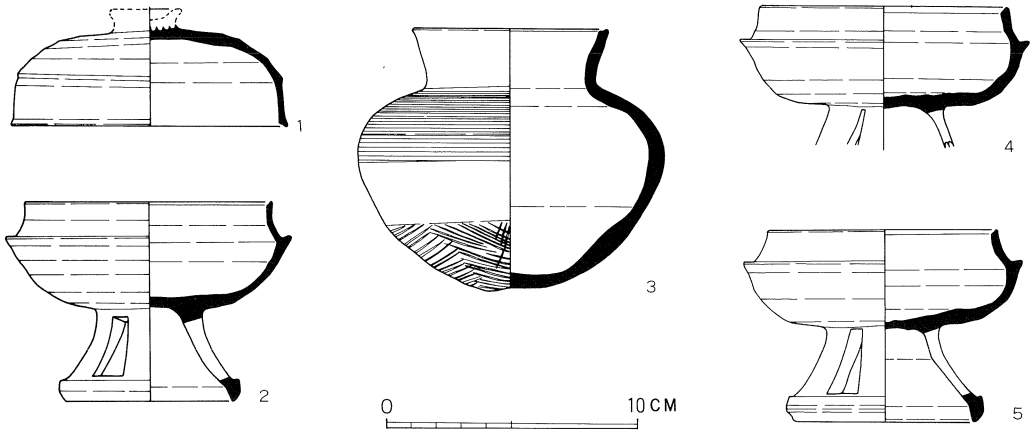


fig. 23　出土遺物実測図　　１～５・第32－２号墳

西神中央線内長谷遺跡

1．はじめに　神戸市垂水区櫨谷町長谷周辺は昭和54年度神戸市池谷・福谷土地改良事業に伴う埋蔵文化財調査によって、鎌倉時代後期の遺跡が存在する地域として確認されたところである。

昭和54年度の調査では、西神中央線路線敷の北東方で中世火葬墓２基を検出した。また、その周辺に設定した試掘坑では須恵器鉢の口縁部片、土師器羽釜片が出土しており、付近には中世火葬墓群が存在すると考えられた。また、南東方の丘陵尾根端に光松古墳が存在していたが、戦前、村立病院建設に伴って破壊された。その際、銅鋺が出土したといわれている。

以上のように、西神中央線長谷地区付近には埋蔵文化財の存在が確認されており、西神中央線建設予定地にも遺跡の存在が考えられた。そのため、遺跡確認調査を実施することにした。

2．調査概要　調査地は櫨谷川によって形成された平野を西神中央線が横切る幅40ｍ、長さ約400ｍの路線敷の部分である。

路線敷の中央ライン上に任意の試掘坑を設定して調査を行った。設定した試掘坑（以下T.Pと略称）は県道小部明石線より北に３か所、南に８か所、合計11か所である。

T.P1　土層の層序は、地表下75cmで中世土器片を含む遺物包含層、その下が黄褐色粘質土の地山となっている。遺物包含層は厚さ50～70cmあり、暗褐色砂礫層と茶褐色粘性砂質土の二層に分かれる。遺物包含層は段丘傾斜面に沿って北に厚く堆積していた。また、地山を掘り込んでピットが４か所検出された。出土遺物は遺物包含層やピット内から、須恵器甕・片口鉢・土師器羽釜・小皿などが出土した。

T.P2　地表下50cmで遺物包含層（厚さ15cm前後）となり、その下は黄褐色粘質土の地山となる。この地山を切り込んで、遺構が検出された。遺構は長さ2.9

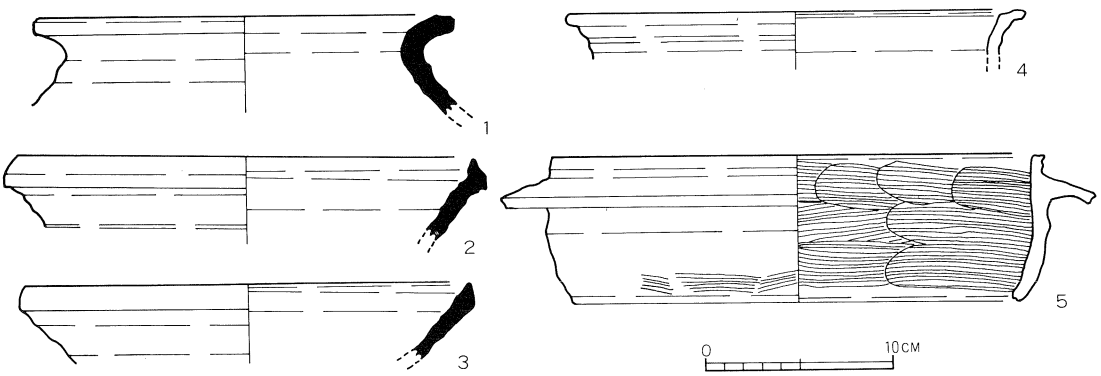


fig. 24　T.P１出土遺物

m、幅1.6m、深さ10～15cmの長方形土坑である。長方形土坑の埋土は黒灰色土で底は赤く焼けている。土坑の北側の小口には50cm外側に張り出した部分があり、一段深く掘り込まれている。張り出し部は長径90cm、短径70cmのナスビ形を呈する。張り出し部には灰層のみが堆積していた。土坑底には張り出し部に近接して深さ6cm、直径20cmのピットが検出された。

T.P3　地表下60cmで黄褐色粘質土の地山となり、地山が北に傾斜している。表土層や床土層で遺物が採集されたが、地山面で遺構は発見されなかった。

T.P4　地表下50cmで暗褐色粘性砂質土の遺物包含層となり、須恵器、土師器の細片が出土している。遺物包含層の下は黄褐色粘質土の地山となる。地山を掘り込んで深さ10cmの黒灰色土を埋土とする落ち込みが試掘坑の南辺で検出された。

T.P5　地表下40cmで暗褐色粘性砂質土の遺物包含層（厚さ10cm）がみられ、その下層は黄褐色粘質土の地山となる。地山面からは遺構を発見することができなかった。

T.P6　表土下20cmで黄褐色粘質土の地山となり、遺構・遺物は発見されなかった。

T.P7　地表下60cmで暗褐色粘質土（厚さ20cm）の遺物包含層がみられ、遺物包含層からは須恵器、土師器の細片が出土している。その下層は黄褐色粘質土の地山となる。地山面からは遺構を発見することができなかった。

T.P8　地表下50cmで暗褐色粘性砂質土（厚さ5cm）の遺物包含層がみられ、その下層は黄褐色粘質土の地山となっている。試掘坑の北東隅で不定形の土坑を検出した。土坑内からは遺物の出土はない。

T.P9　地表下60cmで暗褐色粘性砂質土（厚さ5cm）の遺物包含層（土器細片を含む）があり、その下層は黄褐色粘質土の地山面である。地山面からは遺構を発見することはできなかった。

T.P10　地表下40cmで褐色砂礫層となり、遺構・遺物は発見されなかった。

T.P11　地表下60cmで黄褐色粘質土の地山となる。表土層、床土層からは遺物が出土するものの、T.P11からは遺構を発見できなかった。地山直上からサヌカイト・フレークが出土している。

3．まとめ

以上のようにT.P1・2・4・8で遺物を発見し、遺構を検出した。また、T.P3・5・7・9・11で遺物を発見した。特にT.P2の試掘坑では昭和54年度の調査で検出された中世火葬墓と同様のものを検出した。西神中央線路線敷においても鎌倉時代後期の中世墓地がひろがっているものと考えられる。

2．神出古窯址群（かんで）

1．調査経過　神出町北・田井地区の土地改良事業は、昭和55年度から開始された。今年度の工事範囲内では神出町北で宮ノ裏地区、神出町田井で釜ノ口地区の田圃で多量の遺物が採集された。

そのため、遺跡の存在を確認する試掘調査を実施したところ、灰層が確認された。神出地域は須恵器を焼いた窯址が存在するところとして知られており、灰層の発見は、その周辺に窯址が存在していることを示唆している。

今年度の調査は窯体の検出と灰原の範囲を確認し、窯址の実体を明確にして保存に必要な資料を得ることを目的とした。

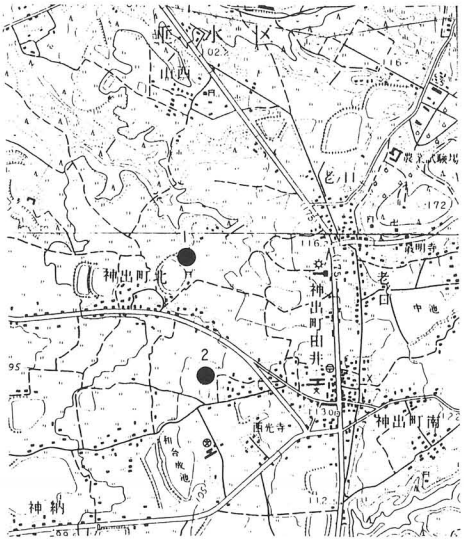


fig. 25　位置図　1．宮ノ裏支群
2．釜ノ口支群

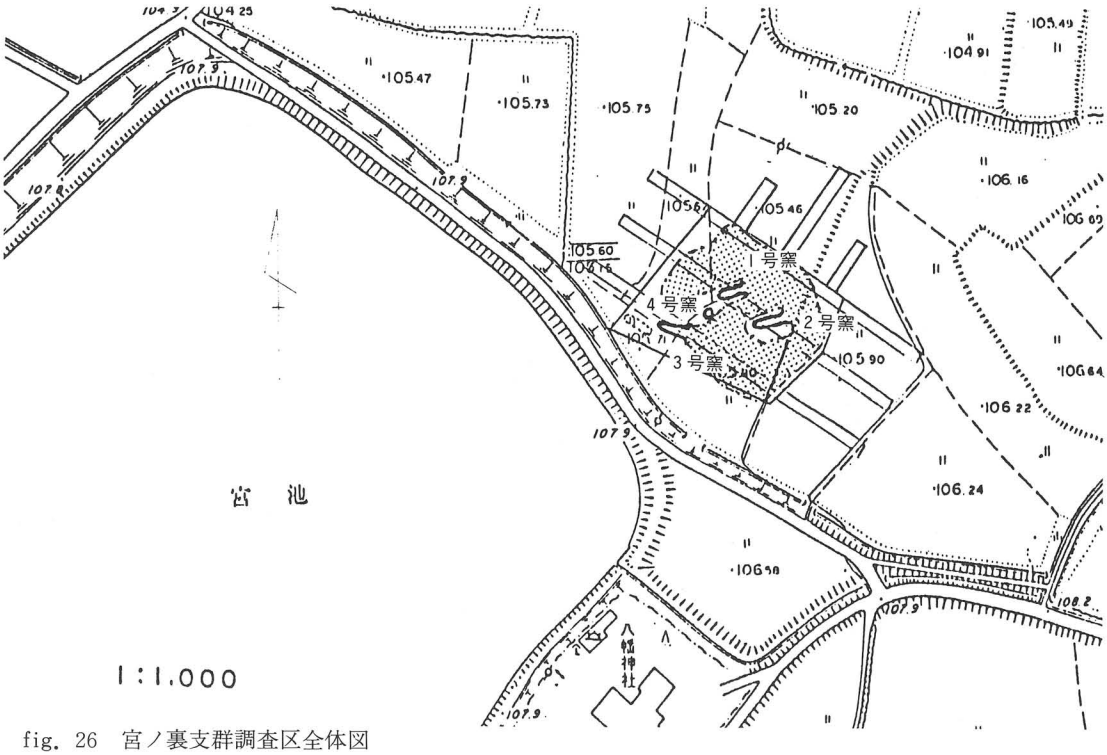


fig. 26　宮ノ裏支群調査区全体図

fig. 27　宮ノ裏支群全景（北から）

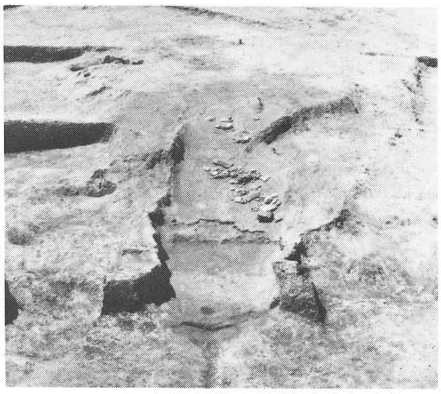


fig. 28　宮ノ裏支群１号窯（北から）

fig. 29　宮ノ裏支群４号窯（ダルマ窯）

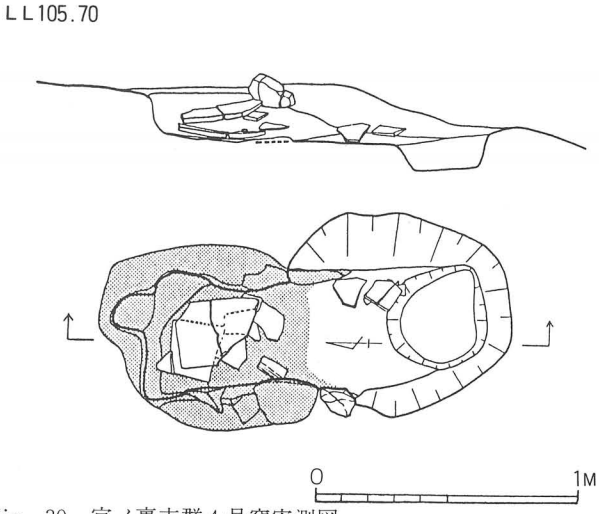


fig. 30　宮ノ裏支群４号窯実測図

２．調査概要　(1). 宮ノ裏地区

遺　構　調査は灰層が広がる約900 m²の範囲で実施した。灰層の厚さは地区により異なるが30cm程度、最も厚いところで70cmである。調査地付近は開墾時に削平されたため地形が平坦になっており、窯体の多くは破壊を受けているものと予想された。ところが、調査の結果、現地形の大半が盛土により形成されていたことと、窯体の傾斜が緩やかであったため、焼成部の一部と煙出しは失なわれているものの、残存状況は比較的良好であった。

今回検出した窯体は、窖窯３基と「ダルマ窯」と呼ばれる小型の窯１基である。各窯体の大きさは、以下のとおりである。

窯番号	現存長	最大幅	現存高	焚口方向	時　　期
１号窯	5.2m	1.8m	0.4m	東	12C中～12C後
２号窯	4.7m	1.7m	0.4m	東	〃
３号窯	1.5m	1.5m	0.2m	南東	12C末～13C初頭
４号窯	0.8m	0.5m	0.2m		〃

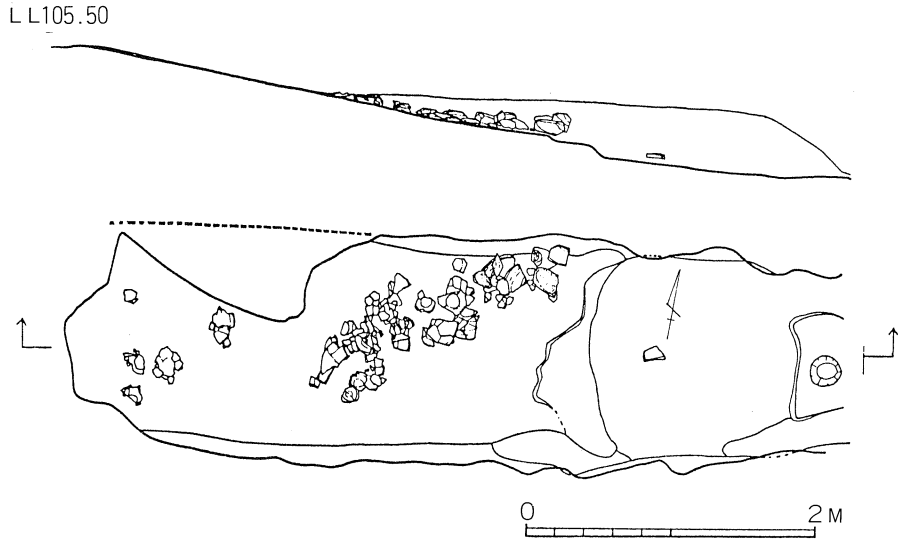


fig. 31　宮ノ裏支群１号窯実測図

遺　物　遺物は灰原・窯体内より、整理用コンテナ（28ℓ）に850箱以上も出土した。出土遺物は、捏鉢・椀・皿などの須恵器と瓦で甕・壺は、ほとんどみられない。この内、大部分は捏鉢で椀・皿は比較的少量である。

瓦は軒平瓦・軒丸瓦・丸瓦・平瓦で道具瓦はみられない。瓦当文様は、軒丸瓦は巴・蓮華文、軒平瓦は連巴・唐草文などで平安後期の特徴をもつものである。

(2). 釜ノ口地区

遺　構　Ａ・Ｂ両地点で合計７基の窯体とそれに伴う灰原を検出した。Ｂ地点の６基の窯体は標高104～105ｍの緩斜面に焚口を北に向け、谷と直交して構築されていた。２・３号窯は、窯体の両側に排水溝を付設し、２号窯には燃焼部と焼成部の間に大きな段を設けている。４・６・７号窯は大部分が削平され、燃焼部の床面が残る程度であった。

各窯体の現存する大きさは以下のとおりである。

窯番号	現存長	最大幅	現存高	出　土　遺　物	時　期
１号窯	7.2m	1.0m	0.4m	鉢・瓦	12世紀末
２号窯	2.9m	1.6m	0.4m	鉢・椀・瓦	〃
３号窯	4.0m	1.6m	0.6m	鉢・椀・瓦	〃
４号窯	1.4m	0.8m	0.1m	鉢・椀・瓦	〃
５号窯	4.2m	2.6m	0.9m	甕・椀・鉢・皿・瓦	11世紀末
６号窯	2.9m	1.6m	0.4m	鉢・椀・瓦	12世紀末
７号窯	1.7m	1.6m	0.2m	鉢・椀・瓦	〃

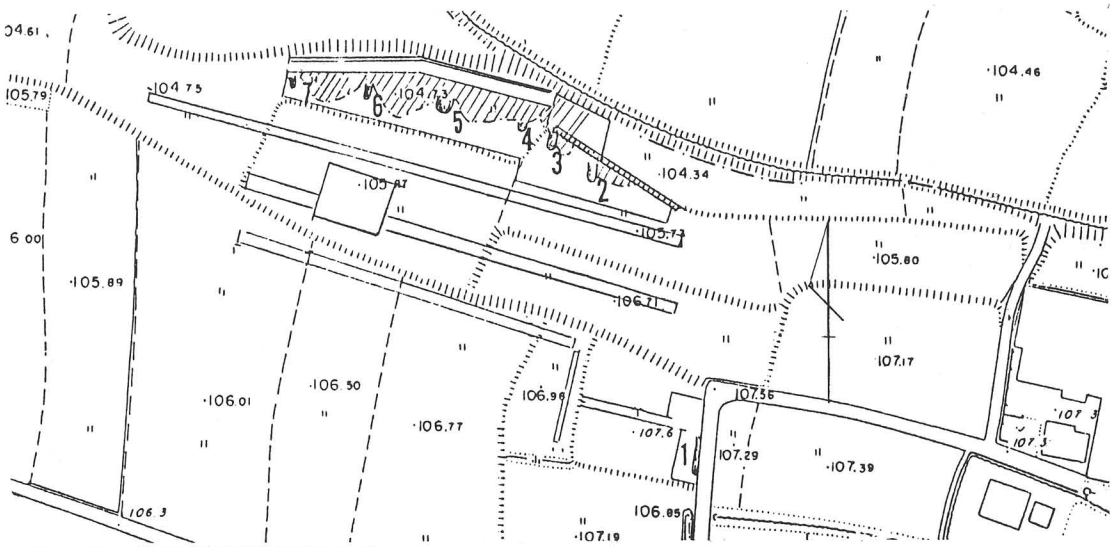


fig. 32　釜ノ口支群調査区設定図

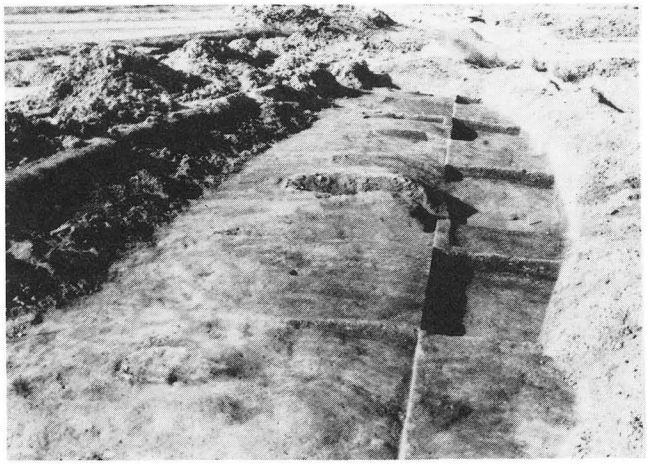


fig. 33　釜ノ口支群全景（東から）

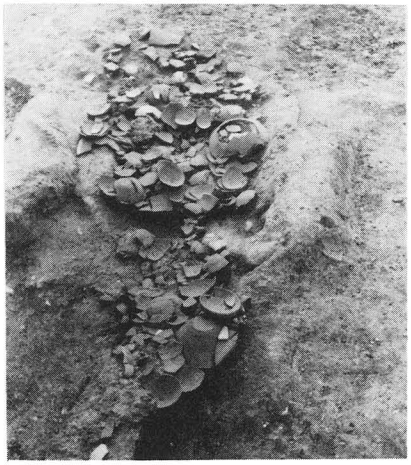


fig. 34　釜ノ口支群6号窯（北から）

fig. 35　釜ノ口支群3号窯（北から）

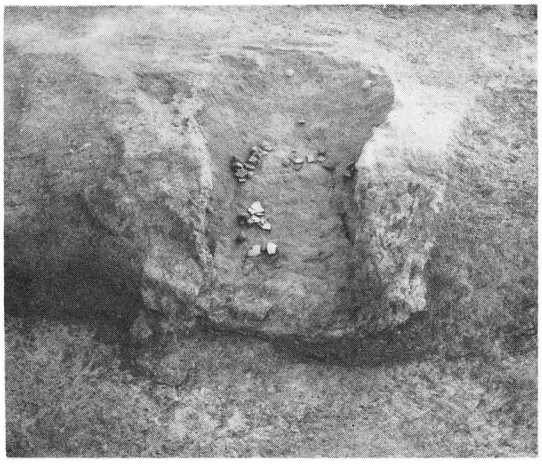


fig. 36　釜ノ口支群5号窯（北から）

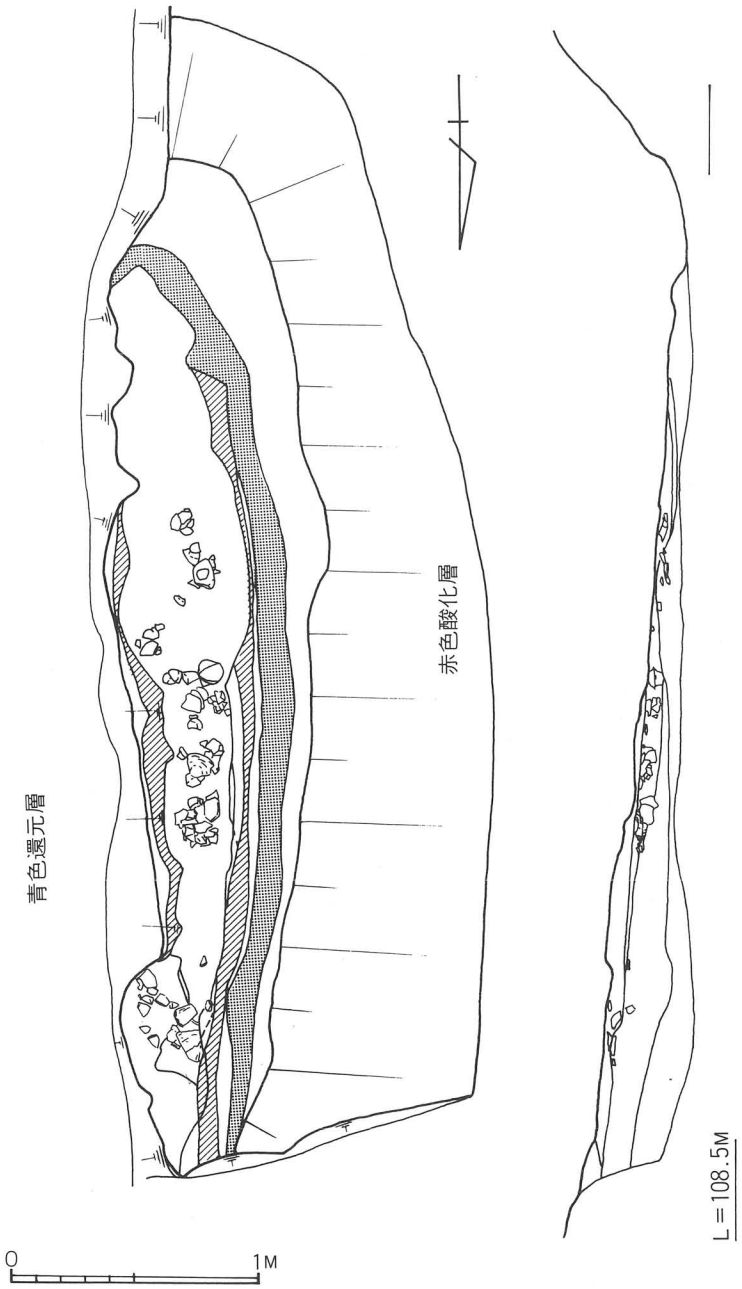
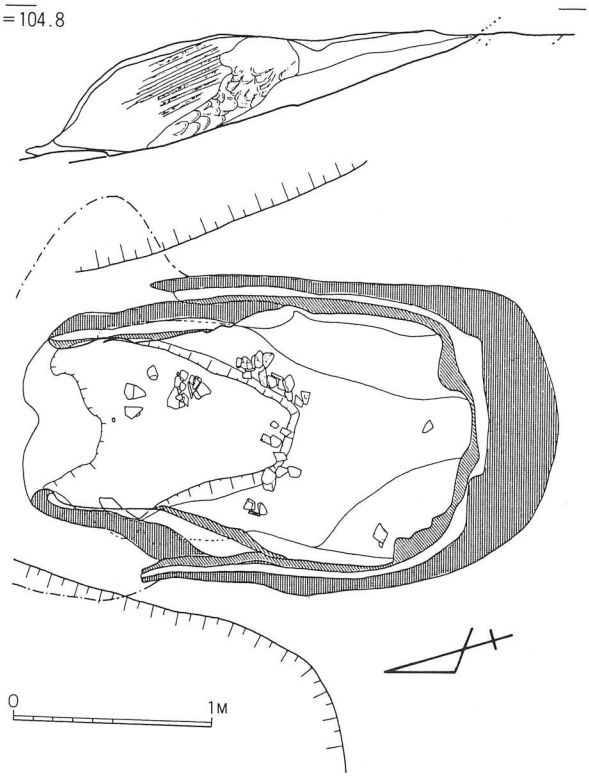


fig. 37　釜ノ口１号窯実測図

fig. 38　釜ノ口５号窯実測図



遺　物　窯体、灰原より出土した土器・瓦の量は整理用コンテナ（28ℓ）で850箱を超える。この内大部分は灰原から出土したもので占められているが、２～７号の各窯体内からも相当量の遺物が出土した。２～４・６・７号窯では、捏鉢を主として埦・瓦・皿などの器種を焼成していたと考えられる。

しかし、他の窯と時期を異にする５号窯では埦、甕を主体として瓦などを焼成した他、少量であるが壺・皿・捏鉢などの器種も焼いたものと考えられる。

また、３号窯体内より鬼瓦が出土しているほか、瓦は２号窯・６号窯の灰原より多数出土している。２号窯灰原より出土した瓦当は、忍冬唐草文軒丸瓦、連巴文軒平瓦、宝相華唐草文軒平瓦などがある。

fig. 39　釜ノ口３号窯出土鬼瓦

６号窯灰原より出土する瓦当には２号窯灰原で出土した忍冬唐草文軒丸瓦と同文異范の軒丸瓦が出土するほか、巴文・蓮華文を持つ軒丸瓦が出土している。また、軒平瓦では、偏行唐草文が変形して、幾何文へと移行する過渡的な文様が出土している。

3．まとめ　窯址は窖窯（宮ノ裏１～３号・釜ノ口２～６号）とダルマ窯（宮ノ裏４号）の２種がある。窖窯の床面傾斜角度は時期の異なる釜ノ口５号窯（11Ｃ末、傾斜角度20°）を除いて大部分が10°未満である。どの窯址とも２～３回の修復が認められ、焚口付近での窯体の延長を伴っている。

また、宮ノ裏１・２号窯では、窯体を築く際、周辺部から土を取り、盛土をして築山状にした部分を穿って、窯体を構築している。釜ノ口２・３・６号窯でも同様の方法によって作られた可能性が高い。

支群の構成　今回調査した宮ノ裏支群は４基、釜ノ口支群は７基で支群を形成している。釜ノ口支群では、他に灰原と思われるものが存在していることから、新田開発時に消滅したものと考えられる。

このように各支群は４～10基程度の窯を築窯して、操業していたものと思われる。老ノ口・茶山・拍子ケ池の各支群は神出古窯址群と総称されこれまでかなり広範な地域を対象として呼ばれてきた。この場合、宮ノ裏・釜ノ口の両地区はこれらの支群内の小支群（単位）と呼ぶべきであると考える。

遺　物　**須恵器**　各窯体の時期は、出土する遺物から判断して、11世紀後半と考えられる釜ノ口５号窯を除き、他の窯体は12世紀中葉～13世紀初頭のものと考えられる。釜ノ口５号窯では埦・甕を主体として、瓦・壺・皿・捏鉢など多くの器種を焼成している。

これに対し、12世紀中頃～13世紀初頭と考えられる他の窯では、捏鉢・瓦を主体とし、わずかに埦などを焼成するのみで、甕・壺などはほとんど出土しない。こうした焼成器種の変化は古代末～中世の流通構造の変化と密接に関連するものと考えられる。

瓦　大部分は未整理であるため詳細については、不明な点が多い。しかし、神出古窯址群で焼かれた瓦が京都の各寺院で出土していることは従来より知られているところである。

今回の宮ノ裏・釜ノ口の両支群から出土した瓦はその主たる消費地が院政期の宮址や勅願寺院であったと考えられる。宮ノ裏・釜ノ口の両支群で出土した瓦当の同文関係の多くが、尊勝寺をはじめとする六勝寺、法金剛院、鳥羽離宮などに求められることも、これらの傍証となろう。

fig. 40　釜ノ口２号窯灰原出土忍冬唐草文軒丸瓦

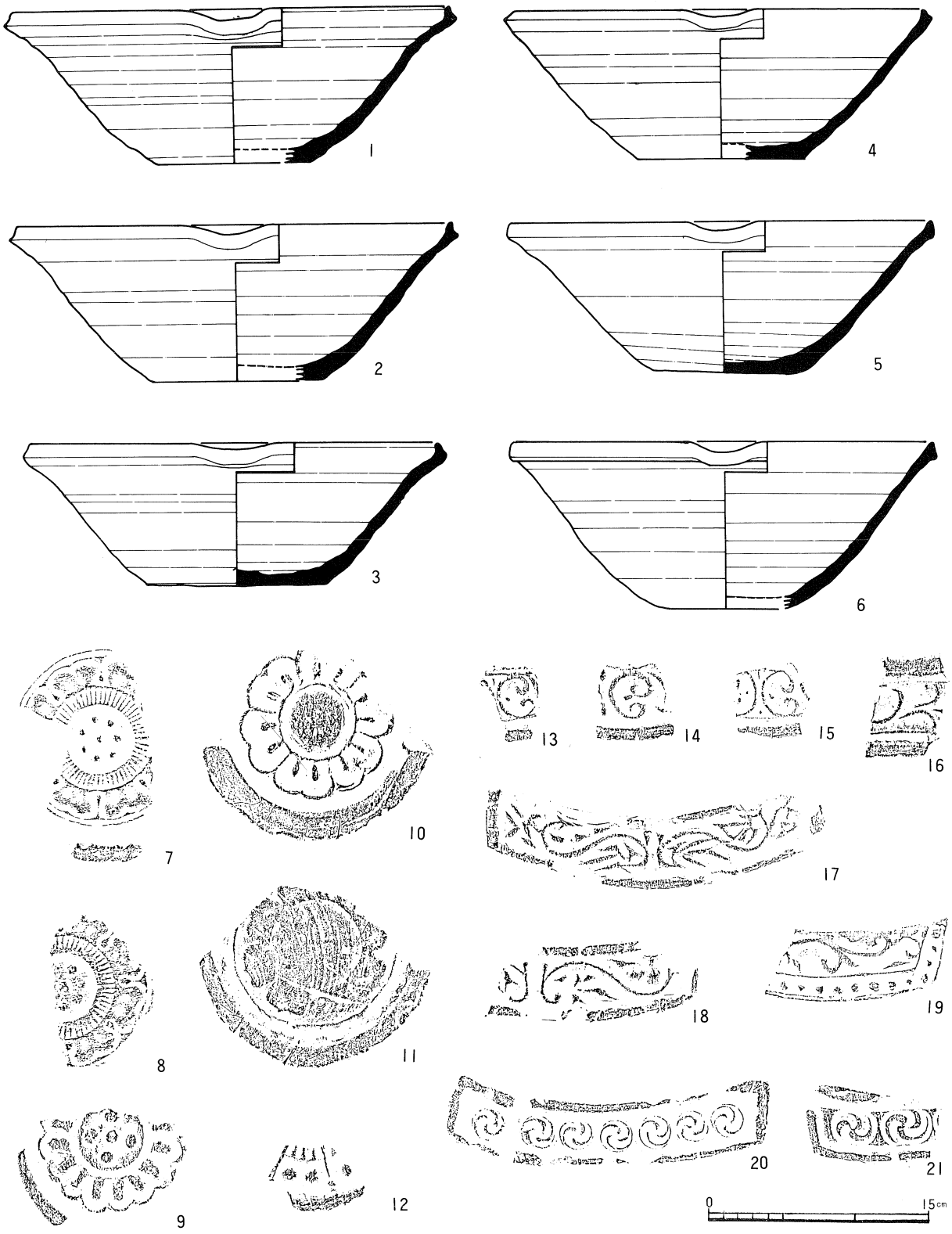


fig. 41　宮ノ裏支群出土遺物

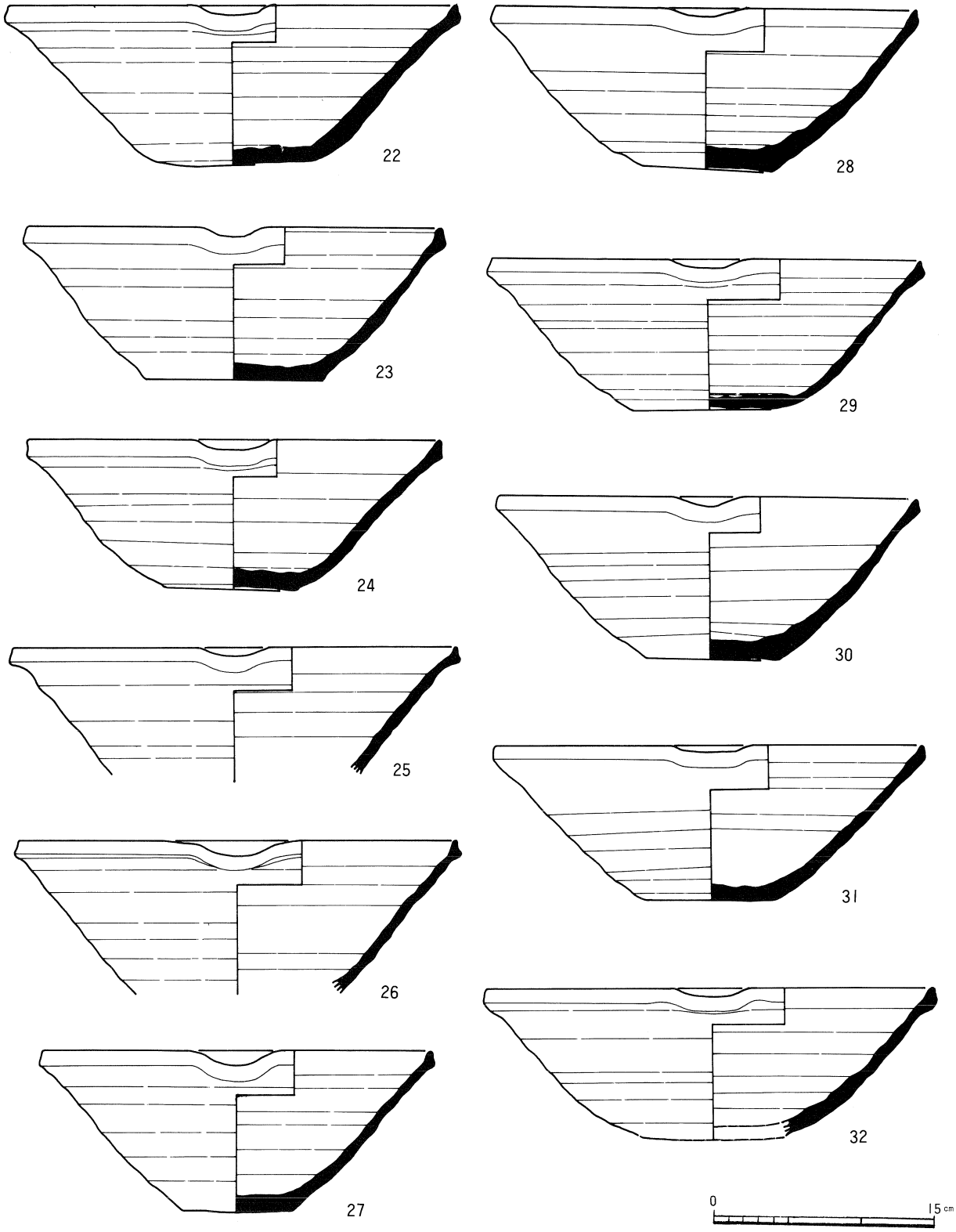


fig. 42　釜ノ口支群出土遺物

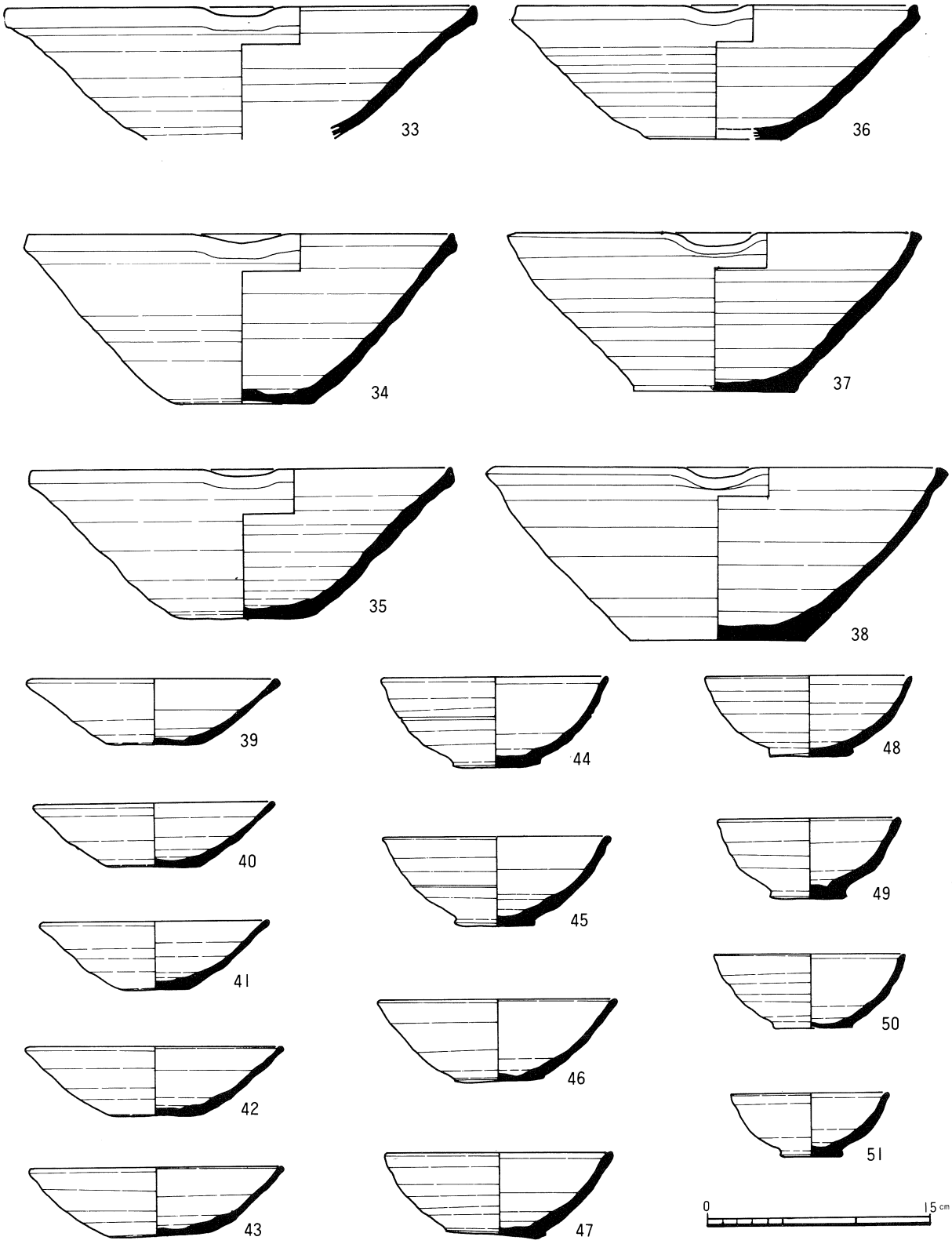


fig. 43 釜ノ口支群出土遺物

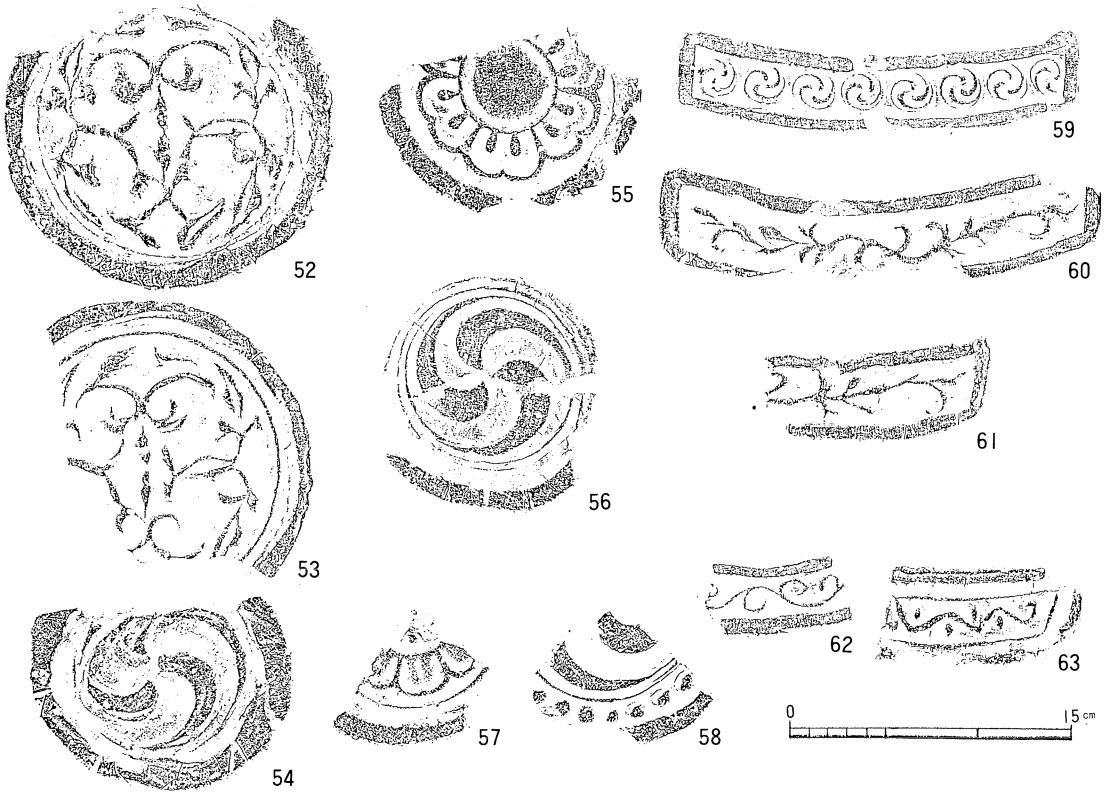


fig. 44　釜ノ口支群出土遺物

遺物出土地区一覧表

番号	出　土　地　区	番号	出　土　地　区	番号	出　土　地　区
1	宮ノ裏　1—2号窯灰原	22	釜ノ口　1号窯体内	43	釜ノ口　6号窯体内
2	〃　〃　〃　〃	23	〃　〃	44	〃　5号窯灰原
3	〃　〃　〃　〃	24	〃　〃	45	〃　〃
4	〃　〃　〃　〃	25	〃　2号窯体内	46	〃　〃
5	〃　3号窯　〃	26	〃　〃	47	〃　〃
6	〃　〃　〃	27	〃　3号窯体内	48	〃　〃
7	〃　包含層	28	〃　〃	49	〃　〃
8	〃　〃	29	〃　〃	50	〃　〃
9	〃　1—2号窯灰原	30	〃　〃	51	〃　〃
10	〃　〃　〃　〃	31	〃　〃	52	〃　2号窯灰原
11	〃　包含層	32	〃　〃	53	〃　6号窯灰原
12	〃　〃	33	〃　7号窯体内	54	〃　包含層
13	〃　〃	34	〃　〃	55	〃　〃
14	〃　〃	35	〃　〃	56	〃　〃
15	〃　〃	36	〃　〃	57	〃　〃
16	〃　〃	37	〃　5号窯灰原	58	〃　〃
17	〃　3号窯灰原	38	〃　〃	59	〃　2号窯灰原
18	〃　〃　〃	39	〃　2号窯体内	60	〃　〃
19	〃　包含層	40	〃　〃	61	〃　〃
20	〃　3号窯灰原	41	〃　〃	62	〃　6号窯灰原
21	〃　〃　〃	42	〃　6号窯体内	63	〃

3．池谷（いけたに）遺跡

1．はじめに　池谷遺跡は櫨谷川上流域の河岸段丘上に立地している。これまでの試掘調査によって、遺跡の範囲は櫨谷町長谷の北部から福谷の南部に及んでいることがわかっている。

昭和54年度の調査では櫨谷川左岸櫨谷町長谷の段丘上に中世火葬墓を検出した。昭和55年度の調査では櫨谷川左岸櫨谷町池谷の段丘上から掘立柱建物２棟を検出し、柱穴内より須恵器片口鉢が出土している。

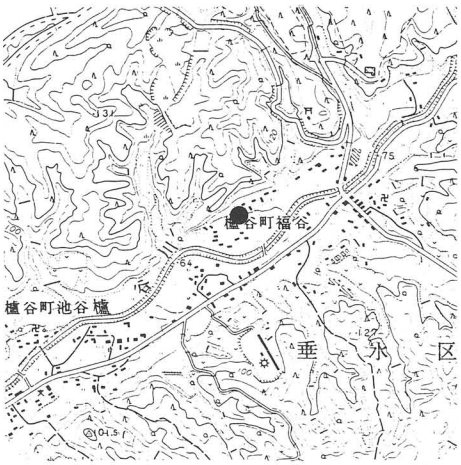


fig. 45　位置図

以上のように、池谷遺跡は櫨谷川の比較的広い河岸段丘上に中世集落及び墓域を形成していたと考えられる。

今回調査を行った地点は、櫨谷川右岸の櫨谷町福谷に所在する。昭和56年７月から試掘坑を12か所設定して調査を行った。No.12試掘坑から、遺物包含層とピット１か所を確認した。No.12試掘坑の周辺は、山際から櫨谷川の堤防にむかって南北幅約100ｍ前後の河岸段丘を形成している。東方約１kmには中世城郭端谷城の枝城、城ケ谷砦と伝えられるところが存在している。

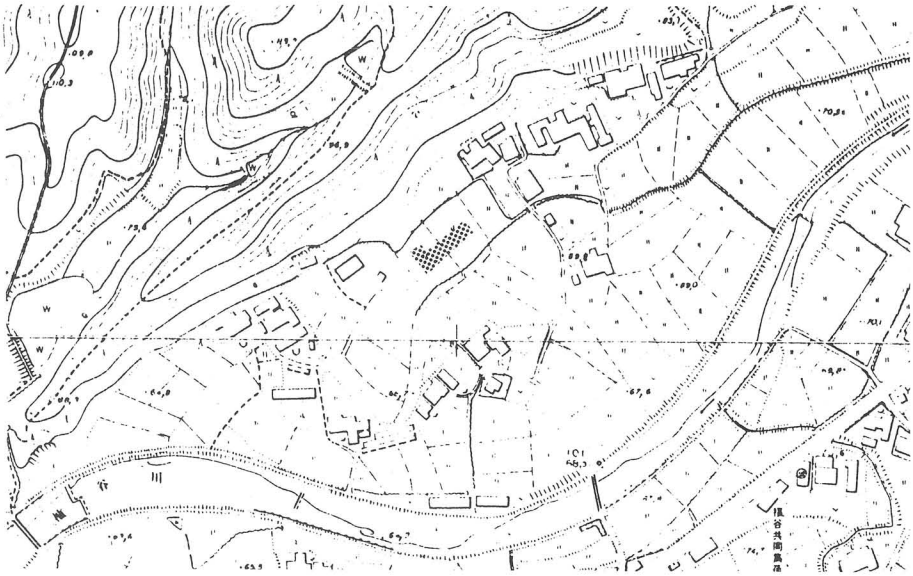
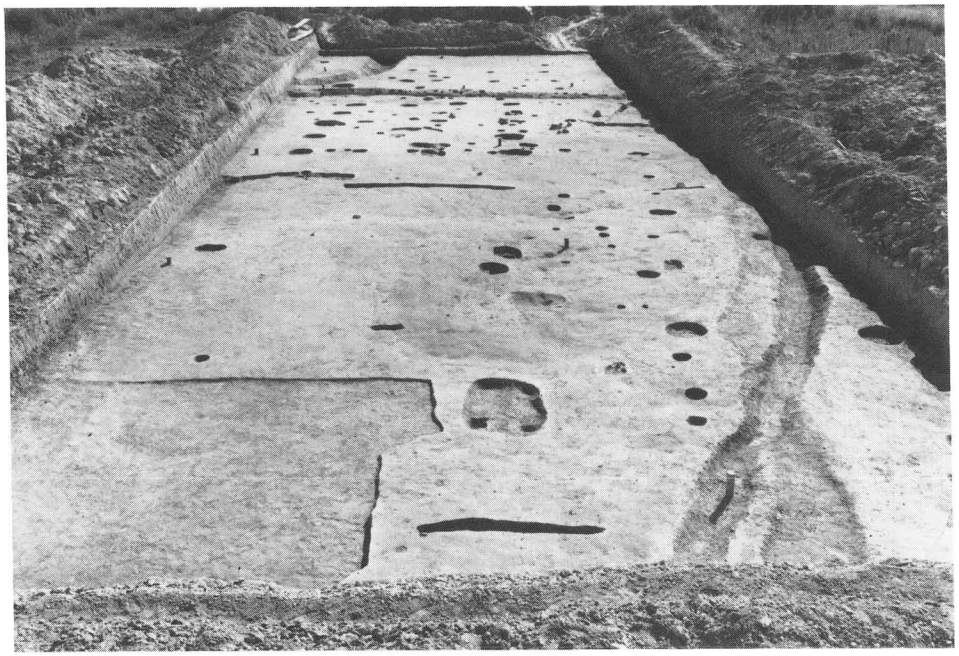


fig. 46　トレンチ設定図

fig. 48
調査地全景
(東から)



2．調査概要　調査は東西56m、南北14mのトレンチを設定して行った。土層の層序は耕作土、床土、中世遺物包含層（厚さ18cm、床土下約30cm）となっている。この遺物包含層を除くと黄褐色粘性砂質土の遺構面となる。さらに、黄褐色粘性砂質土（厚さ約10cm）の下に暗褐色土（厚さ約12cm）の古墳時代の遺物包含層がひろがっている。下層の遺物包含層の直下には、黄褐色粘質土が存在し、この層を切り込んで古墳時代の遺構がみられる。

上層遺構　上層の遺構面で検出された遺構は東西溝２条、南北溝１条、建物３棟と多数のピットである。

掘立柱建物　**ＳＢ01**　東西２間、南北２間以上の南北棟の掘立柱建物である。柱間距離は桁行2.3m等間隔、梁間は東側1.5m、西側1.1mを計測する。建物の方向は棟方向でＮ43°Ｗを計測する。柱掘形は長径60cmの楕円形で、柱痕跡は直径20cmを計測する。柱掘形内から、遺物は出土しなかった。

ＳＢ02　東西２間、南北３間の南北の掘立柱建物で、西に庇をもうける。柱間距離は、桁行2.4m等間隔、梁間は1.1m等間隔、庇の出は1.6mを計測する。建物の方向は、棟方向でＮ35°Ｗを計測する。柱掘形は、長径約60cmの楕円形で、柱痕跡は直径20cmを計る。

ＳＢ03　南北３間、東西４間の東西棟の掘立柱建物である。柱間距離は桁行で2.1m、梁間で2.3m等間隔である。建物の方向は、棟方向でＮ61°Ｅを計測する。柱掘形は長径70cmの楕円形で、柱痕跡は直径20cmを計る。柱掘形内からは土師器皿が出土している。

fig. 47　池谷遺跡検出遺構図

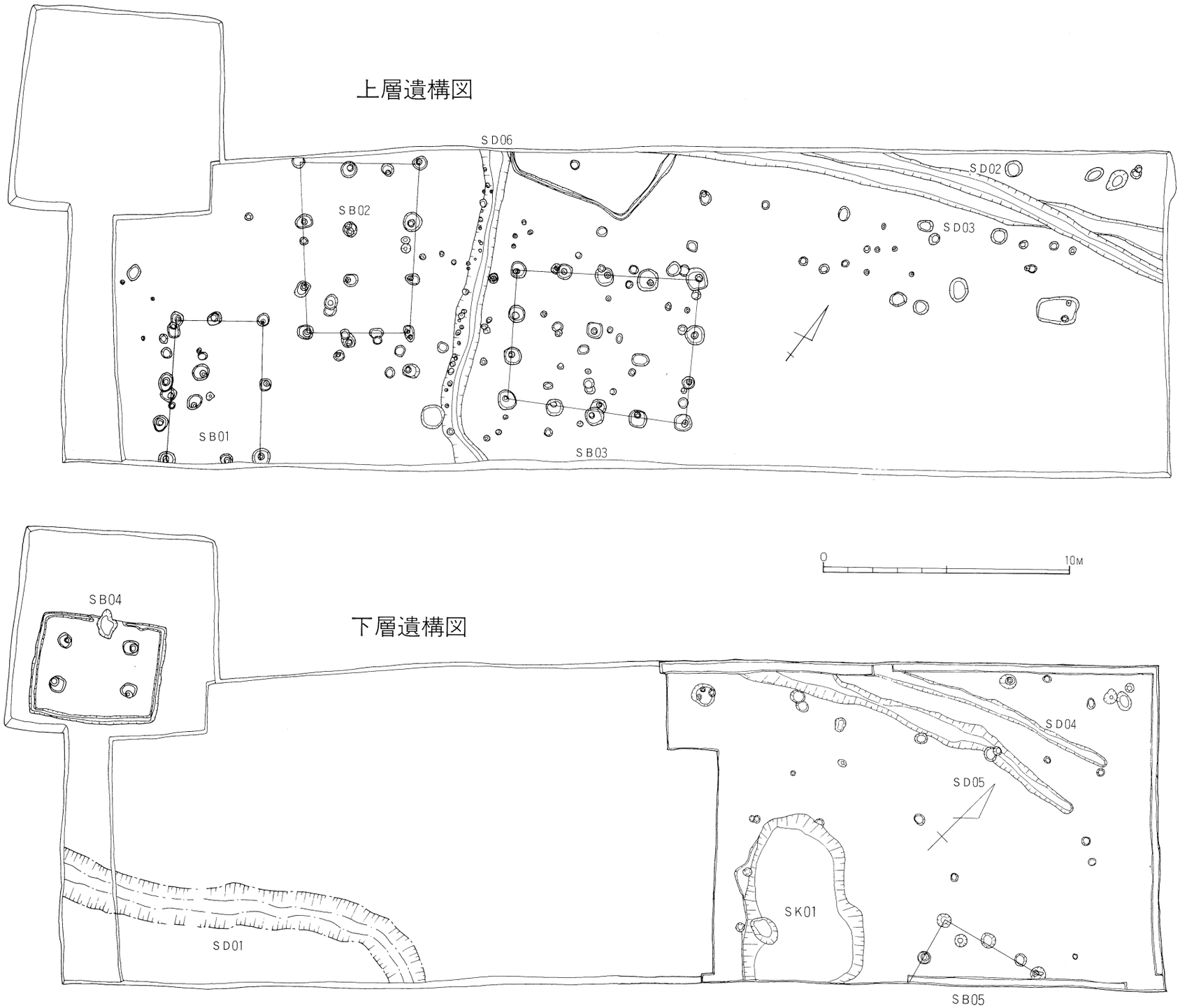


fig. 49　掘立柱建物ＳＢ03（北から）

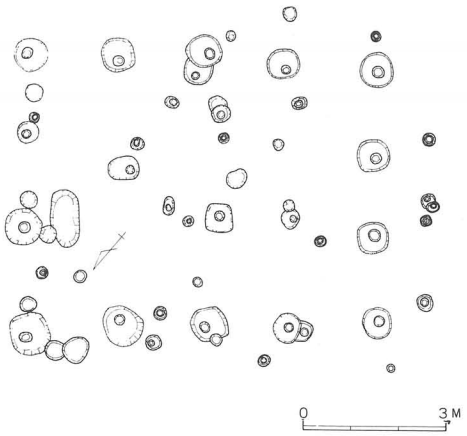


fig. 50　ＳＢ03実測図

溝　ＳＤ02・03　トレンチの北東部を東西に走る溝である。ＳＤ03がＳＤ02に先行する。ＳＤ02は幅80cm、深さ40cmを計る。ＳＤ03は幅1.1m、深さ30cmを計る。いずれも遺物は出土しなかった。

ＳＤ06　ＳＢ02とＳＢ03との間を南北に走るＵ字溝である。幅１ｍ、深さ40cmで西肩沿いに直径10cm前後のピットが点在する。柵等の痕跡と考えられる。埋土内より「雷文」青磁、須恵器、土師器が多数出土している。

下層遺構　下層の遺構面の検出は、トレンチ北壁・西壁を断ち割った際、溝１条と竪穴住居址の一部を検出した。さらにトレンチ東部では、土坑１か所、溝２条を検出した。竪穴住居址についてはトレンチを北に5.3ｍ、西に2.6ｍ拡張して調査を行った。

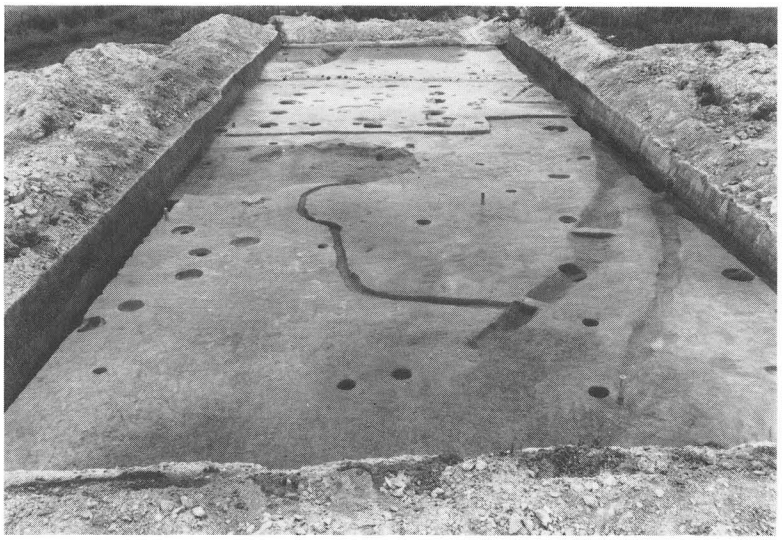
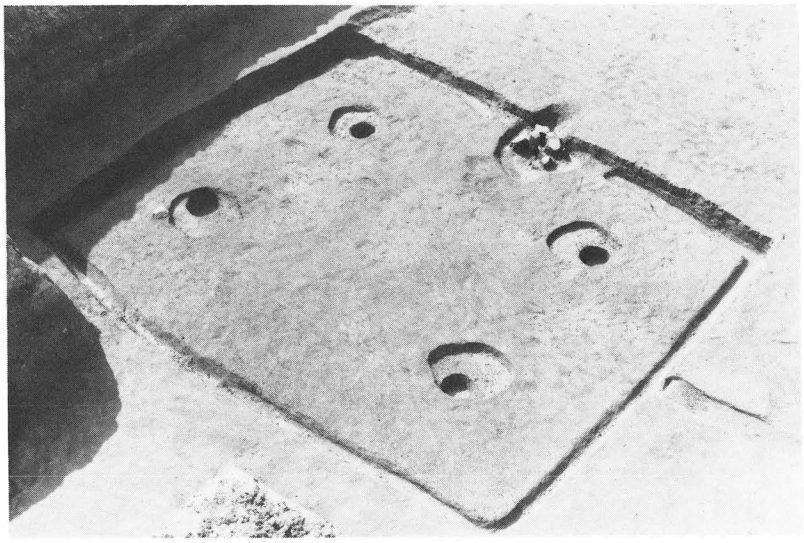


fig. 51　下層遺構（東から）

fig. 52　古墳時代竪穴住居址（東から）



竪穴住居址　**SB04**　東西５ｍ、南北4.4ｍの長方形で壁高の残存高は約25cmである。カマドは北壁中央に位置し、砂岩製の角柱が支脚として埋めこまれていた。住居址の主軸方向でＮ34°Ｗを計る。床は20cm前後の黄褐色粘質土を貼っている。床を貼った後、カマドの掘形及び柱掘形４か所を掘り込んでいる。柱掘形は１辺40cmの正方形で、直径18cmの柱穴が掘形に接して検出された。周壁溝の幅は12cm、深さ４cmでカマド部を除いて全周している。遺物は埋土内より須恵器坏蓋片、カマドより土師器甕片が出土している。

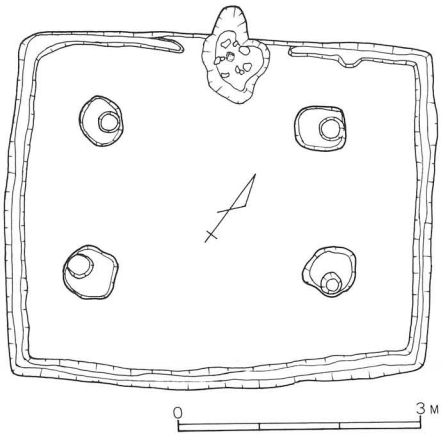


fig. 53　竪穴住居址実測図

土　坑　**ＳＫ01**　南北7.0ｍ（推定）、東西4.0ｍ、深さ50cmの不定形の土坑である。埋土からは古墳時代須恵器坏身等が多数出土している。

掘立柱建物　**ＳＢ05**　東西２間以上、南北１間以上の掘立柱建物で、東西の柱間は1.6ｍ、南北の柱間は1.5ｍを計る。建物方向は、南北方向の柱並びでＮ19°Ｗを計測する。柱掘形は直径40cmの円形で、直径20cmの柱痕跡が検出された。

溝　**ＳＤ01**　古墳時代のＵ字溝で、幅1.6ｍ、深さ40cmを計る。埋土の上層は暗灰色砂質土、下層は褐色砂礫層である。上層より土師器細片が出土している。

ＳＤ04・05　ＳＤ02・03の下層で確認した東西溝で、溝内の埋土は暗褐色砂質土及び褐色砂層であった。ＳＤ04は幅40cm、深さ10cmを計る。ＳＤ05は幅80cm、深さ30cm前後を計る。

3．まとめ

今回の調査では、古墳時代後期の竪穴住居址１棟と中世の掘立柱建物３棟を発見した。

竪穴住居址の年代は、埋土内出土の須恵器蓋によって、６世紀後半を降らない時期のものと考えられる。古墳時代後期の集落遺構は櫨谷町では初めての発見であり、池谷・福谷地区に散在する櫨谷中学校裏山古墳群、光松古墳等を造営した人々の集落の可能性が強く、被葬者の生活実態を明らかにする重要な資料となる。

上層の掘立柱建物の年代は掘形内より、遺物の出土がないため、明確さを欠くが、建物の方位とほぼ同一方位の溝６から出土した遺物で判断すると鎌倉時代後半を降らない時期のものと考えられる。

これらの建物群は鎌倉時代に存在した衣笠領櫨谷庄と関係する建物と考えられる。調査地点の北方山頂には福谷砦、櫨谷川をこえて東方に伝城ケ谷砦がある。調査地点付近は櫨谷川流域において、押部谷、明石、伊川谷の諸地域を結ぶ交通の要衝となっている。従って、調査地付近は、櫨谷庄内において重要な地域となっていたと考えられ、櫨谷庄の中心的な集落が存在した可能性が高い。

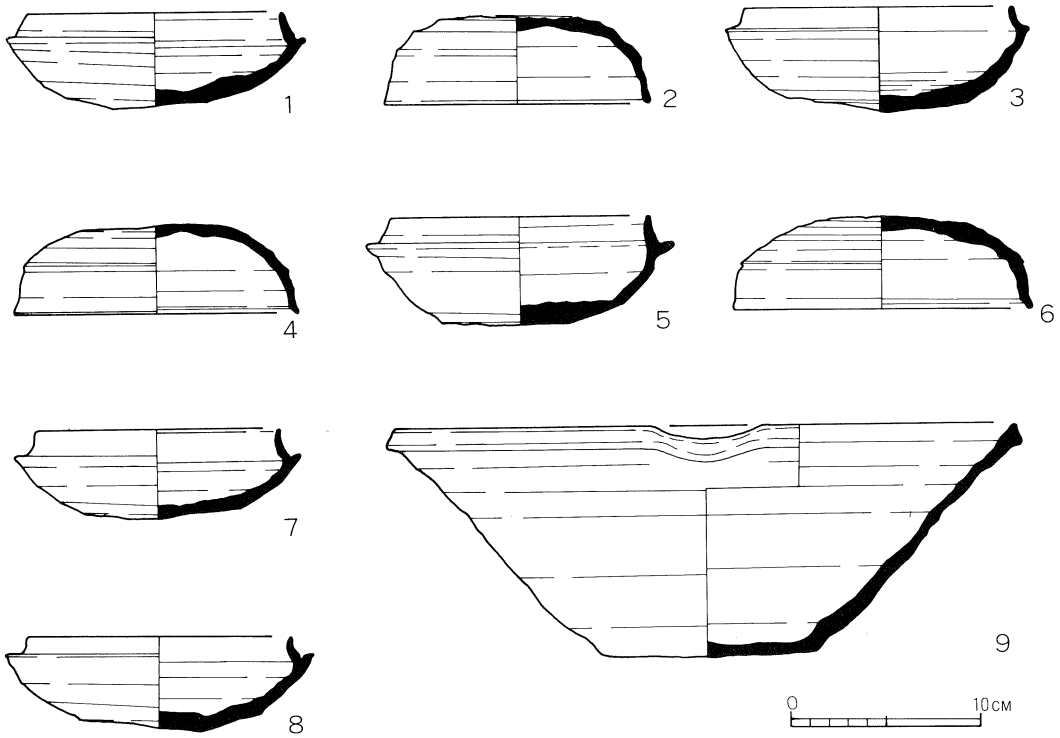


fig. 54　池谷遺跡周辺出土遺物実測図　１～８、枦谷中学校裏山古墳群出土　９、ＳＢ01出土

4．西戸田遺跡（にしとだ）

1．調査経過　平野町西戸田地区では、昭和54年度から開始された土地改良事業に先立ち分布調査、発掘調査を実施した結果、弥生時代～鎌倉時代に至る各時期の遺構・遺物を発見した。

今年度事業地においても遺物の散布を認め、試掘を行なった結果、事業対象地西北部で柱穴を数多く検出したため、10m×25mの範囲を拡張し調査を実施した。

fig. 55　位置図

2．調査方法　調査は耕土を重機により取りさった後、遺構の検出を行った。

3．調査概要　当調査において検出した遺構は、柱穴と思われる小形のピット、径3m内外の不定形な土坑、集石遺構などである。

検出遺構　柱穴状の小形のピットには直径10cm、20cm内外、30cm以上のものがあるが、大多数は直径20cm内外のものである。これらの小ピットは調査区のほぼ全域に

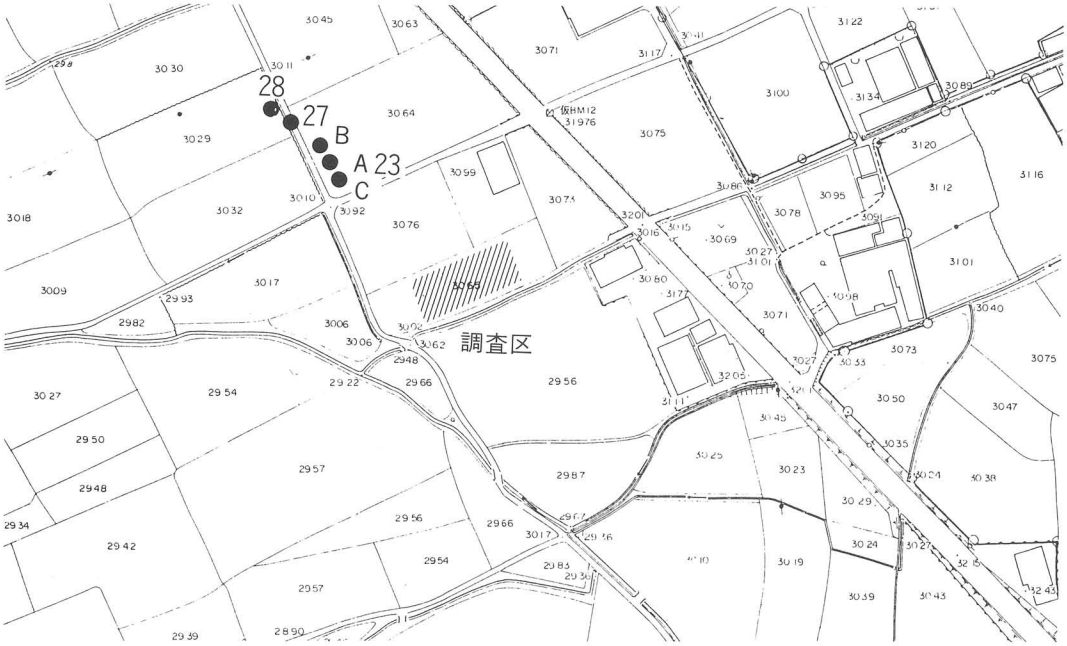


fig. 56　調査区設定図

存在しているが、特に調査区の南半部に集中して検出された。

建物址として確認できるのは、ＳＢ01・ＳＢ02の２棟のみであるが、これらの小ピットのあり方から数多くの掘立柱建物が存在したものと思われる。

掘立柱建物　**SB01**　南北２間、東西３間の掘立柱建物である。柱間距離は、南北２ｍ・東西２ｍを計る。柱穴の大きさは、直径30cm内外である。

SB02　南北２間、東西２間の建物で、柱間は２ｍである。柱穴はＳＢ01同様30cm内外のものである。

この２つの建物は、ほぼ同一軸上にかさなっており、新旧関係を持つことは明らかであるが、柱穴の重複がないことから、その前後関係は不明である。しかし主軸方位が重なることから連続した建替と考えられる。

土　坑　**ＳＫ01～ＳＫ04** 大形の土坑で、埋土中に多くの遺物・礫を伴っている。この内、ＳＫ02では完形の土師皿・青磁皿などがあり、祭祀との関係が考えられる。

集石遺構　**ＳＸ01**　拳大の河原石からなる遺構である。プランを検出したのみで精査していないので、性格、構造などの詳細は不明である。

溝　No.23（Ａ～Ｃ）、27、28試掘坑で検出された。溝幅は2.3ｍ、深さ0.6ｍで長さ20ｍ確認された。溝内に残る遺物より鎌倉時代(13世紀前半)のものと思われる。

４．出土遺物

遺物は、遺物包含層、ＳＫ02・ＳＫ04などから出土したもので、須恵器・土師器・瓦器・陶磁器など整理用コンテナ（28ℓ）で10箱が出土した。

須恵器　現在未整理であるため詳細は不明であるが、須恵器には捏鉢・埦・皿・甕があり、胎土・色調などから、神出・魚住両古窯址で生産されたものであると考えられる。

土師器　土師器は皿が多く、埦・甕が少量出土している。

瓦　器　瓦器は、極めて少量で羽釜・堝などの器種に限定される。

青磁・白磁　青磁・白磁は当地域の中世遺跡としては比較的多く出土しており、全体の約２％程度を占める。青磁は鎬蓮弁・劃花文を持つ龍泉窯系の碗と見込みに猫描きを持つ同安窯系の皿がある。白磁は、玉縁を持つものの他、見込に毛彫を施すもの、端反り口縁のものなど多様である。

５．まとめ

当遺跡は安定した黄褐色粘質土からなる自然堤防上に位置している。これは、周辺部での調査からも明らかである。集落の形成された時期は、12世紀の後半にもとめられ、13～14世紀初頭まで存続していたものと思われる。調査対象地は保存されることとなったため、調査は平面での遺構プランの検出にとどめたため、各遺構の性格や時期の詳細は不明である。

fig. 57　遺構全体図

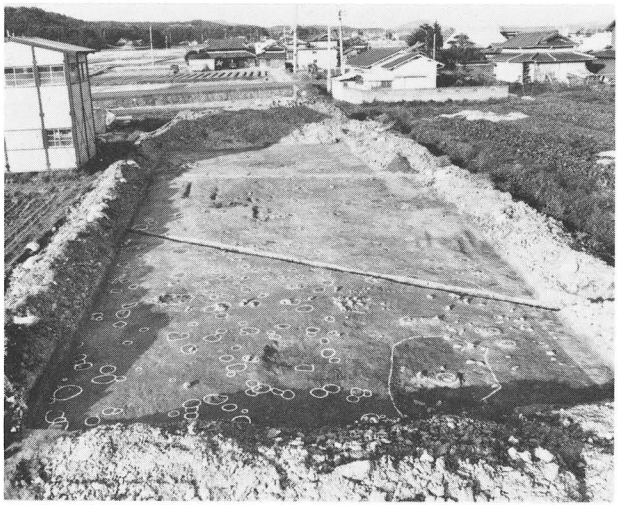


fig. 58　調査区全景（南西から）

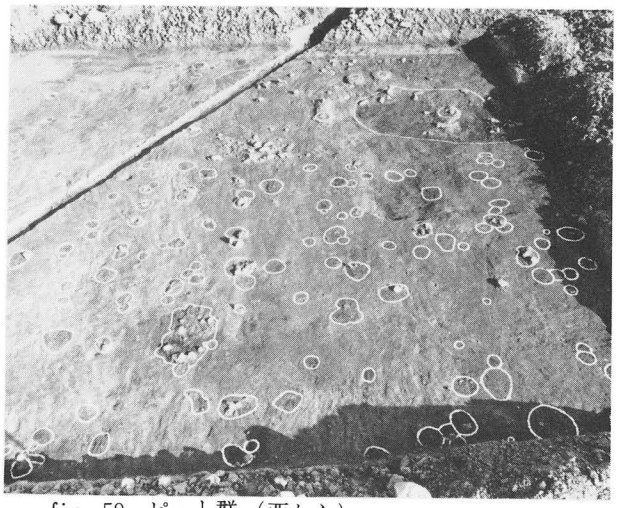


fig. 59　ピット群（西から）

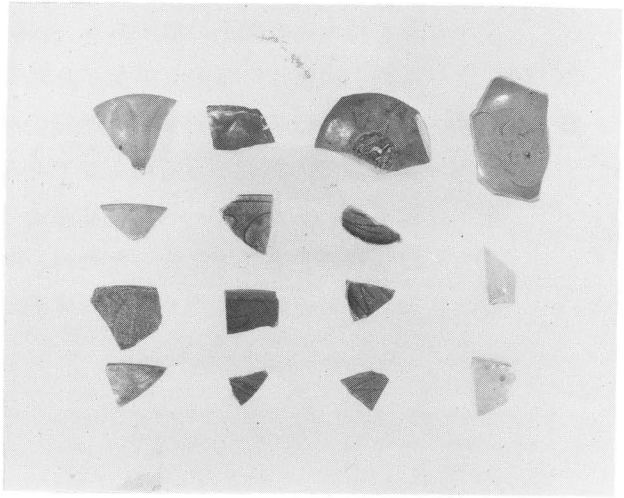


fig. 60　出土遺物　青磁・白磁片

5．小寺（こでら）遺跡

1．はじめに　小寺遺跡は、神戸市垂水区伊川谷町小寺に所在し、伊川の中流域東岸に位置する。

当地域は、神戸市開発局による研究学園都市建設に伴う造成工事が行われており、昭和54年２月からその工事区域内の埋蔵文化財調査を実施している。研究学園都市造成工事区域内では、これまで頭高山遺跡、大門遺跡、柿谷１・２号墳が確認され、発掘調査が行われている。

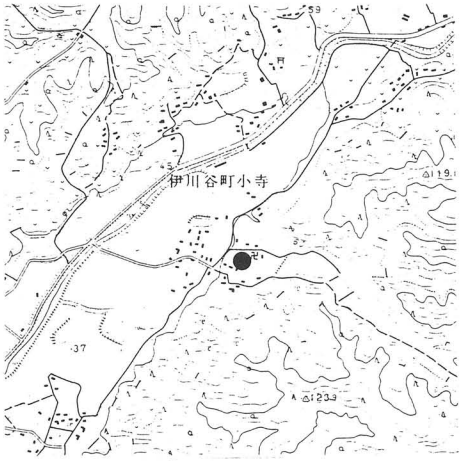


fig. 61　小寺遺跡位置図

今回の発掘調査は、本年度から実施される小寺地区圃場整備事業に先立って行ったもので、伊川に面する扇状地、平地部がその調査対象地である。調査では、上記の遺跡に関連する古墳時代から中世の集落址の存在が予想され、すでに予備調査で遺構の存在が確認されている箇所の遺構の時期、性格を明らかにし、さらに、範囲の確認を目的として行った。

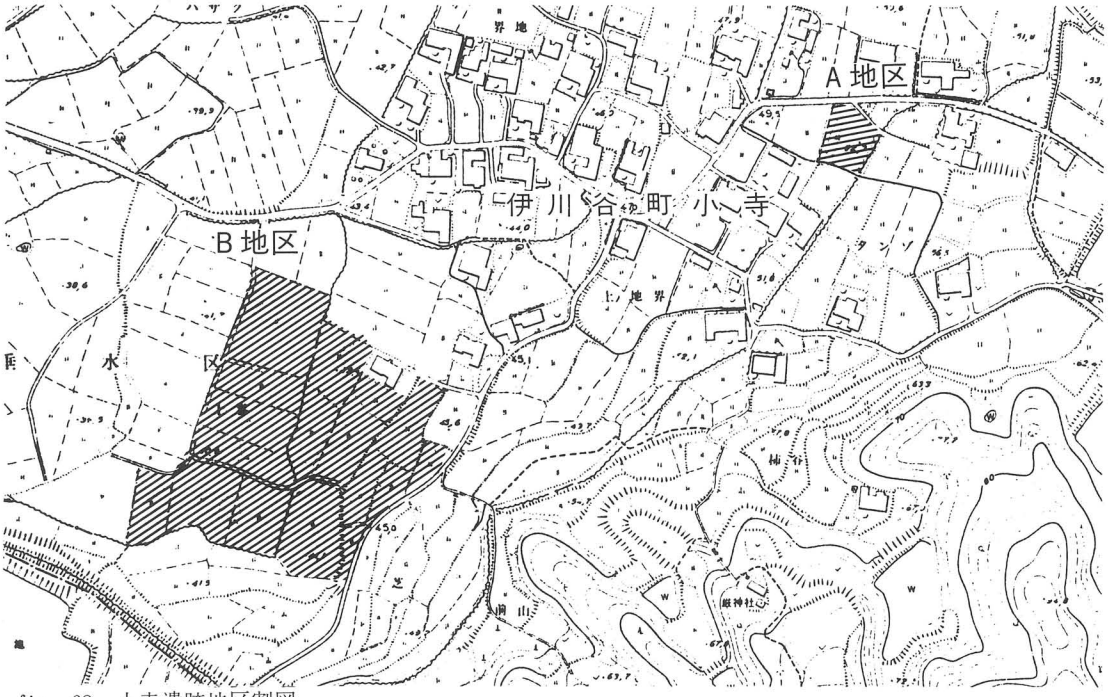


fig. 62　小寺遺跡地区割図

2．調査方法　A地区では、今回の調査に先立ち、予備調査（試掘）を実施し、その結果をもとに調査地を設定した。また、B地区では、遺跡の範囲を確認するために、試掘坑を設定した。

調査は3ｍ×3ｍの区割りを単位とし、A地区で6ｍ×24ｍのトレンチを設定し、B地区では、地形および遺物散布地を参考に2ｍ×2ｍのグリッドを基本として、任意の箇所に26ケ所の試掘坑を設定して行った。

3．調査概要

A地区　調査地内で検出された遺構は、土坑、溝状遺構、ピット（柱穴含む）であった。なお、近年の攪乱坑が7ケ所あり、井戸と思えるものがある。

fig. 63　A地区全景（南から）

fig. 64　掘立柱建物（東から）

SK01は、不整円形の土坑で、底面は凹凸がかなりあり、住居址とは考えられない。埋土より、土師器細片が多数出土した。

SX01は、当初、竪穴住居址ではないかと思われたが、周壁溝状の溝が1条検出されただけで、住居址であるとの確認はできなかった。

ピットは、20数ケ所検出された。これらのうち、P－6・8・9・15・19・20・21・25が同一の掘立柱建物の柱穴とみられ、3間×1間以上の建物が確認された。なお、調査地南側が削平されていたため、遺構が確認できず、建物規模は確定できなかった。

遺構の時期は、遺構内埋土からの出土遺物（須恵器・土師器）が細片のため断定できないが、遺構面出土の須恵器より7世紀代であろう。

B地区　試掘調査を行なった26ケ所のうち、遺構あるいは遺物包含層が検出されたのは、No.4、16、17、18、20、21、25、26の試掘坑であった。遺構は、このうちNo.4、17、20の3ケ所で検出した。

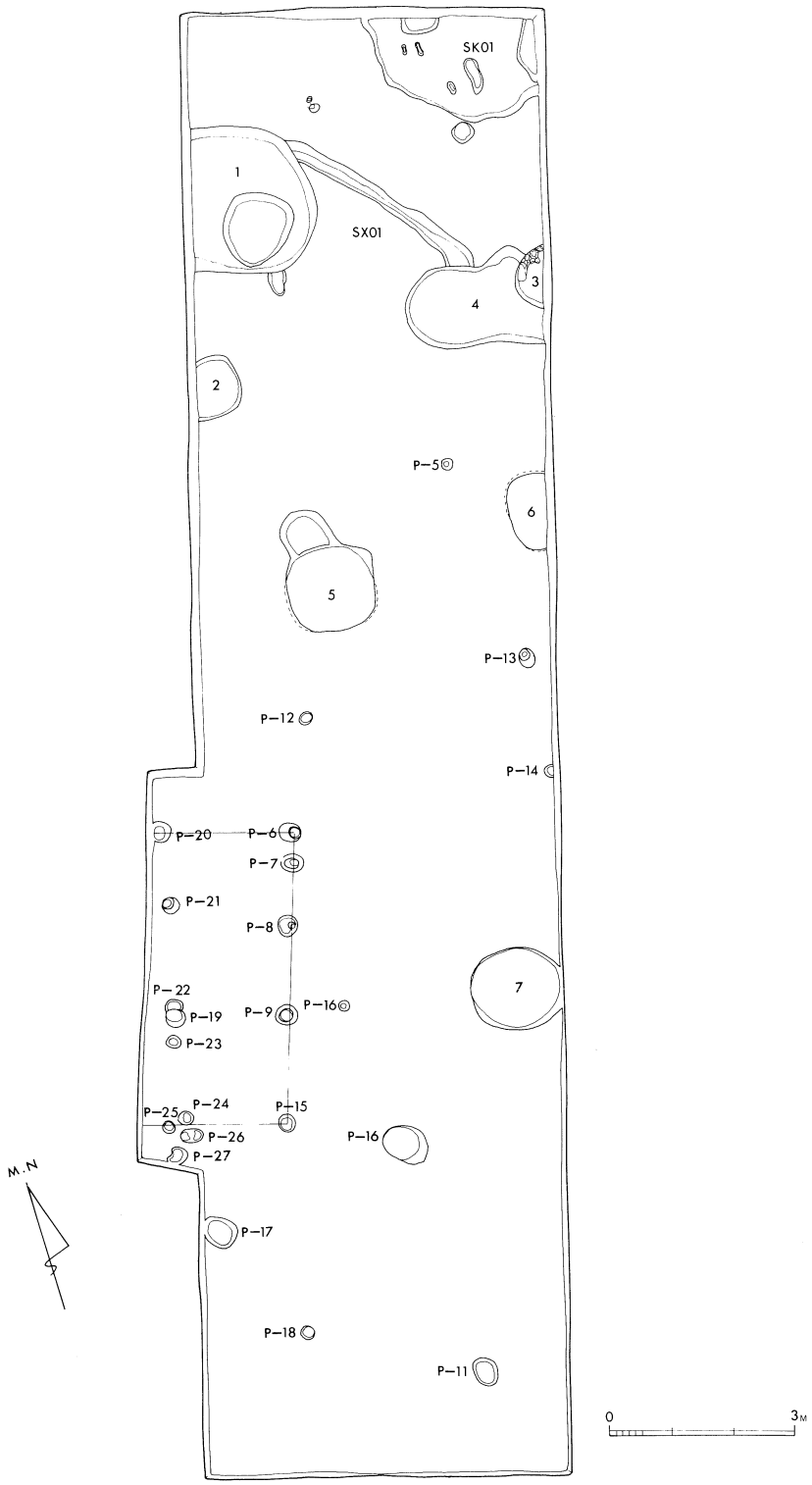


fig. 65　小寺遺跡検出遺構図

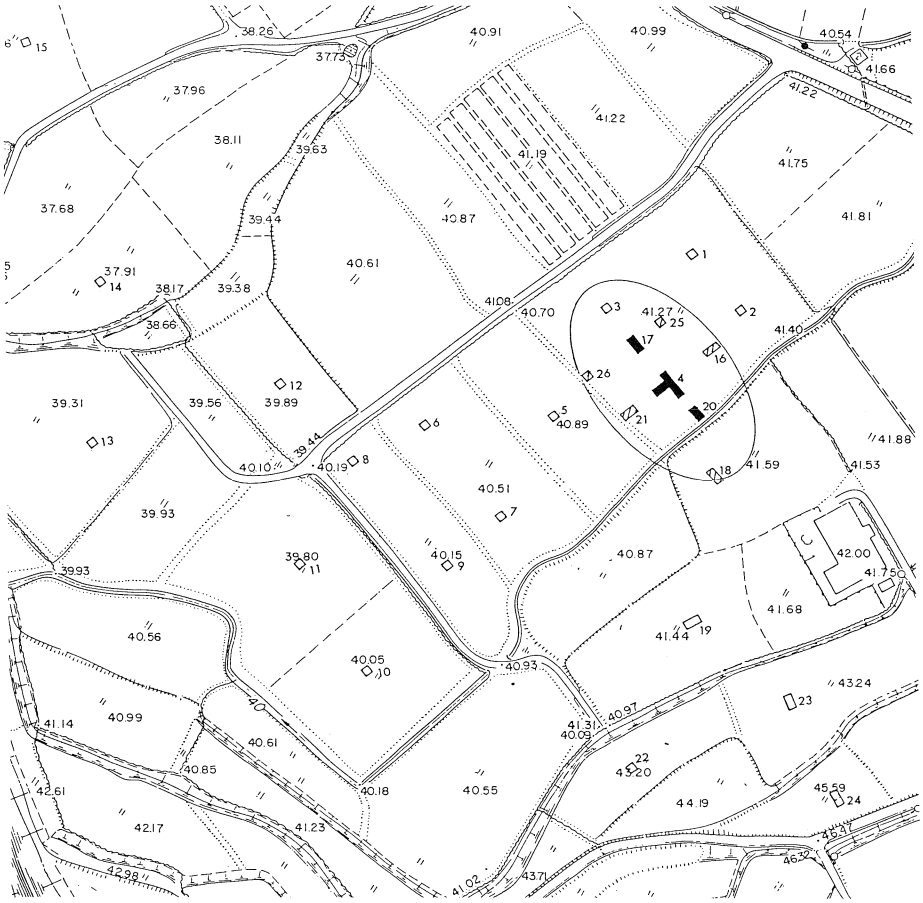


fig. 66　B地区トレンチ配置図

No.4ではピットが検出され、断面観察を行った結果、ピットは径35cm・深さ40cmの柱穴であった。No.17においても、ピット1ケ所が検出され、No.20では溝状遺構1条が検出された。この結果、No.4、17、20を中心とする範囲に、掘立柱建物等の遺構が存在するものと思われる。

4．まとめ

今回の調査では、古墳時代末から奈良時代にかけての遺物が出土し、掘立柱建物等の遺構が検出された。現水田開墾時の削平を受けている所が多く、遺跡の全体像はつかめないが、掘立柱建物を中心とする集落址であることは明らかとなった。試掘調査で検出された遺構も集落址にともなう建物の柱穴・溝である。遺跡の存在する箇所は、他の試掘坑の土層観察からみて微高地上に立地しており、当時の集落は、あまり広範囲ではなく、微高地にいくつかのまとまりをもって存在していたと推定される。試掘調査によって検出した遺構については、今後本調査を実施する必要がある。

6．頭高山遺跡（ずこうさん）

1．はじめに　頭高山遺跡は、神戸市垂水区伊川谷町小寺から前開にまたがる標高90～110ｍの洪積丘陵上に存在している。遺跡は頭高山の頂部とそこから南へ派生する尾根の東側斜面及び北側斜面に拡がっており、その面積は7000㎡を超えるものと推定される。これまでに昭和53、55年度の２次にわたる発掘調査を実施しており、弥生時代中期の集落址が検出されている。今年度は尾根の東側斜面について、第３次調査を実施した。調査面積は450㎡である。

fig. 67　位置図

2．調査概要　頭高山東斜面

発掘調査は、頭高山東斜面標高88～95ｍ間の450㎡について実施した。北からＺ、Ａ、Ｂ、Ｃ４区を設定し、調査した。当初、流土と思われる軟かい堆積

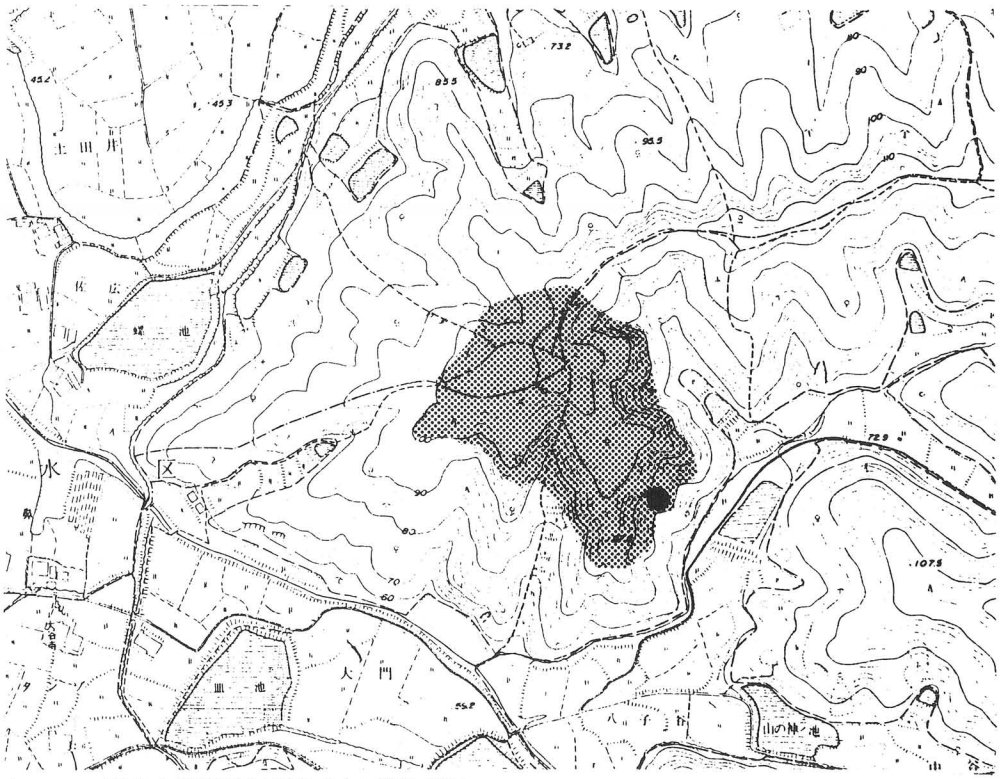
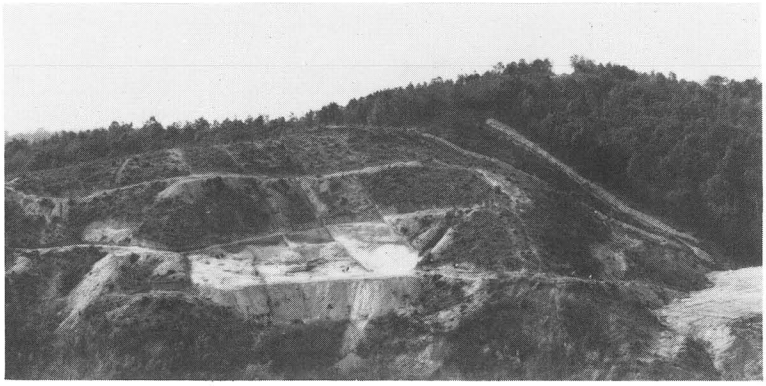


fig. 68　頭高山遺跡調査区(●印)と遺跡範囲

fig. 69　調査地遠景
（東から）



土は遺構面になりえないと考えていたが、先行していたＡ・Ｂ両区の結果から遺構面であることがわかった。住居址１棟と地山整形遺構４カ所を検出した。

住居址は自然斜面を一部削り、その土を斜面下方に盛土し、平坦面をつくつて構築したと考えられる。その平坦面山側に排水用の溝を掘っている。

地山整形遺構は、地山を削平して平坦面をつくりだしているが、住居址とは考えられない一群の遺構である。

検出された遺構の規模は別表のとおりである。

遺構名	長さ(cm)	幅 (cm)	備　考
ＳＢ01	719	457	ピット４
ＳＸ01	220	143	
ＳＸ02	410	380	ピット３
ＳＸ03	589	390	ピット４
ＳＸ04	562	368	ピット３

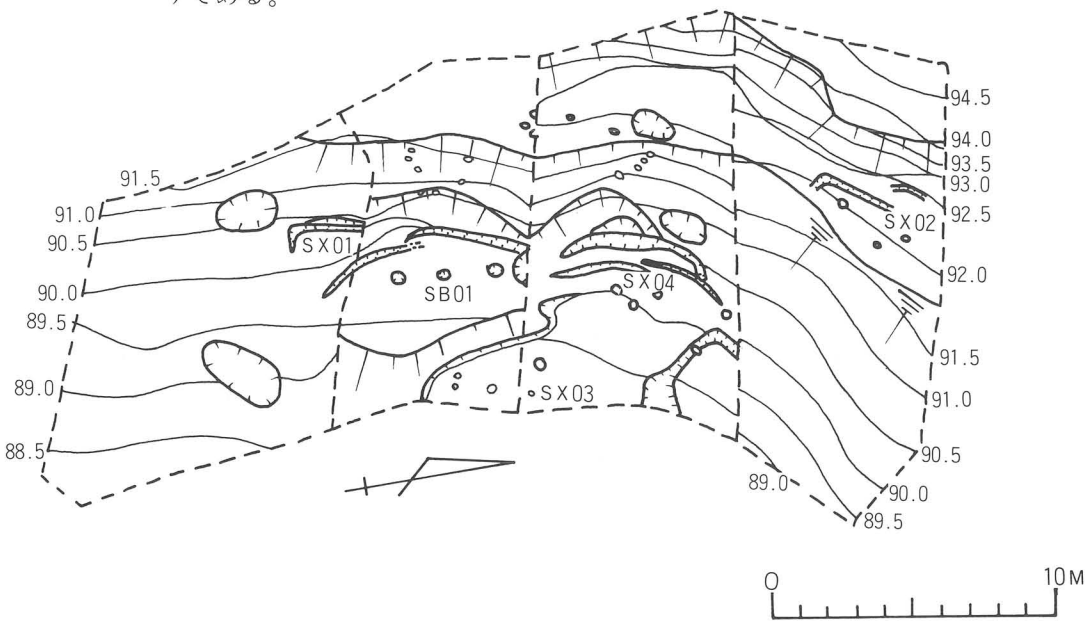
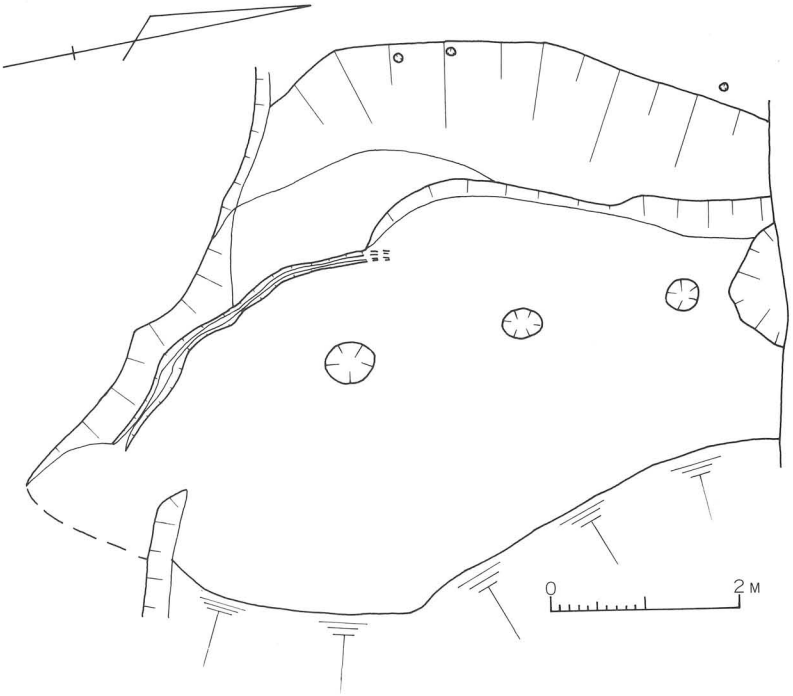


fig. 70　遺構全体図

fig. 71　ＳＢ01（東から）

fig. 72　ＳＢ01
実測図



住居址　SB01　残存長7.19ｍ、幅4.57ｍを計る。地山と思われる青黄色粘土をベースにして作られていた。平坦面に４個のピットを検出したが、そのうち３本は柱穴と考えられる。

地山整形遺構

SX01　残存長2.2m、幅1.43mを計る。やや砂まじりの堆積土をベースにして作られていた。

SX02　残存長4.1m、幅3.8mを計る。小礫を含んだ堆積土をベースにして作られており、平坦面からピットを3個検出した。柱穴であるか判断しがたい。また、溝が2本検出された。下方の溝の方が、上方の溝より先行してつくられたものである。

SX03　残存長5.89m、幅3.9mを計る。SB01同様地山と思われる青黄色粘土をベースにして作られている。また、平坦面で4つのピットを検出したが、柱穴であるか判断しがたい。

SX04　残存長5.62m、幅3.68mを計る。SB01、SX03同様地山と思われる青黄色粘土をベースにして作られていた。また、平坦面で3個のピットを検出したが、柱穴かどうか判断しがたい。

住居址がつくられていた地点の上方に幅2.8m、長さ16mにわたって地山を整形した痕跡がみられた。その平坦面には、若干のピットが検出されたが、ここに建物が建つ可能性は少なく、この遺構が持つ意味は不明である。

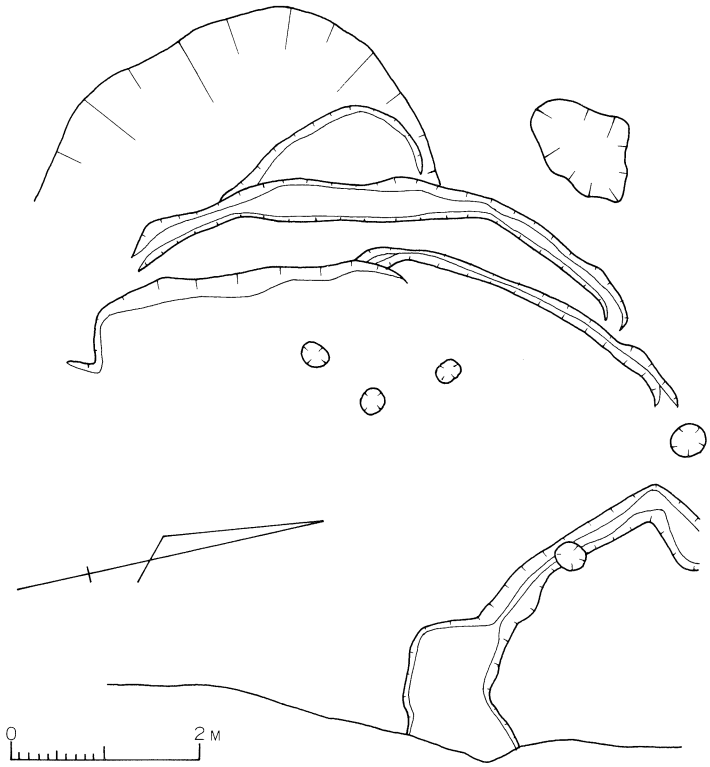
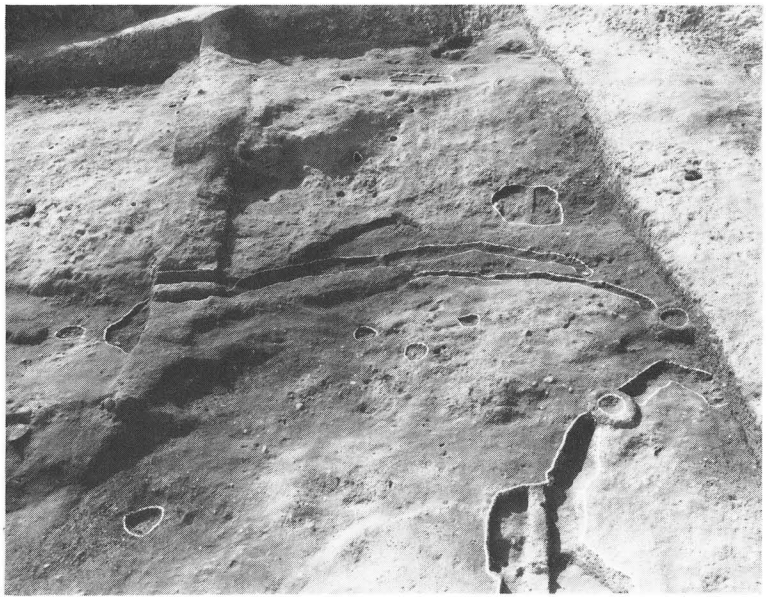


fig. 73　SX04実測図

fig. 74　ＳＸ04地山整形遺構



第６地点北斜面

第６地点の北斜面については、前年度の試掘調査のつづきを調査した。当該地は約35度の急傾斜である。

前年度のトレンチNo.13の延長として21トレンチ、11トレンチの延長として22トレンチ、さらにその西側に新たに23トレンチを設定した。急傾斜の斜面地を表面から肉眼で観察しただけでも３か所程度の平坦面が判別できるが、試掘調査の結果、その３か所の他、最下段の標高90ｍ付近にも、もう１か所確認された。

この結果からも、この第６地点北斜面にかなりの住居址が営まれていたことが十分想定できる。

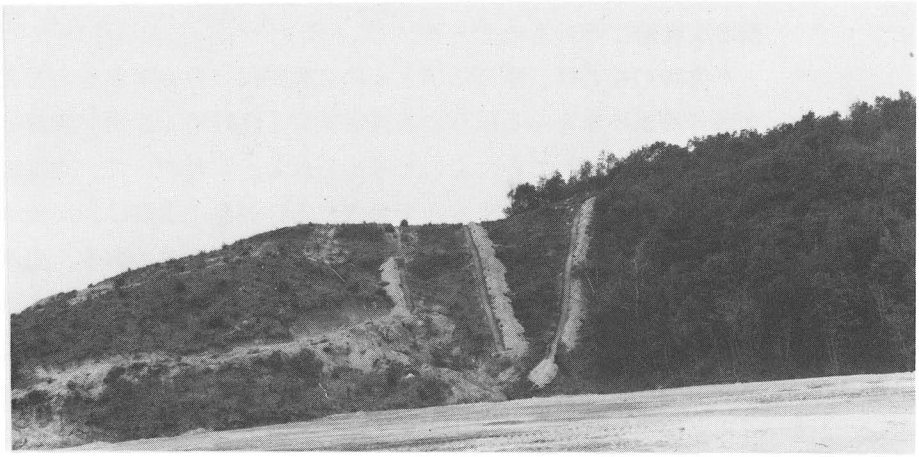


fig. 75　第６地点遠景（北から）

3．出土遺物　今回出土した遺物は大量の弥生土器と石器である。弥生土器には壺、甕、鉢高坏、蓋等の器種がみられ、石器には石鏃、フレイクなどがみられる。

弥生土器　**広口壺形土器**　口縁端部に櫛描波状文を施すものや、円形浮文を施すものがみられる。口縁内面には扇形文、頸部には凹線文を施す。体部の主文様は櫛描直線文、波状文、斜格子文がみられる。赤褐色系の土器と黄白色系の土器の二種類がみられる。

鉢形土器　直口の口縁に横位の把手のつくものや脚台のつくものなどがみられる。

甕形土器　口縁がくの字状に外反する。口径15cm前後の大形のものがみられる。

蓋形土器　壺用の蓋形土器が出土している。

高坏形土器　A．直口の口縁をもつものとB．水平口縁をものもの（所謂、木器形高坏）の二種類がみられる。Aは、口縁外面に凹線文を施す。脚部の破片が多い。

fig．76　弥生土器出土状況

石器　**石鏃**　石鏃は10点出土している。いずれも凹基無茎式のものである。

フレイク・チップ・コアー等　石器を製作する過程で生じるフレイクやチップそれに石器製作の原材となるコアーが出土している。石材はサヌカイトを使用している。

4．まとめ　今回の調査地区は頭高山遺跡の東端にあたる斜面の中復に位置している。ここは斜面の傾斜角度が15°～35°あり、居住環境としては、かなり劣悪な条件下にあったものと思われる。発掘調査の結果、ここから流失が著しく残存状況の悪い竪穴住居址と地山整形遺構が発見された。その時期は、弥生時代中期後半の西暦１世紀ごろのものである。

本遺跡の中心は、頭高山頂とその北側斜面に存在するものと考えられるが、今回の調査結果をみる限り、北側斜面にも４段の平坦面が確認され、各段に数棟の住居が営まれていたものと考えられる。したがって、頭高山遺跡全体では大規模な集落址が存在すると予想される。頭高山遺跡は伊川流域では最奥に位置する弥生時代遺跡である。しかも、高地性の遺跡である。先述したように、弥生時代における伊川流域の中心は、別府、上脇、潤和地区である。それゆえに、頭高山遺跡がこれらの中心部から離れ、高地性の遺跡として存在することの歴史的意味は大きい。今後、調査区を拡大し、遺物の実態が具体的に明らかになれば、本遺跡の歴史的意味も明らかになるであろう。

7．池上北遺跡（いけがみきた）

1．調査経過　神戸市池上北特定土地区画整理事業区域内の都市計画道路明石伊川線建設工事に伴い、路線敷の試掘調査及びトレンチ発掘調査を行った。また、都市計画道路予定地外であるが、C地区の再調査もあわせて行った。C地区は、54年度の試掘調査で遺物包含層が確認されたところである。

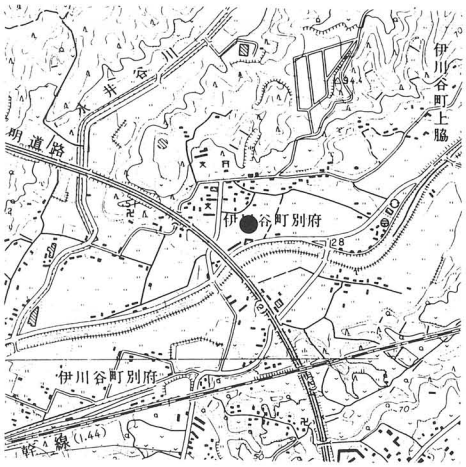


fig. 77　位置図

2．調査概要

Ⅳトレンチには、弥生時代の遺物を含む砂利層が遺構面をおおっていた。おそらく何度も洪水をうけ、堆積したものと思われる。

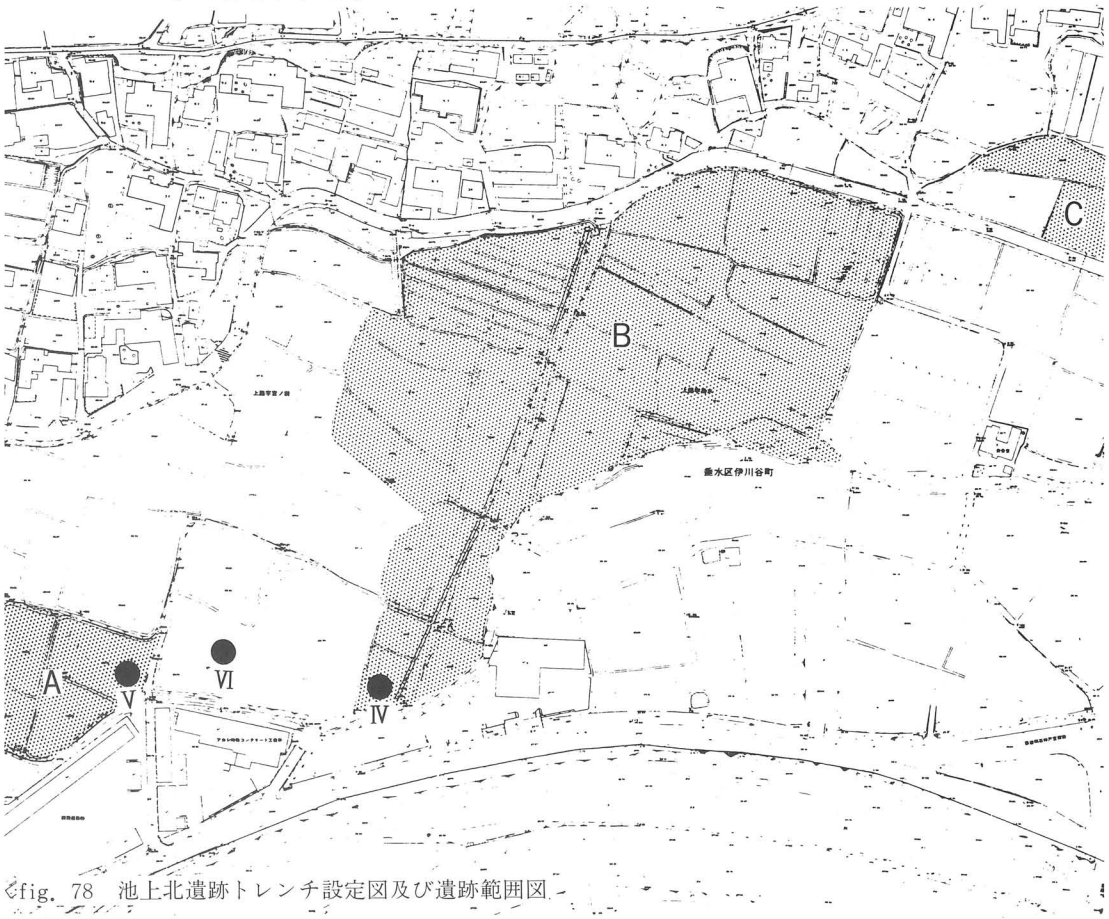


fig. 78　池上北遺跡トレンチ設定図及び遺跡範囲図

fig. 79 Ⅳトレンチ平面図

Ⅳトレンチ　トレンチ西側では、自然の流路が検出された。流路内埋土中より少量の弥生式土器片が出土した。土器は、弥生時代中期末のものと考えられる。

西南部では、大小4か所の土坑が検出され、出土した遺物が石鏃1点のみでその性格は不詳である。土坑の埋土が、有機物を含む土質であることと土坑の形状より当時のゴミ棄て穴と推定している。

北部では、ピットや土坑が検出され、半円形に土質の変化がみられるところがあった。また、少量ではあるが、まとまりのある遺物の出土等がみられ、円形住居址の南半分ではないかと思われる。

中央部では、4か所のピットが発見され、上面が洪水等で削平された竪穴住居址の四本柱の支柱穴ではないかと思われる。

このトレンチ内の遺構の時期は、弥生時代中期末葉と考えられる。

fig. 80　Ⅳトレンチ全景
（西から）

Ⅴトレンチ　Ⅴトレンチの基本層序は、上から現代の耕土、中世～近世にかけての盛土層及び旧耕土層、須恵器を含む砂利層、弥生時代の遺物包含層となり、その下が弥生時代の遺構面である。Ⅴトレンチも Ⅳトレンチ同様弥生時代以降洪水を受けていることが砂利層の堆積でわかる。

トレンチ東部からは、直径8.5ｍの円形住居址が検出された。床面には７か所の柱穴と中央に径1.1ｍ深さ 40cm の炉が検出された。住居址内より壺、甕、砥石などが出土している。これらの遺物より住居址の廃棄時期は弥生時代中期末と考えられる。他に、同時期の土坑やピットなどが検出されている。

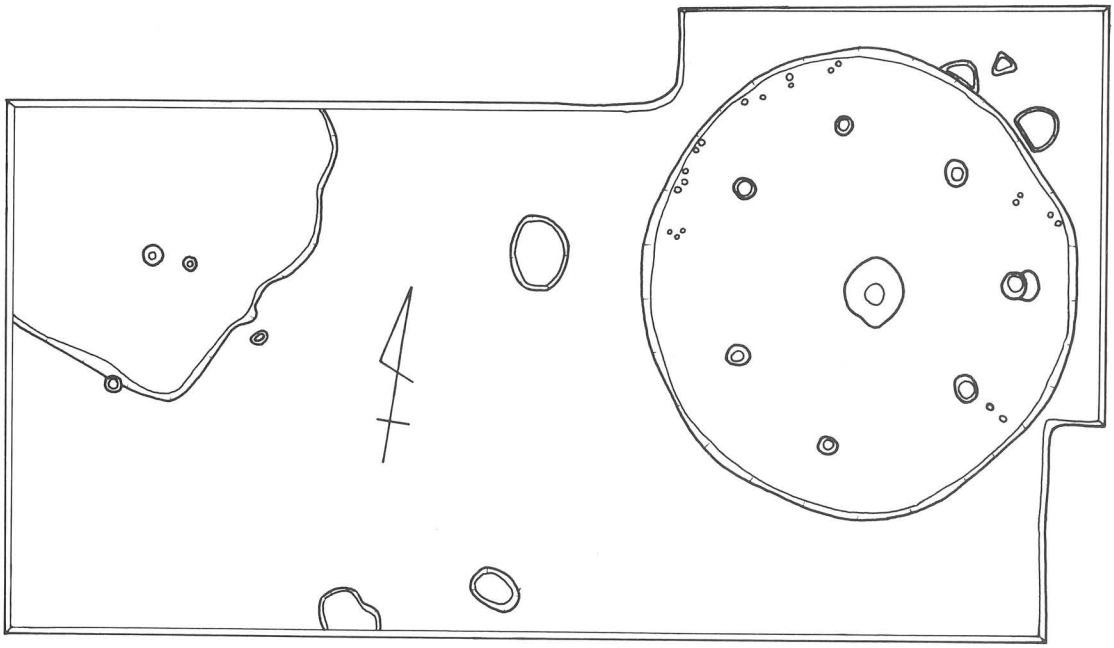


fig. 81　Ⅴトレンチ平面図

fig. 82　Vトレンチ全景（東から）

fig. 83　弥生時代住居址全景

Ⅵトレンチ　Vトレンチと同様の弥生時代遺物包含層が存在し、検出遺構は、自然流路とピット等であった。遺物包含層内、遺構内ともに遺物が少量であったため時期決定はむずかしいが、層序的にみてVトレンチと同様の時期と推定できる。

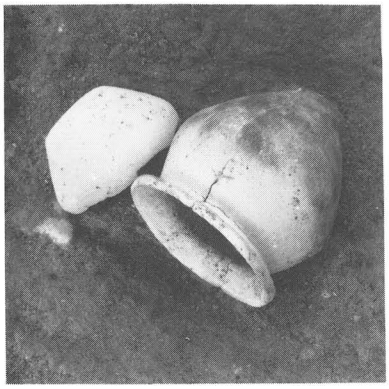


fig. 84　住居址内甕出土状況

3．小　結

都市計画道路予定地内の調査結果では、出土遺物や検出遺構から弥生時代中期～弥生時代末にわたって集落が営まれたことが判明し

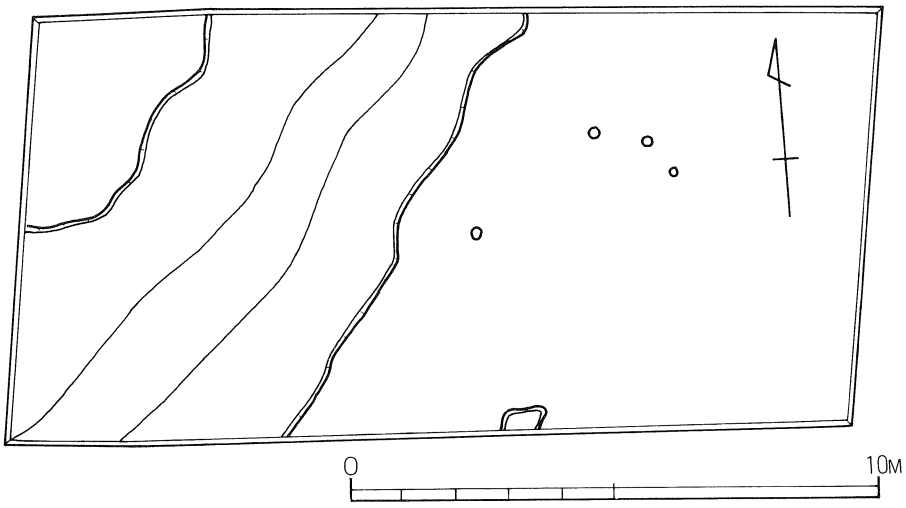


fig. 85　Ⅵトレンチ平面図

た。

池上北遺跡と同時期に池上口ノ池遺跡では、丘陵上に集落を営んでいる。伊川中流域を中心とした地域で、相互がどのようにかかわりをもって共存又は競合していったのか、その具体像を池上北遺跡の調査で解明することができるものと考えられる。弥生時代の伊川流域を考察するうえで池上北遺跡は重要な位置をしめているのである。

4．C地区試掘調査結果

試掘坑　No.41～43

地表下約40cm内外で10～20cmの遺物包含層が検出される。遺物包含層の下は地山面で、地山面から遺構が検出される。試掘坑No.42では落ち込みが2か所、No.43ではピットが1か所検出された。伴出した遺物から、弥生後期の遺構と考えられる。

試掘坑　No.39・40

2か所の試掘坑からは、特に遺物包含層等は検出されなかった。

以上よりC地区は、地区西側に弥生時代遺跡の存在が考えられる。

5．まとめ

Ⅳ・Ⅴトレンチの南辺を伊川の旧河道が走り、ここを遺跡の南限とすることができる。さらに遺構はA地区とB地区に連続してひろがり、昨年度調査のⅠ・Ⅱトレンチ周辺より南側が遺跡の中心であると推定できる。

一方C地区は、西側に遺跡の存在が考えられる。

以上よりA地区からC地区西側部分にかけて大規模な弥生時代集落遺跡がひろがっているものと考えられる。

8．北別府（きたべふ）遺跡

1．調査経過　北別府地区の土地区画整理事業は昭和51年度から開始されたが、工事に先立つ分布調査の結果、事業区域内において遺物が散布することを確認した。そのため、昭和51年度より試掘調査を実施し、遺構を検出した場合には、その地区の全面発掘調査を実施してきた。今回の調査地は、昭和51年11月、排水路工事の際、断面に遺物包含層と遺構の一部を検出した地区である。排水路より北側の部分については都市計画道路北別府１号線の敷設に先立ち、昭和52年度に調査を実施した。調査の結果、平安時代の柱穴、弥生時代中期の土坑等を発見した。

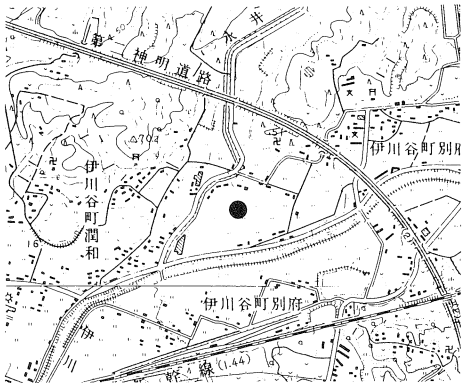


fig. 86　位置図

2．調査方法　調査地は、既に旧耕土上に盛土がなされていたため、重機を使用し遺物包含層上面まで掘削し、その後、人力により遺物包含層の除去・遺構面の検出を実施した。

3．調査概要　遺構は黄褐色粘質土の地山を切り込んでいる。遺構面直上には、灰色細砂の遺物包含層が５～10cmの厚さで堆積していた。

遺物包含層に含まれる遺物は奈良時代～平安時代の須恵器・土師器である。これらの遺物は小片が多く、大半は磨耗を受けていた。

検出した遺構は平安時代の柱穴群・蔵骨器を入れた土拡などである。調査地区内での遺構分布は調査区北西部に集中し、南側に行くにしたがって、細砂～粗砂～砂礫となり、旧河道の状況を示す。また、平安時代の遺構面は黄褐色粘質土層で、部分的な色調の変化があり、褐色を呈する部分には弥生時代後期の土器が包含されていた。しかし、精査の結果、遺構ではなく浅い凹部に周辺から遺物が流入したものと考えられる。

柱　穴　70ヶ所あまりの柱穴を検出した。径・深さなどは一様でないが、掘形は大きなもので径50cm、小さなもので径20cmである。その他に10cm内外の杭の痕跡が検出された。掘形埋土内から土器の小片がわずかに出土したものもある。掘形が30cmを超える比較的大形のものからは柱の痕跡を確認したほか、小礫を用いて柱の根がためをしたものを検出した。

fig. 87　調査区全景

蔵骨器　柱穴群の西端に近い部分で蔵骨器一基を検出した。灰褐色砂礫層を径50cm・深30cmほど切り込んで不整円形の掘形を穿ち、その内に甕形土器を転用した蔵骨器を埋納していた。蔵骨器内には、土師器坏２点を副葬していた。

fig. 89　蔵骨器埋納状況

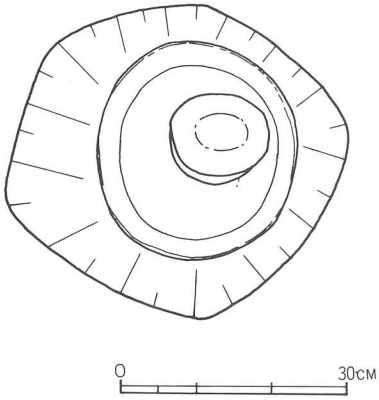


fig. 88　蔵骨器検出状況実測図

fig. 90　蔵骨器内副葬遺物

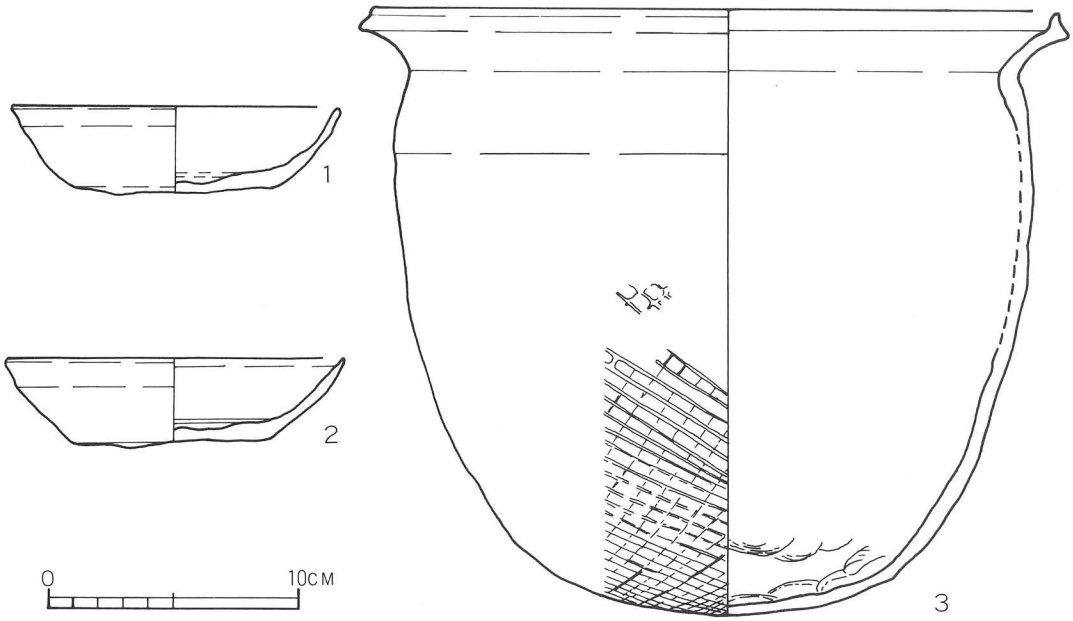


fig. 91　出土遺物実測図　1、2．土師器　3．蔵骨器

その他　この他、底部穿孔する甕形土器を埋納するピットを検出しているが、性格については不明である。

4．まとめ

今回の調査において検出した遺構は平安時代に属するものである。弥生時代の遺物の出土状況は凹地に周辺部より土器が流入したものと考えられる。

平安時代の柱穴群には建物の一部と思われる部分があり、トレンチ外に広がっているため建物の復元はできない。蔵骨器は昭和51年度調査でも出土しており、当時の墓制を知るうえで貴重な資料の一つといえる。

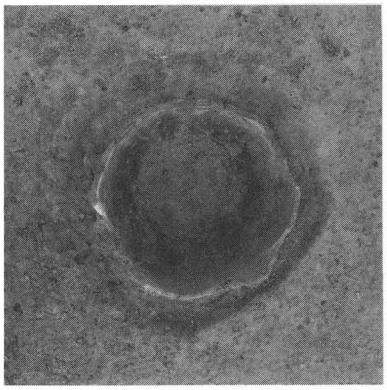


fig. 92　土器埋納ピット

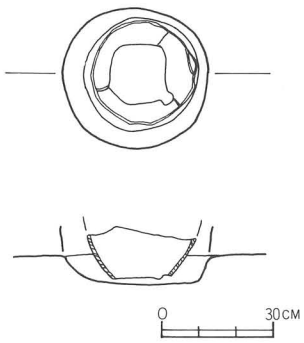


fig. 93　土器埋納ピット実測図

9．櫨谷中学校内遺跡（はせたに）

1．調査経過　当遺跡の発見の契機は、旧校舎の老朽化が進み、校舎建替が必要となったため、その工事に先立ち、試掘調査を実施した結果、包含層と遺構の一部を検出したことに始まる。

試掘調査の結果、敷地の西半部に遺物包含層と遺構が発見されたため、この地区、約 260 m²を対象として発掘調査を実施した。

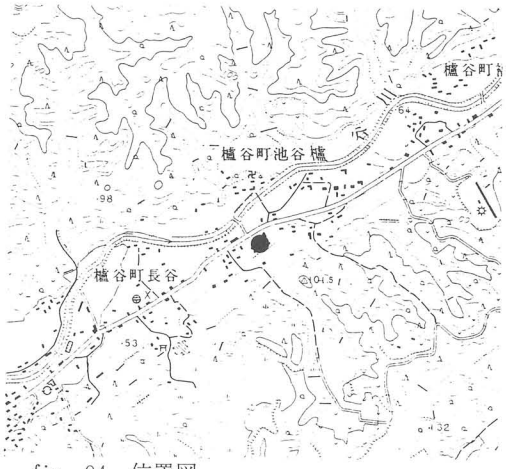


fig. 94　位置図

2．調査方法　調査は包含層までの盛土・旧耕土層約 1.5 m を重機で取りさった後、包含層の掘削、遺構面の検出につとめた。

3．調査概要　包含層は遺構面直上に約10cmの厚さで堆積する灰褐色細砂層である。遺物の出土量は少なく、多少、摩耗を受けている。遺構は黄褐色粘質土の地山を切り込んで造られている。

今回の調査で検出した遺構は、火葬墓と思われる長方形の土坑（SK01)、長い楕円形を呈する土坑（SK02)、楕円形を呈する小形の土坑（SK03・SK04）の他、小形のピット、杭状痕跡などがある。

土　坑　**SK01**　一部、地区外にあるため長さは不明であるが、幅２ｍ・深0.25ｍを計る土坑で、平面形は長方形を呈し、短辺に半円形の突出部がある。土坑内の埋土には多量の炭化物を含み、底面近くでは炭化物が厚く堆積する。

SK02　長4.2ｍ・最大幅1.5ｍ・深0.2ｍの細長い土坑である。中央付近は後世の攪乱により失なわれている。

SK03　長2.2ｍ・幅1.4ｍ・深0.2ｍの楕円形の土坑である。

SK04　長0.9ｍ・幅0.8ｍ・深0.1ｍの浅い小形の土坑である。

その他　小形のピットと杭状の痕跡５か所を検出しているが、性格は不明である。

4．まとめ　検出した遺構の内、特に留意すべきものはSK01である。この土坑は先にも述べたように長方形をし、その短辺に半円形の突出部を持つものである。同形の土坑は三重県菰野町、伊川谷町大門遺跡等で類例があり、埋土内の炭化物の出土状況なども近似している。

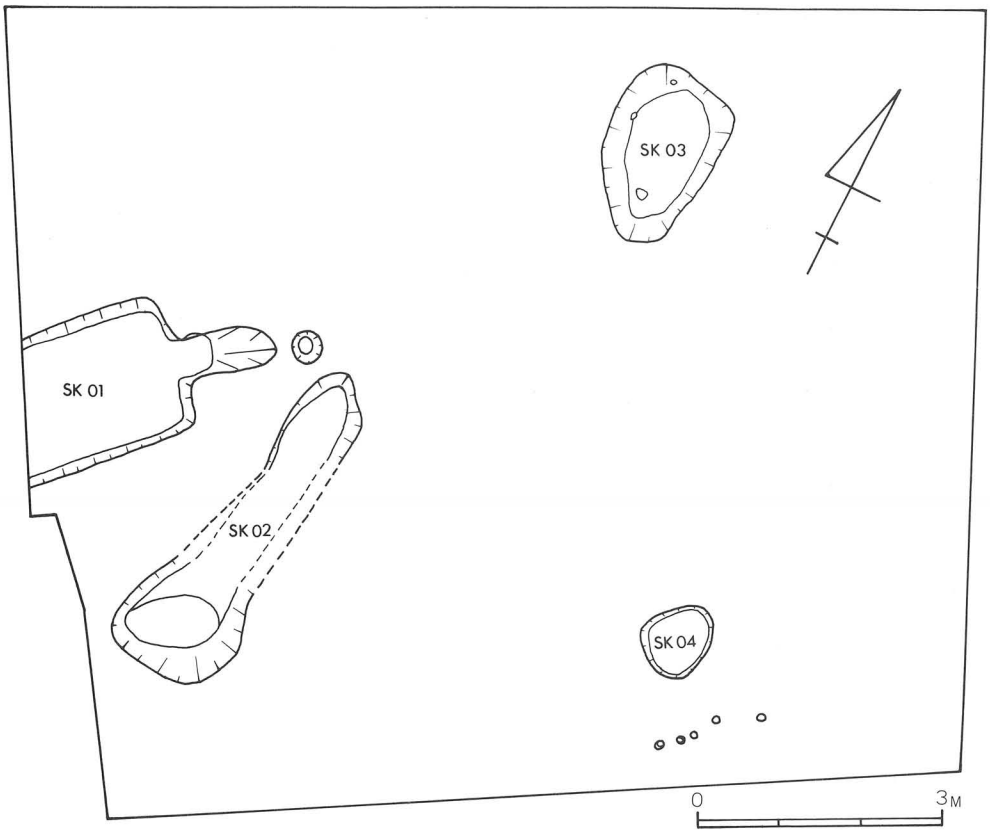


fig. 95　検出遺構平面図

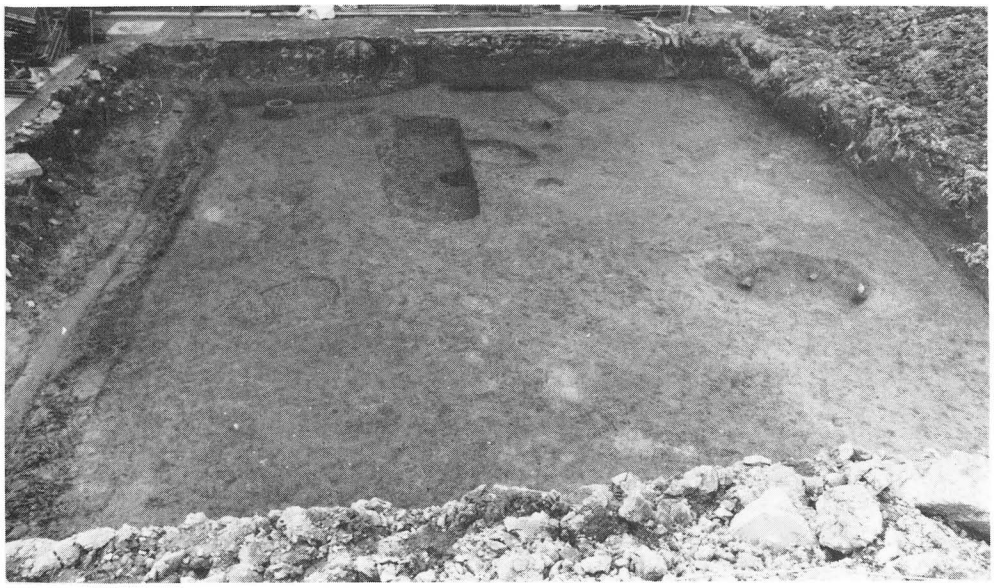
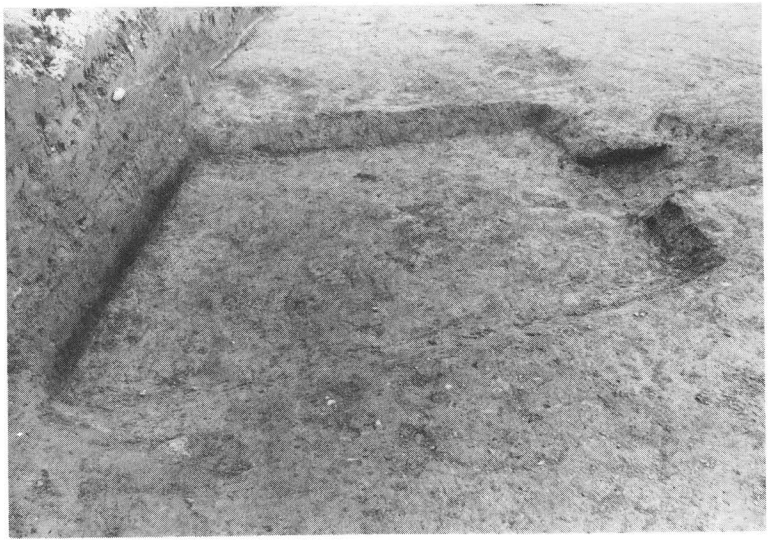


fig. 96　調査区全景（東から）

fig. 97　ＳＫ01



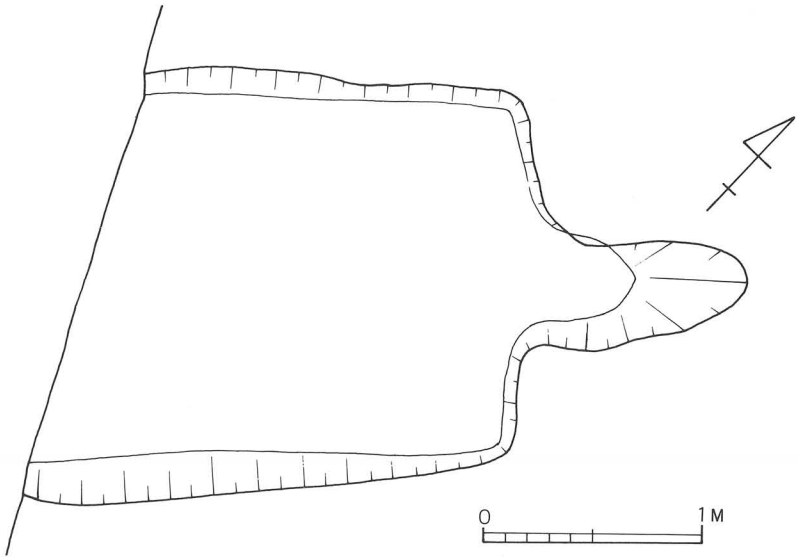


fig. 98　ＳＫ01実測図

これらの遺跡では短辺にある半円状の突出部を煙出しと考え「火葬墓」としている。当遺跡の場合もこれと同様の遺構と考えられるが、周辺部に火熱を受けた痕跡は残っていなかった。

その他の遺構については遺物がほとんど出土しないことや各遺構間の関連を考えるための資料がないため、詳細は不明である。また、ここで出土した遺物は小片のものが多い。器種は須恵器捏鉢・椀、土師器甕・皿などの他、白磁・青磁などの輸入陶磁器も少量出土している。これらの遺物の時期は13世紀中ごろのものである。

10. 居住（いすみ）遺跡

1．調査経過　当該地は明石川の左岸、居住・田中などの集落が所在する丘陵西南端の沖積地に位置している。

当該地の北側では第二神明道路の玉津インターチェンジ建設に際して発掘調査が実施され、中世土器片、弥生時代前期・中期の土器片及び石器が出土した。また、昭和55年２月には当該地の南側の水田で大規模店舗建設が計画されたため試掘調査を実施した結果、上層から中世の建物跡、下層からは弥生時代の遺物包含層が発見された。これらの資料から、当該地周辺には弥生時代、中世の集落が広範囲に存在しているものと考えられた。

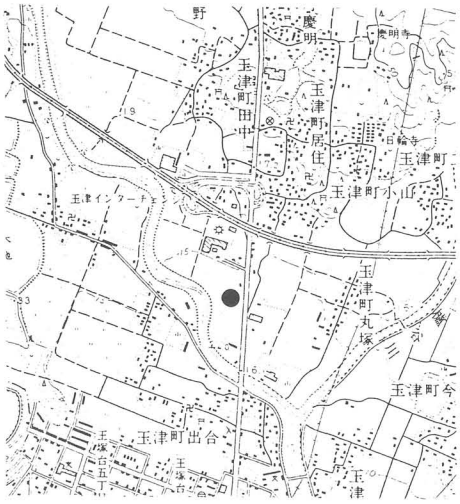


fig. 99　位置図

今回、当該地に西区総合庁舎が建設されることになったため、４月中旬から遺跡の存否を確認する調査を実施した。調査は、建物が建設される予定地区に６か所の試掘坑を設定して実施した。

調査の結果、北側の３か所の試掘坑で、中世遺物や柱穴が発見された。南側では河道跡と思われる砂礫層がみつかり、遺構・遺物は発見されなかった。そのため、遺物・遺構の発見された北側の試掘坑３か所の周辺 935 m²を全面調査した。

2．調査概要　調査は西区総合庁舎建設敷地の東北部に北辺37.0ｍ、南辺51.0ｍ、東辺42.5ｍ、西辺12.0ｍの台形状に調査区を設定して行った。地表下1.5ｍまでは重機によって掘削し、これ以下は人力によって掘削を行った。

層序は盛土（厚さ約1.3ｍ）、旧耕作土（厚さ約20cm）、床土（約24cm）、弥生土器、須恵器を含む灰色粘質土層（厚さ約20cm前後）と続き、この土層を取り去ると暗黄褐色粘質土の遺構面となる。

検出した遺構は、柵列１、溝状遺構３、柱穴10、土坑４、河道１である。

柵　列　SA01　2.2ｍ等間隔で掘形径20cm～25cmの円形である。柱径12cm～16cm、深さ約20cmをはかる。柵列の方向は約Ｎ20°Ｅである。

溝　SD01・02・03　黒灰色粘質土を埋土とする幅40cm前後、深さ約40cmの比較的浅い溝である。溝の形状は不定形である。溝内からは弥生土器細片が出土して

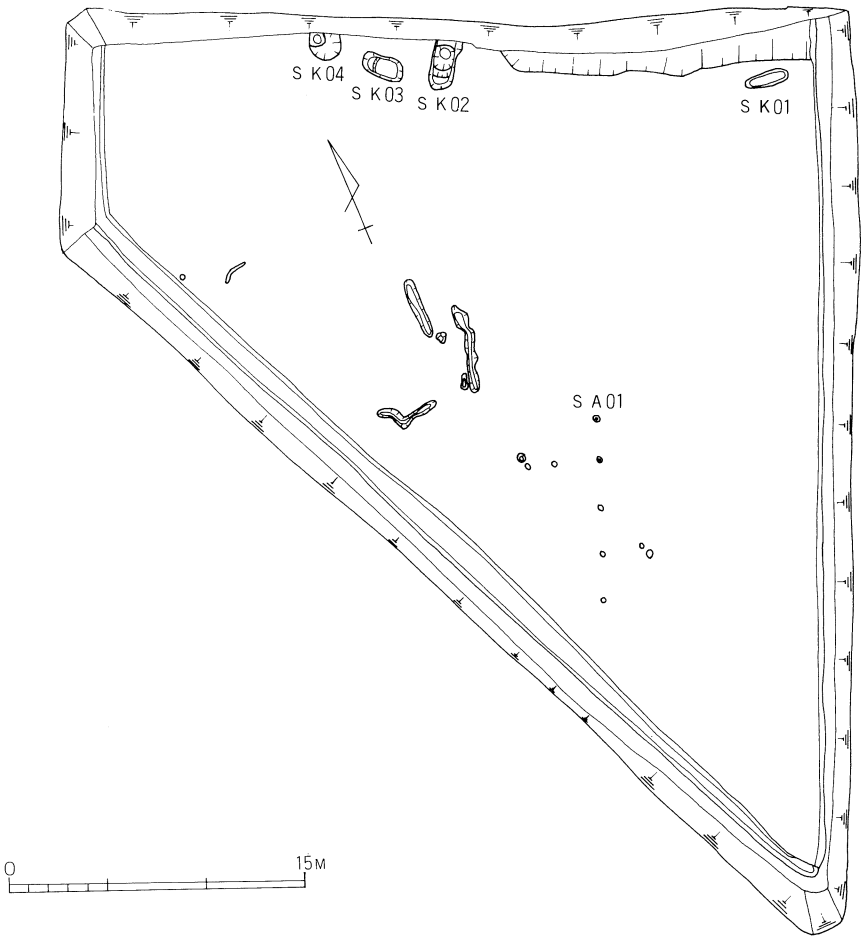


fig. 100 居住遺跡検出遺構図

いる。

土　坑　**SK01**　調査地の北東辺に位置し、長径2.24m、幅56cm、深さ10cm～5cmの長楕円形の土坑である。溝内の黒灰色粘土からは、弥生土器片が出土している。

SK02　調査地の北辺に3基の土坑群が発見され、東に位置するものをSK02とした。平面形は、南北に長い楕円形を呈する。長軸長は2.4m以上、幅1.52mを計測する。土坑は二段掘りになっており、土坑底からワラ状の有機物が出土している。土坑埋土からは、弥生土器片（壺口縁部）が出土した。

SK03　土坑群の中央に位置する。東西に長方形の土坑である。長軸長2.08m幅2.0m、深さ70cmを計る。土坑底は西側で一段高く掘られている。土坑の埋土からは弥生土器片（甕形土器片・高坏形土器片）が出土した。

SK04　3基の土坑群のうち西に位置する。東西に長い楕円形の土坑である。

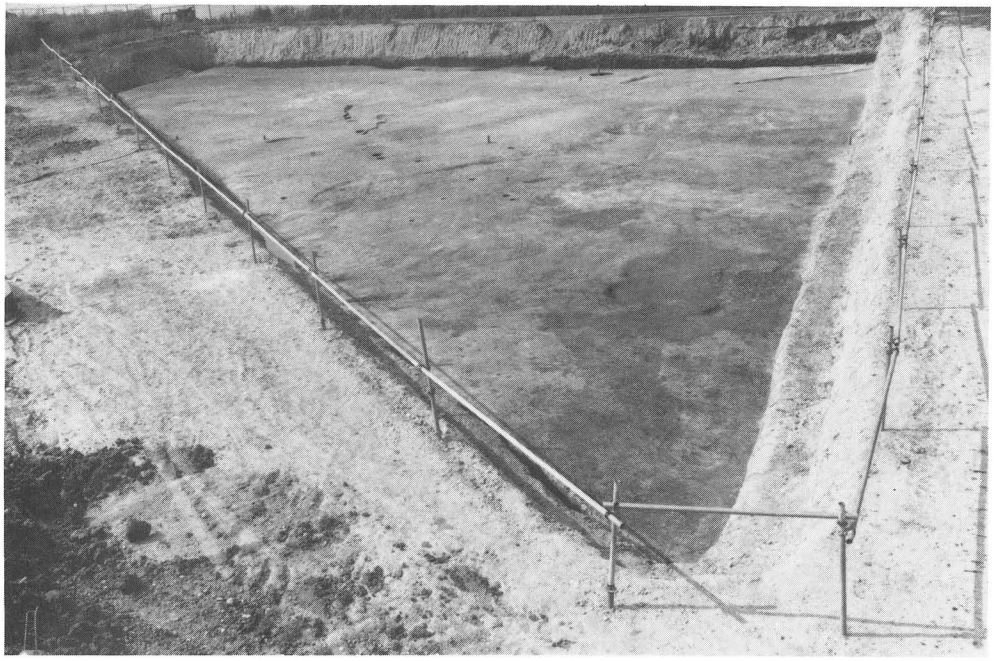


fig. 101 調査区全景（南から）

fig. 102 ＳＫ02～04（南から）

長径１.７ｍ、短径1.36ｍをはかる。土坑の西側は一段深く直径70cmの円形に掘り込まれている。深さは約55cmを計る。埋土内からは、遺物は発見されなかった。

河　道　調査地の北辺にそって、約16ｍにわたって検出した東西方向の河道である。黒灰色粘質土と灰色粘性砂質土が交互に堆積し、黒灰色粘質土中より弥生土器片が出土している。調査地より北側は、現代の水路掘形により、攪乱をうけている。

3．出土遺物　出土遺物は28ℓ入のコンテナーに3箱分出土している。主要な遺物は、柱穴内から須恵器埦、土師器皿、丸瓦片などが出土し、包含層からは弥生土器壺底部、貼り付け突帯文土器片が出土している。土坑及び河道の埋土内より、高坏形土器片、甕形土器片などが出土している。

柱穴内より出土した土器は、12世紀～13世紀ごろの時期と考えられる。

弥生土器は弥生時代中期～後期のものと考えられる。

fig. 103 柵列

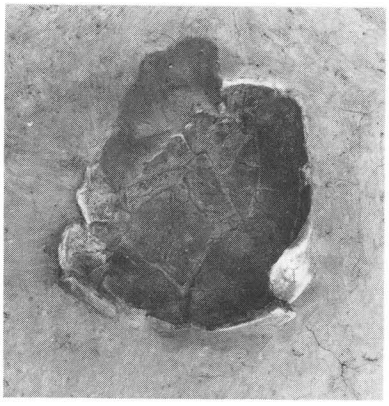


fig. 104　弥生土器出土状況

4．まとめ　今回居住遺跡の発掘調査では、中世（鎌倉時代）の柵列と弥生時代中期と考えられる土坑群を検出した。

柵列は、その方向をN20°Eにふり、明石郡の条里の方向と同一の数値を示している。現在の畦畔が条里の痕跡とするならば、今回発見した柵列は条里と何らかの関係ある遺構と考えることができる。柵列内の出土遺物から現在の畦畔の基本的な区画割りが、おそらく鎌倉時代にまで遡る可能性があると考えられる。

今後、明石川流域において、古代・中世の遺跡を調査する場合、条里との関係を常に留意して行うことが必要であろう。遺跡の範囲については、今回の調査結果から居住の現在の集落が存在する丘陵上から明石川左岸の河岸段丘と沖積地一帯と考えられ、従来認識されていた居住遺跡を大幅に拡大して考えねばならなくなったといえよう。

また従来、居住遺跡は、弥生時代前・中期の遺跡として認識されていたが、今回弥生時代後期の遺物も発見され、弥生時代全時期を通じて、集落が営まれた可能性を示唆している。

11. 居住（いすみ）・小山（こやま）遺跡

1．調査経過　当地区の南側平野部には、弥生時代前期から鎌倉時代に至る遺跡が存在し、東側丘陵上（慶明寺裏山）に後期古墳が群集している。

このような周辺の状況から、当地区内にも遺跡が存在すると予想されたため、居住・小山住宅街区整備事業対象区域内の確認調査を実施した。

2．調査方法　対象地区内で、後世の開墾によって著しく削平を受けている場所を除いて、２×２ｍの試掘坑を30か所設定した。

3．調査概要　30か所の試掘坑（以下T.Pと略称）のうち２地区６か所において、遺物包含層及び遺構が認められた。そのため１×４ｍのT･Pを６か所追加して、遺物包含層・遺構面の広がりを調査した。

他のT･Pは耕土直下に砂礫層の地山がみられ、後世の開墾によって削平されたものと推測された。

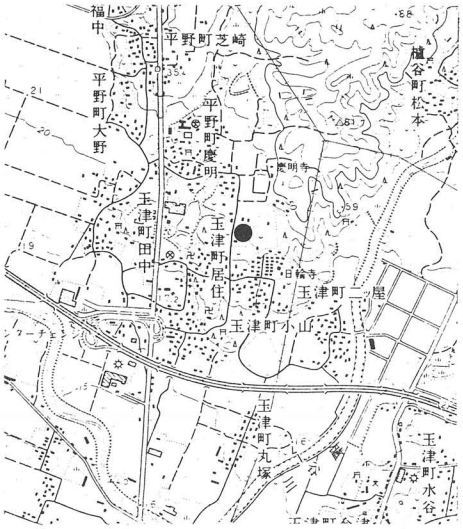


fig. 105　位置図

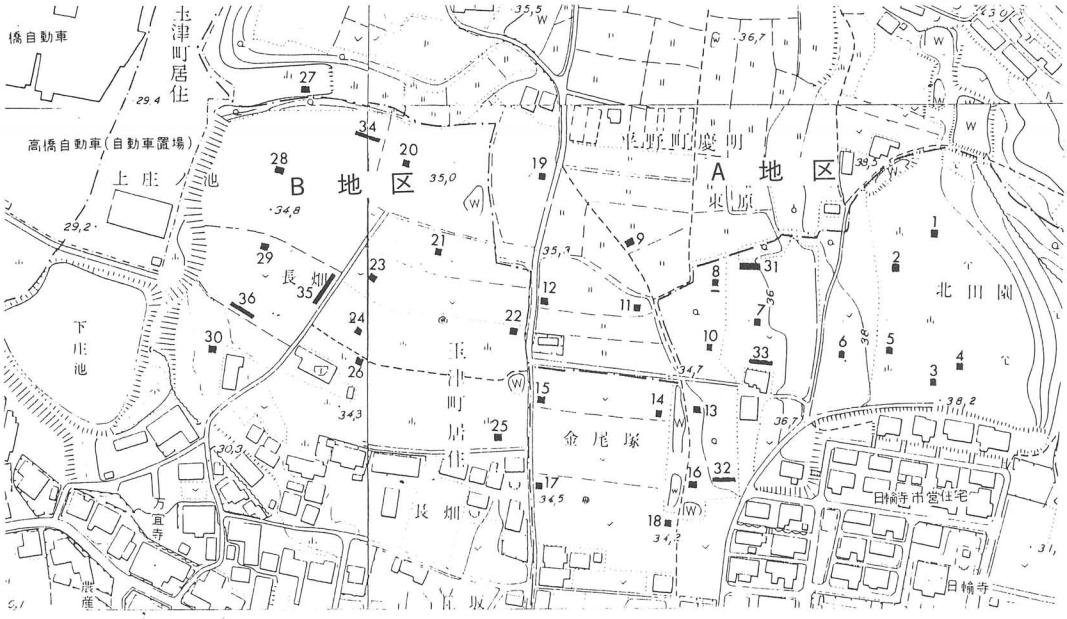


fig. 106　トレンチ配置図

A地区（小山字金尾塚東半）

T・P７は、南にゆるやかに下る南北方向の狭い谷部に設定したT・Pで、ここから幅1.5m以上、深さ0.2～0.3mの南北溝を検出した。溝中から磨滅の著しい須恵器片を発見したが、小片のためこの溝の時期を判定することはできなかった。しかし、溝直上の遺物包含層（灰茶色泥砂）からは13世紀前後の須恵器片が出土しており、この溝は少なくとも13世紀を下らないと考えられる。

T・P７の南北両側に設定したT・P31・32においても、同一の遺構面と遺物包含層が広がっていた。T・P31からは0.8×1.0m以上の楕円形土坑を検出した。この遺構の時期はT・P７の溝と同時期と考えられる。

T・P８・10はすでに遺物包含層が削平されていた。

T・P13・16・32では若干の須恵器を含む包含層と黄灰色粘質土を確認した。

fig. 107　T・P29

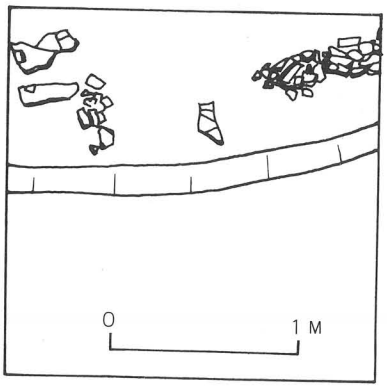


fig. 108　T・P29平面図

B地区（居住字長畑の西半）

T・P29の溝状遺構から、土師質羽釜１個体、平瓦、須恵器埦等が出土し、この遺物の時期は13世紀頃に比定できる。T・P28・29ではほとんど包含層は認められず、遺構は床土直下の地山面（黄色混礫粘質土）で検出された。

この遺構面の広がりを確認するために、T・P34・35・36を設定した。T・P34・36では、砂礫層が認められ、遺構が存在する可能性は少ない。T・P35では、T・P28・29と同一の地山面が認められたが、遺構は検出されなかった。

4．まとめ

合計36か所の試掘坑を設定し調査した結果、上記のA・B両地区が遺構の存在する範囲と考えられる。遺構・遺物の時期は、13世紀前後と推測される。両地区とも削平・攪乱が著しく、特にB地区ではほとんど遺物包含層が残存していなかった。またA地区の遺物包含層も遺物の包含量が多くなかった。

近年、明石川流域において、中世の集落址が台地上で発見される例が多く（平野町黒田遺跡・玉津町出合遺跡）、当遺跡も台地上に営まれた集落址の一つと考えられる。

12. 神出（かんで）・井吹（いぶき）地区分布調査報告

1．調査経過　昭和57年度、土地改良（圃場整備）事業予定地は、垂水区神出町田井・神納・同区平野町西戸田・櫨谷町池谷・伊川谷町小寺・同町井吹、北区道場町生野・同町塩田・日下部８地域である。

神出町田井・神納・伊川谷町井吹を除く６地域は、昭和56年度以前の分布調査及び試掘調査によって、遺物の分布範囲・遺跡の範囲を確認している。そのため今回の分布調査は、神出地区・井吹地区の２地区において実施した。

また、神出町田井地区・老ノ口地区では、遺物の散布の著しい４地点において、窯址の存在を確認するため、奈良国立文化財研究所・兵庫県教育委員会社教文化財課の指導と協力を得て、地磁気探査による窯体確認調査を実施した。

2．分布調査の成果

井吹地区

当地区周辺は伊川の支流である永井谷川の両岸の緩斜面を利用し、段々畑としている。57年度事業予定地及びその周辺部において分布調査を実施したが、遺物の散布は認められなかった。

神出地区

神　納　57年度事業予定地は大鳥喰池と小鳥喰池にはさまれた地区である。付近は平坦な高位段丘上にあり、西南方向へ緩やかに下降している。分布調査の結果、遺物の散布は認められなかった。

田　井　田井地区における昭和57年度事業予定地は、国道175号線の西、県道垂水－加古川線の北側にあたる田井地区の西北部である。付近は、西南方向より入り込む谷とその両側の段丘よりなる。

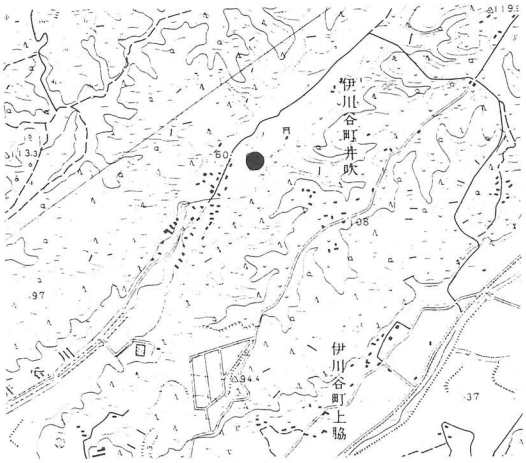


fig. 109　井吹地区位置図

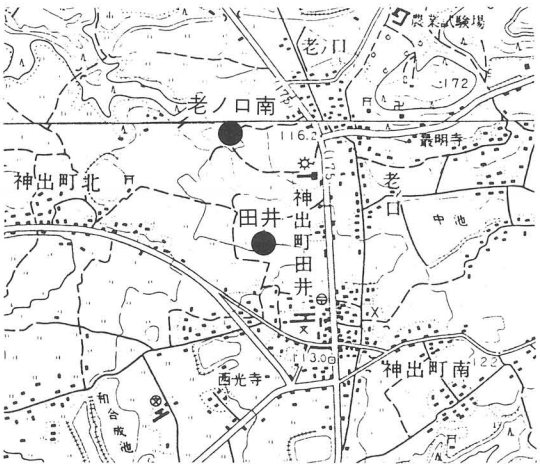


fig. 110　神出地区位置図

遺物の散布は段丘～谷部間の緩傾斜地において多く認められ、谷部・段丘上での散布は稀薄である。

特に遺物の散布が著しい地点は、神出農協北側、観音池北側、観音池東側の３地点である。

老ノ口　田井西北地区の北に続く国道175号線の西の部分である。遺物は調査地全域にわたって散布しているが、田井地区同様、谷部に多く段丘上には少ない。

また、灰原の露出（１地点）しているところや窯体（３基）の露出しているところを確認している。

３．地磁気探査

神出町田井、老ノ口両地区での分布調査によって、遺物の散布が顕著に認められ、地形などの状況から窯址が存在すると考えられる観音池北側(田井西)・観音池東側（田井北）・清水ケ池東側（老ノ口南）・上人谷池東（老ノ口北）の４地区において実施した。

田井西　田井西地区では、東西60ｍ×南北50ｍの範囲において実施した。この地区では南側の谷部とその北に位置する段丘面からなる。磁気探査の結果、谷と段丘接点付近に窯址と思われる箇所が４箇所（Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ）、窯址の可能性が高いと思われる２箇所（Ｆ・Ｇ）、窯址と考えられるが確認調査が必要な１箇所（Ｅ）の計７箇所の地点が確認された。

この内、Ａ～Ｄの４箇所は磁気の強弱を示すコンターライン、付近の地形などからほぼ南北に主軸をもつ窖窯の可能性が強い。

田井北　東西50ｍ×南北70ｍの範囲において実施した。この地区は南側約50ｍ、東西方向の主谷より北に向って進入する小侵食谷の最奥部とその両側に位置する段丘面である。

磁気探査の結果、窯址と思われる谷の東側段丘面で４箇所（Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｅ)、西側段丘面で１箇所（Ｄ）、計５か所の地点が確認された。

老ノ口南　広谷地区より東向に進入する谷の最も奥まった部分と、その南北両側の段丘面である。範囲は東西160ｍ×南北100ｍの範囲で実施した。地磁気の反応の著しい箇所が14か所存在した。その内、多くは農道上の測点である。農道中には鉄製品などが含まれている可能性が高く、その影響を受けているとも考えられる。ただ、そのすべてを鉄製品などの影響とも考え難く、少なくともその内の数基は窯体となるであろう。

老ノ口西　現在、データ処理中であるため、不明である。

13. 舞子古墳群西石ケ谷１号墳

１．調査目的　昭和55年度に、神戸市教育委員会文化課が発掘調査を実施した西石ケ谷１・２号墳のうち、１号墳について石室構築に係る掘形、および地山面の検出により、石室構築過程を解明する目的で発掘調査を実施した。

２．調査方法　墳丘に３本のセクションベルトを残し、他を地山面まで封土を取りはずし、石室掘形を検出した。

３．調査概要

石室掘形外部　調査の結果、墳丘北方の尾根の一部をカットしていたが、その他の部分については地山を整形した痕跡は確認できなかった。

また墳丘内の北方では、弧状にめぐる溝が一部検出された。これは、墳丘を盛り土する際、その範囲を決定する目印的なものであると考えられる。

石室掘形内部　石室を構成している石材は比較的大形で、しかも平滑な面がえられるように切りとっている。そのため石室掘形は比較的平坦であった。

ただし、左側玄門付近では、石材に奥ゆきがあるため、一部段掘りをおこなっている。

fig. 111　舞子古墳群位置図

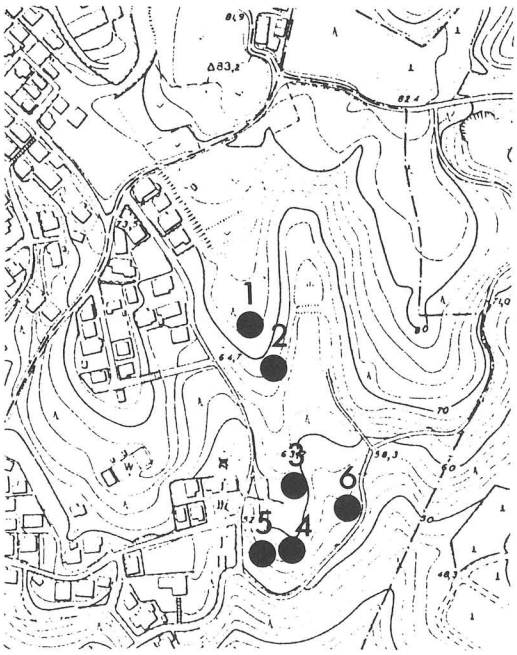


fig. 112　西石ケ谷支群古墳位置図

又、羨門から両側壁３石分には、掘形が存在していなかった。

石室の構築　石室はまず奥壁を置き、ついで玄門袖石を置いて玄室プランを決定し、玄室・羨道側壁を順次置き並べたものと考えられる。

又、前述の如く石材が比較的整形されている為、裏込めの石はあまり使用されていない。

石材を積んだ後、掘形内に土を充塡させるのであるが、土は灰まじりの土を使用しているが、封土のようにつきかためた形跡はなく、比較的軟かであった。

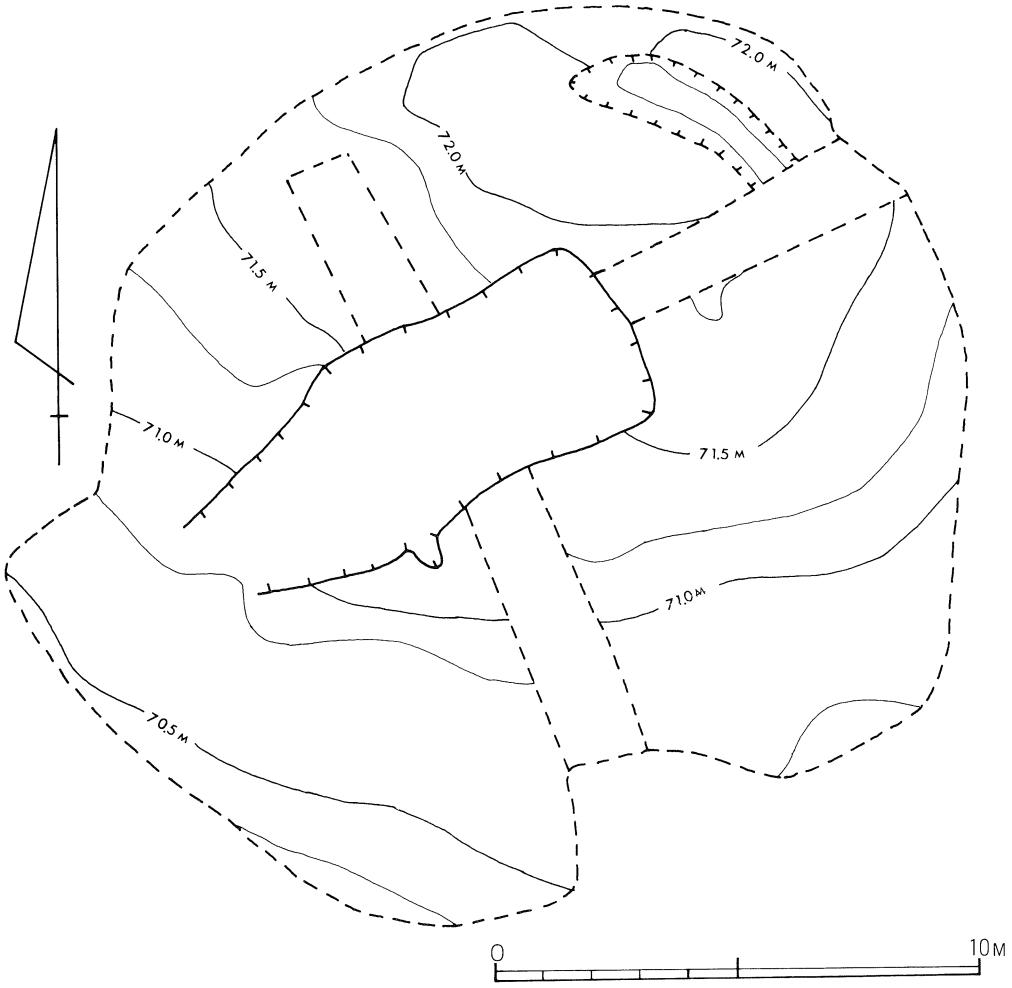


fig. 113　西石ケ谷１号墳地山測量図

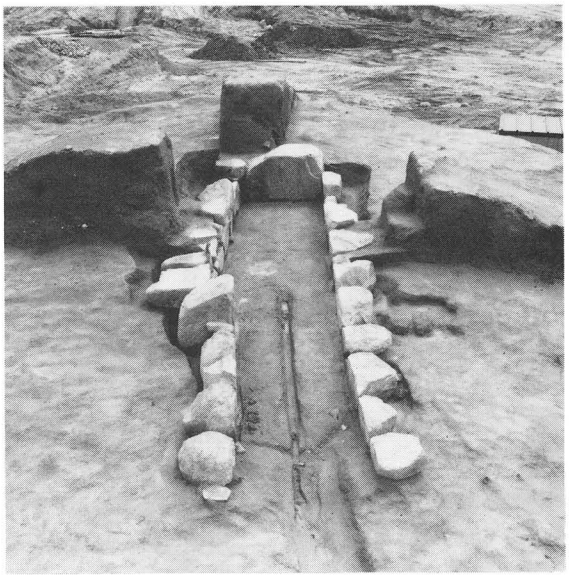


fig. 114　西石ケ谷１号墳石室掘形（石材除去前）

fig. 115　同左（石材除去後）

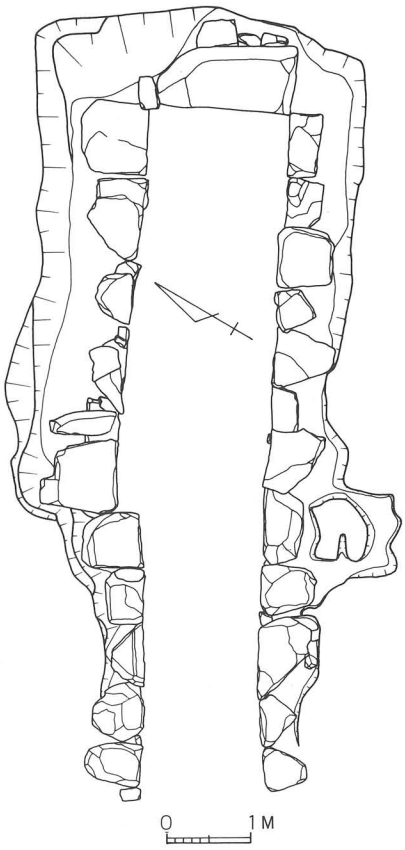


fig. 116　西石ケ谷１号墳石室掘形実測図（石材除去前）

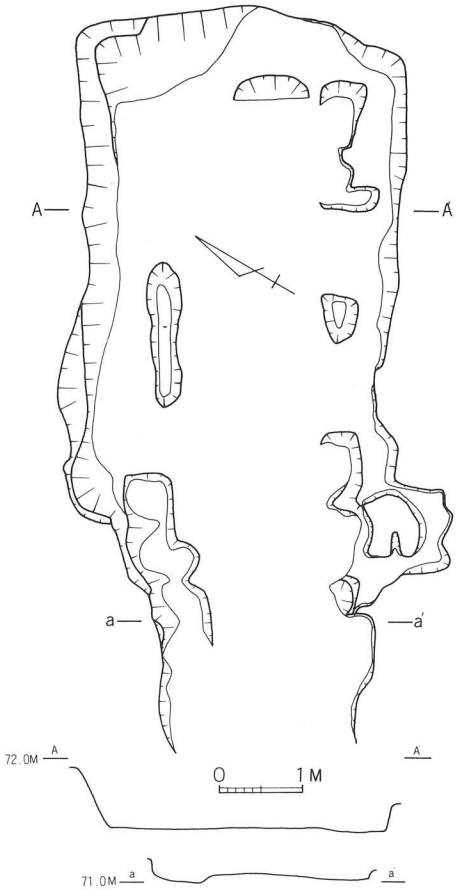


fig. 117　同左（石材除去後）

14. 舞子古墳群西石ケ谷４号墳

１．調査目的　昭和55年度に、神戸市教育委員会文化課が発掘調査を実施した西石ケ谷４・５号墳のうち、４号墳について石室構築に係る掘形、および地山面の検出により、石室構築過程を解明する目的で発掘調査を実施した。

２．調査方法　墳丘に３本のセクションベルトを残し、他を地山面まで封土を取りはずし、石室掘形を検出した。

３．調査概要

石室掘形外部　墳丘北方（尾根上部）は調査対象外で、尾根をカットしている様子は確認できなかった。しかし、この４号墳は尾根先端に位置しているため、墳丘の南北両端の比高が４ｍもあり、石室の平坦面を確保するのに苦心したものと思われる。墳丘封土は少なく、古墳自体の形状もあまり整っていない。

石室掘形内部　石室を構成する石材は比較的小形で、しかも転石をそのまま利用したとも思

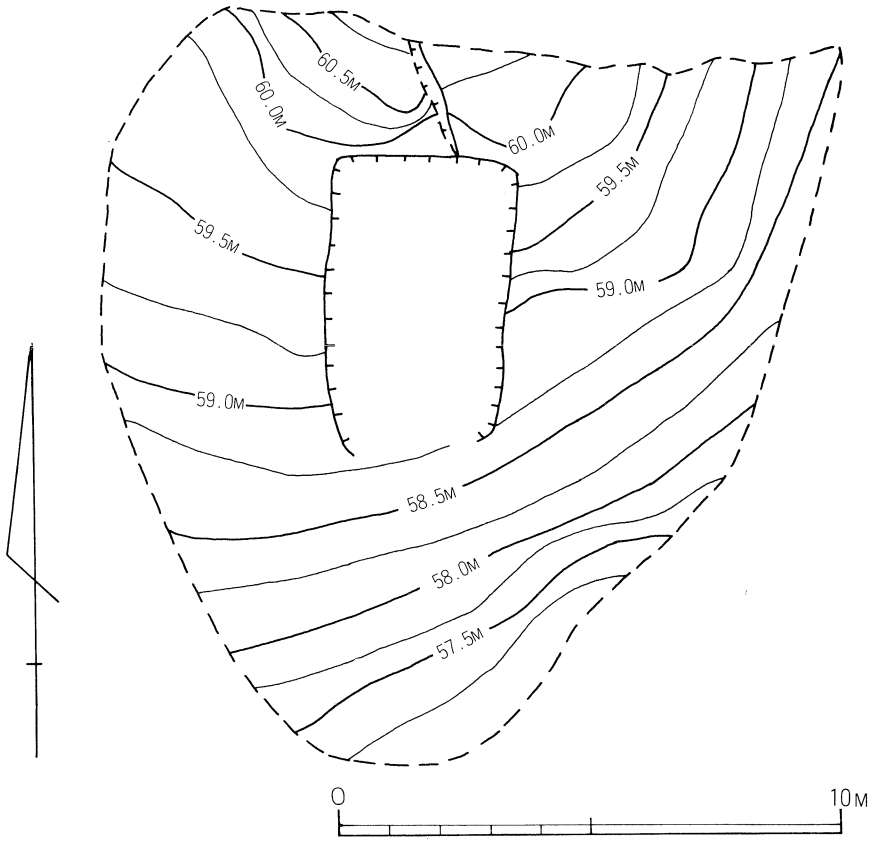


fig. 118　西石ケ谷４号墳地山測量図

われる球状のものが殆んどであった。そのため、掘形底面には凹凸が多く、石室構築には根固めの石が多く使用された。特に、玄門袖石は立てられているため、根固めがしっかりなされていた。

また前述の如く、立地場所の関係で石室平坦面を確保するために、掘形内の土1m程度を前方にかき出し、その土を羨道部として盛り、平坦面をつくっている。

石室の構築　石材は、奥壁から原則的に置いているが、玄門袖石は玄室プランを決定するためか、玄室両側壁石に先行して設置している。

西石ケ谷4号墳周辺の刻印石について

この西石ケ谷4号墳の調査の際、石材の切り出し穴と思われるものや石材を切る時の「矢穴」が数ケ所で発見された。しかし、時期や目的は不明であった。

ところで、昭和54、55年度にわたり、明石城内の発掘調査が兵庫県教育委員会によって実施された際、城垣に使用された石材の刻印が多く確認された。その一部の刻印と類以したものが、この西石ヶ谷4号墳の調査範囲内や周辺にお

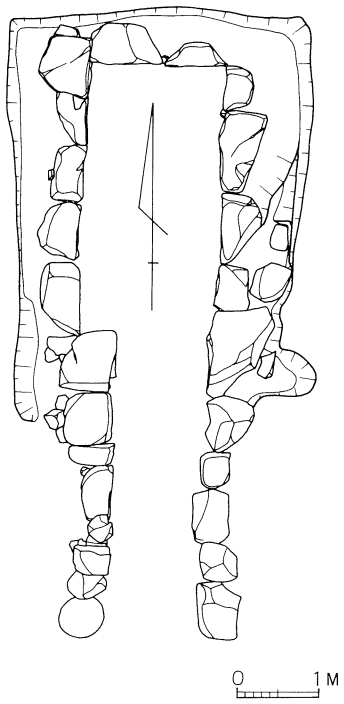


fig. 119　4号墳掘形平面実測図（石材除去前）

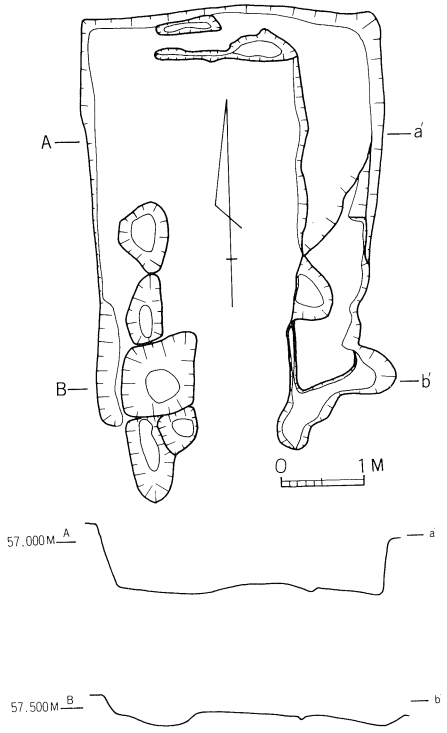


fig. 120　同左（石材除去後）

いて発見された。

発見された刻印は「○」ないし「□」と「－」であり、他多数の「矢穴」を確認した。これらの刻印は特に、明石城東ノ丸北側石垣に集中している様である。

刻印の意味については、下記のように種々の説が上げられる。

①石材の用途「－」の刻まれた石は隅石に使用されるのに適した石材で、そうした用途を分けるために刻んだ

②石工の印

③石材調達を命じられた大名の印

しかし、今回発見された刻印や矢穴だけでは、これらの説を裏付けることはできなかった。ただ、今回発見されたこの4号墳の周辺が、明石城石垣の石切り場の一つであったことが判明した意義は大きい。

これらの刻印石や矢穴の残っている石は、4号墳の移築と平行し、移築保存する予定である。なお、この刻印石の発見と供給先の確認については、兵庫県教育委員会の助言と芦の芽グループ藤川祐作、古川久雄両氏の教示を得た。

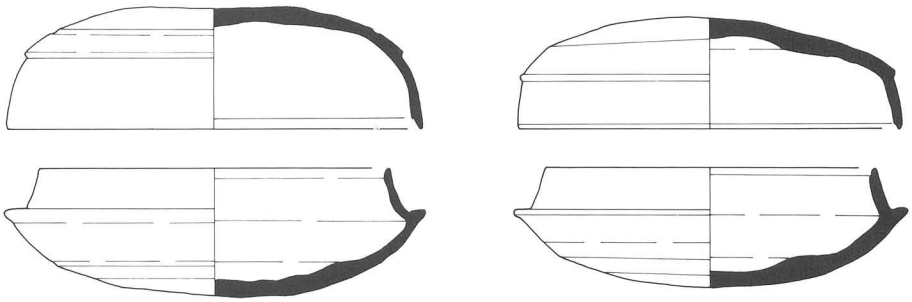


fig. 121　西石ケ谷4号墳墳丘北側溝内出土須恵器　S＝1：3

fig. 122　西石ケ谷4号墳石室掘形（石材除去前）

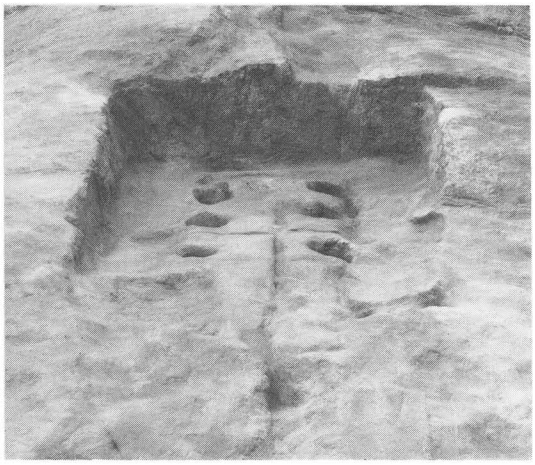


fig. 123　同左（石材除去後）

15. 舞子古墳群西石ケ谷３号墳

１．はじめに　舞子古墳群は、神戸市垂水区舞子陵、舞子坂２丁目、３丁目に存在する後期古墳群である。

古墳は、尾根ごとに数基ずつまとまって存在しており、西から大歳山支群、西市ケ坂支群、東市ケ坂支群、毘沙門塚支群、西石ケ谷支群、東石ケ谷支群、尼ケ谷支群、山田台支群、舞子台支群、星陵台支群の10支群に分けられる。今回発掘調査を実施した３号墳は、西石ケ谷支群に属する古墳である。

２．調査概要　これまで西石ケ谷支群に属する古墳を４基調査している。今回、発掘調査を実施した３号墳は、１・２号墳と４・５号墳の間、標高62ｍの尾根上に立地している（fig.112)。

古墳の規模・形態　３号墳は墳丘がほとんど削平され、わずかに西側で盛土を残すのみであった。推定される古墳の大きさは、直径12ｍ（高さは不明）で、円墳と思われる。埋葬施設は南に開口する右片袖の横穴式石室で、玄室右側壁、羨道両側壁を残存していた。

羨道内から東側の谷に向けて排水溝が掘られており、排水溝は羨道入口からＬ字状に大きく屈曲していた。排水溝は長さが10ｍ、幅80㎝、深さ30㎝であった。

fig. 124　西石ケ谷３号墳全景（南から）

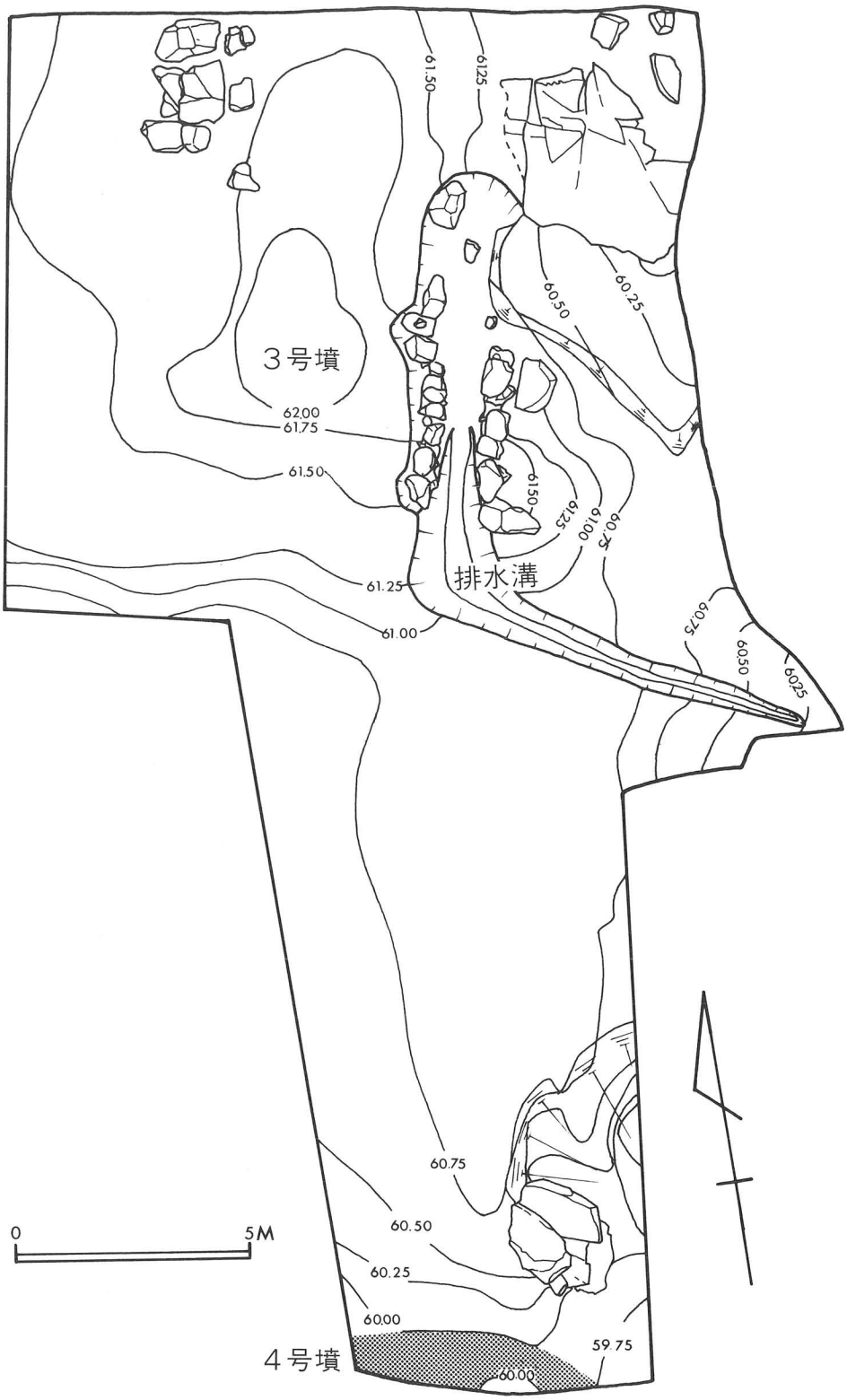


fig. 125　西石ケ谷3号墳墳丘測量図

墳　丘　古墳の構築方法は、地山を平坦に整形し、長方形の墓坑を掘りこみ、石室の石積と並行して盛土を行っている。褐色土と灰色土を交互に積み上げながら盛土を行ったものと思われる。墳丘の外表には、埴輪・葺石等の施設は存在していない。

石　室　石室の主軸はN20°Eを計る。石室は右片袖の横穴式石室で、幅1.3m、長さ3.7mの長方形の玄室に、幅0.9m、長さ3.2mの羨道をとりつけたものである。羨道は外に向けてやや開いており石積みは、そで石を除き花崗岩の自然石を横積みし、側壁は、上段へ行くに従って石室内へせり出している。玄室内の基底石は、羨道内の基底石に比べ一まわり大きい石が用いられている。

被葬者　羨道内に幅60cm、長さ2.1mの木棺跡が遺存していた。木棺には赤色顔料が塗布されていたと考えられ、棺の範囲内に赤色顔料が残っていた。被葬者の頭位は北で、腰のあたりに刀子が副葬されていた。

また、玄室内右側壁沿いから金環と刀子が出土しており、ここにも頭位を北にした一体が納められていたと推定される。

玄室内左半分は破壊されているが、ここにさらに一体の被葬者が安置されていた可能性が高い。したがって3号墳には、3体の被葬者が安置されていたものと推定される。

fig. 126　排水溝

fig. 127　石室（玄室より羨道をのぞむ）

fig. 128　羨道内木棺跡

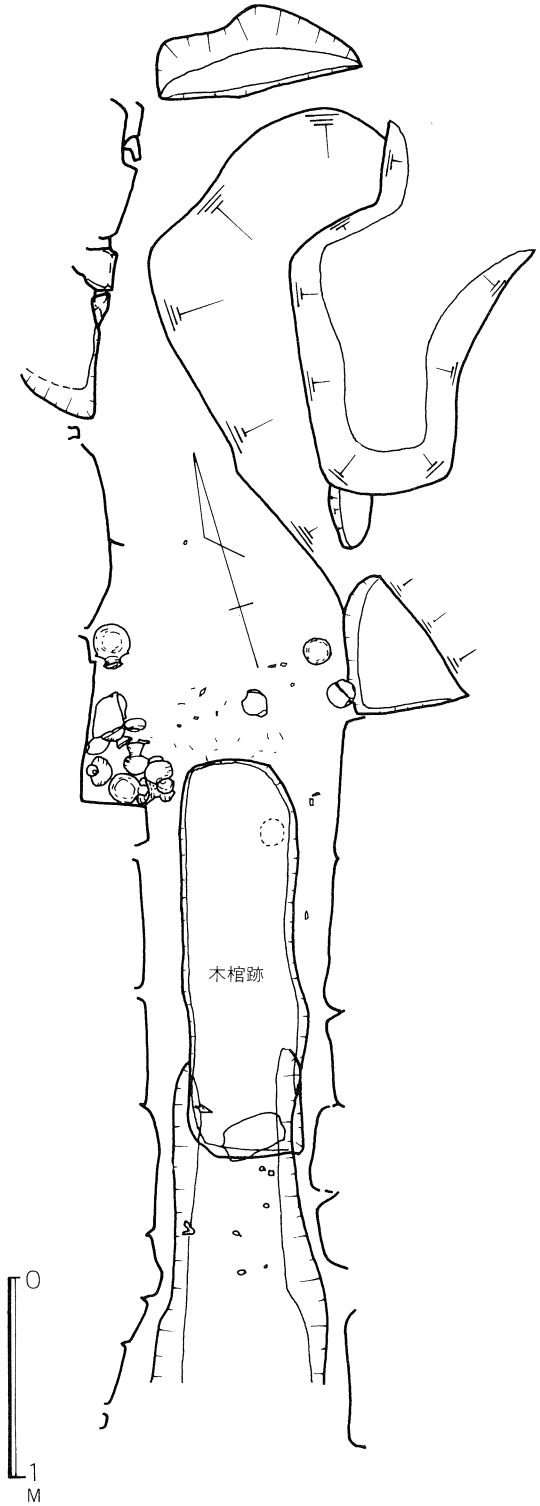


fig. 129　石室平面図

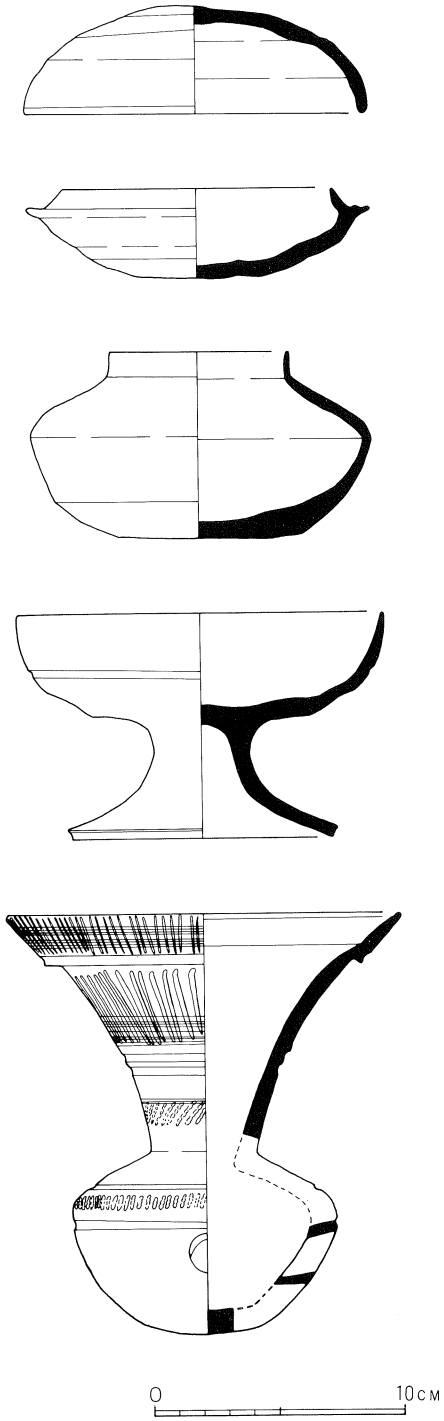


fig. 130　3号墳出土遺物

3．出土遺物　遺物はそでから須恵器群がまとまって出土したほか、玄門付近からも鉄製品が多数出土している。また羨道内からは、轡、帯金具等の馬具が出土している。

玄室内そで付近からまとまって出土している須恵器には、瓿、提瓶、台付壺、短頸壺、高坏等がみられる。液体を貯蔵し、或いはそそぐ容器が中心で、葬送儀礼の際にこれらの土器が用いられたと想定される。これら一群の須恵器がいつの時点でそでに集められたかは不明であるが、須恵器の型式から推して、羨道内の最終埋葬の際に、ここに集められたと考えられる。なお、玄室内からはこの他に、須恵器坏や鉄鏃、鋲、釘、刀子、被葬者の身につけていた金環などが出土している。

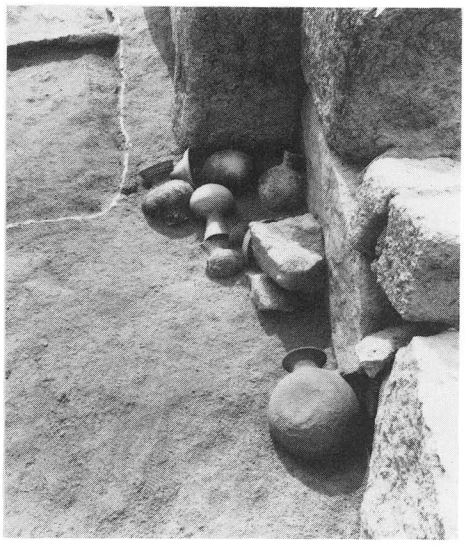


fig. 131　そで付近遺物出土状況

また羨道内から出土した馬具は、先述したように帯金具と轡であるが、原位置をとどめておらず、散乱した状態で出土している。したがって、これらの馬具類は、羨道内の最終埋葬に伴うものとは思われず、玄室内の第一次埋葬の際に副葬されたものと考えられる。

出　土　遺　物　一　覧　表

遺物名	土師器	須恵器										鉄器							金環	石鏃	合計
		坏身	坏蓋	提瓶	瓿	長頸壺	台付壺	台付壺蓋	高坏	短頸壺	横瓮	刀	刀子	釘	カスガイ	鏃	帯金具	くつわ			
出土点数	1	1	2	3	2	1	1	1	3	2	2	1	3	4	1	3	1	2	1	1	36

4．まとめ　西石ケ谷3号墳には、先にも述べたように、3体葬られていた。3号墳を築造した古代家族の構成員の死に際し、順次、石室内へ追葬されていった。3号墳の築造は、玄室内に葬られた最初の被葬者の死に際して行われたと推定される。馬具類は、この第一次被葬者に伴うものである。石室内に副葬された須恵器の型式から第一次埋葬から最終埋葬までの時間幅は、一型式内に収まるものと考えられる。したがって、その年代は6世紀後半に築造し、追葬されていったものと考えられる。

16. 舞子古墳群西石ケ谷6号墳

1. はじめに　西石ケ谷支群は、神戸市垂水区舞子坂2丁目の住宅地に接して、北から南へ緩やかにのびる尾根上に点在する古墳群である。西石ケ谷6号墳は、西石ケ谷3号墳の東20mに位置し、西石ケ谷の主尾根から派生した支脈上に立地している。その標高は56mである。

2. 調査概要

古墳の規模・形態　6号墳は、東側半分が道路によって切断されていたため、西側半分が残存しているにすぎない。古墳の北側に裾を画する掘り込みがみられ、それによって推定される古墳の形と規模は、直径12m（高さは不明）の円墳である。

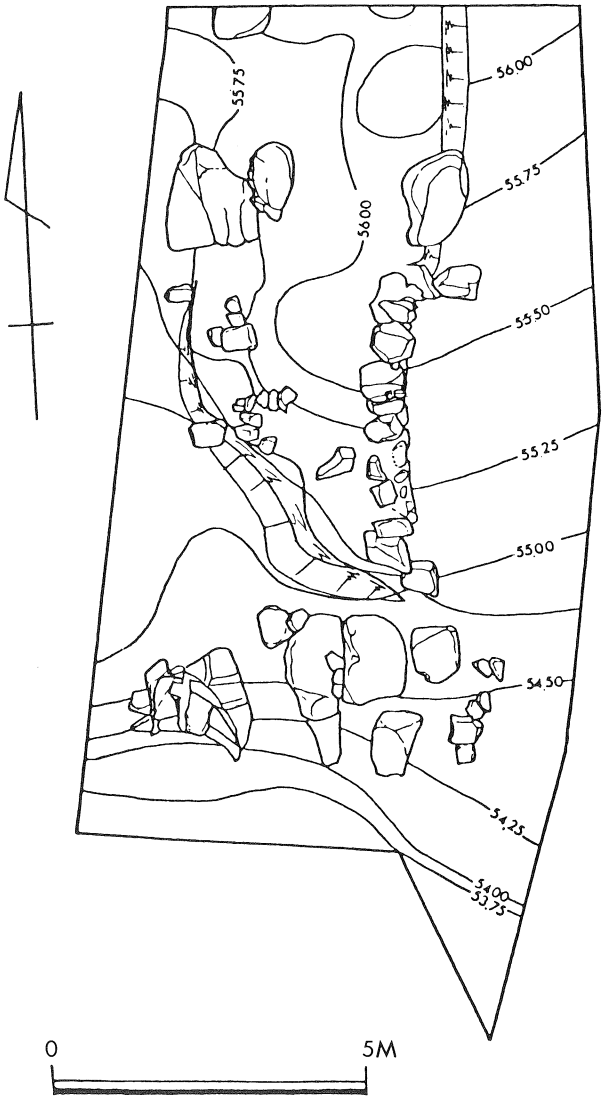
埋葬施設は、南に開口する右片袖の横穴式石室である。

墳　丘　6号墳は、花崗岩の基岩が露出している場所に築造されているため、墳丘はその花崗岩を蔽うようにして盛土されている。墳丘は、灰色砂質土と褐色土を用いて交互に積み上げているが、砂質土という性格のため、かなり流失している。なお、墳丘の外表には、葺石、列石等の施設はみられない。

埋葬施設　埋葬施設は、右片袖の横穴式石室で、石室主軸はN5°Eである。奥壁と玄室右側壁と羨門石とが残存していたが、他はすでに失われていた。

fig. 132　西石ケ谷6号墳全景（南から）

fig. 133　西石ヶ谷６号墳墳丘測量図



石室は、長さ4.4m、幅1.1m以上の玄室に長さ3.4m(幅は不明)の羨道をとりつけたものである。側壁は、基底から第３段目まで遺存していたが、第１石は長さ１m程の巨石が用いられている。使用石材は、花崗岩である。

奥壁の基底と羨門基底とのレベル差が約１mあり、石室床面は築造当初からこのように傾斜していたものと思われる。

fig. 134　玄室右側壁と奥壁（東から）

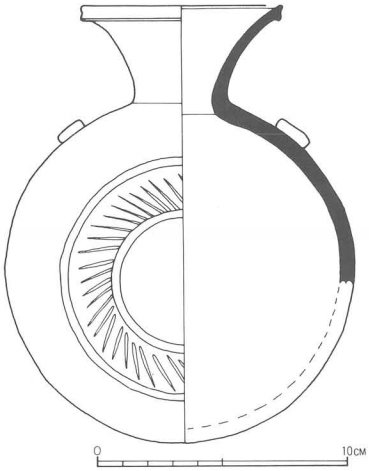


fig. 135　遺物実測図

fig. 136　玄室奥壁遺物出土状況

3．出土遺物　石室内はすでに床面まで削平されていたため、遺物は奥壁隅から須恵器と鉄製品が出土したのみである。出土した須恵器は台付長頸壺と提瓶であり、鉄製品は刀、鉄鏃、釘などである。なお、玄室内攪乱土中から金環が1点出土している。

4．まとめ　西石ケ谷6号墳は、先述したように、1号墳から5号墳が存在する尾根から東側の谷に向けて派生した支脈上に立地している。この地点は、花崗岩の基岩が露出しており、古墳を築造する上では、劣悪な条件下にあったと思われる。

しかし、この地点を造墓地として選出した背景には、古墳造営の際に受ける集団間規制が働いたものと考えられる。6号墳の築造は、3号墳の存在を前提として行われたものと考えられ、3号墳と6号墳は墓域を共有した血縁集団のものと考えられる。

17. 松野（まつの）遺跡

1．調査経過　市営松野住宅の建設に伴う試掘調査によって発見された遺跡である。試掘調査では、弥生時代前期の木葉文土器が出土したため、同時期の遺構の存在が予想された。しかし、第１次調査が進むにつれ古墳時代掘立柱建物址群、柵址が現われ、古墳時代の遺跡であることが判明した。調査は柵内の完掘を目的とし、一部保存区域についても実施した。この保存区域は、調査終了後、真砂土によって埋め戻しを行った。

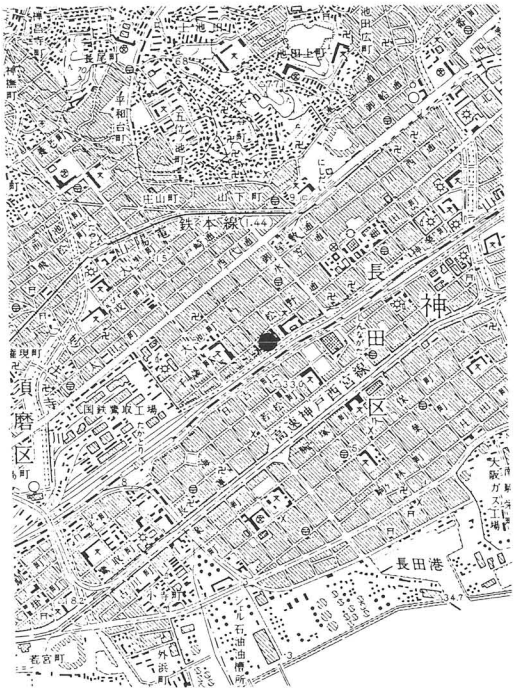


fig. 137　位置図

2．調査概要　調査区の基本層序は、上から現代整地層、耕土、床土、旧耕土、旧床土、灰色砂質土（中世遺物を若干含む）、暗灰褐色泥砂（古墳時代遺物包含層、厚さ５cm）、青灰色砂質土または黄灰色砂質土(遺構面)の順である。

遺構面は、標高8.0m付近で、全体に南に向かって緩やかに傾斜し、SB06を境に東西にも傾斜している。

断面観察によれば遺構面である黄灰色砂質土もしくは黄色粗砂は、弥生時代中期以前の流れ堆積と推定される。試掘の際の木葉文土器は、この層から出土している。

灰色砂質土からは中世の遺物が数点出土しているが、これに伴う遺構は検出されなかった。暗灰褐色泥砂からは、古墳時代の土器が若干出土しているが顕著なものはない。

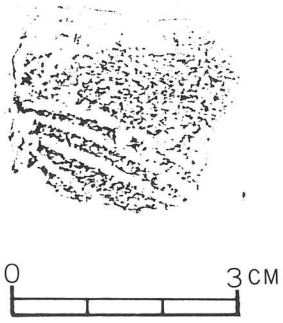


fig. 138　木葉文土器拓影

検出遺構
古墳時代　主な遺構としては掘立柱建物址８棟、竪穴式住居址１軒、溝２条、柵址４列等が検出された。

建物址はSB03を除いてすべて南北棟である。ただし、SB06は東側に縁台がとりついているようである。このうちSB05は、両側に棟持柱をもつ例である。各建物はほぼ同時存在と考えられる。

柵址SA01とSA02は西辺で柱掘形に切り合い関係があり、これによるとSA02は後出のものと考えられる。この事実は、柵内の空間を縮小したことを示す。SA02の南辺中央には明らかに「門」の施設が存在していたと推定され、SA01の北辺東隅には、SA03とで区画された空間へ至る通路があったと推測できる。なお、SA01東辺、北辺には支柱と推測される小ピットがほぼ1本間隔に認められた。

柱掘形は一辺約50cmの方形で、深さは60～80cmを計る。埋土は黄色土と黒色土の互層である。柱の直径は約25cmである。残存していた柱材は、鑑定の結果すべてコウヤマキであることが判明している。

弥生時代　土坑と井戸が第1トレンチの東側と西側で検出された。土坑のプランは不整形で、深さは30cm程度である。おそらく古墳時代の整地の際に遺構面が削平されたものと推定される。住居址は検出されなかった。時期は後期後半と考えられる。

3．出土遺物　古墳時代の須恵器は、中村浩氏編年の第Ⅰ期5段階にほぼ相当する。坏が圧倒的に多く、この時期特有の甕の高率出土傾向は認められない。坏のヘラ記号は、「×」と「／」が数点づつ出土している。坏の大きさはバラエティに富む。柱掘形と溝内出土の遺物には若干の新旧関係が認められるが、全体に時期差はなく、遺跡の存続期間がそれほど長くなかったことを窺わせる。土師器は、溝内から大形甕、小形甕、鉢のセットが出土している。

弥生式土器は、形態、調整（甕外面のハケ目、ヘラ磨き）等から考えて後期後半に属すると推測されるが、この地域での比較資料が乏しいため確定し難い。

剣形模造品とみられる滑石製品が1点遺構面直上から出土している。

4．まとめ　5世紀末～6世紀初頭という掘立柱建物が全国でも少かった時期の柵に囲まれ、整然と配置された建物群の検出は、極めて面期的なことである。

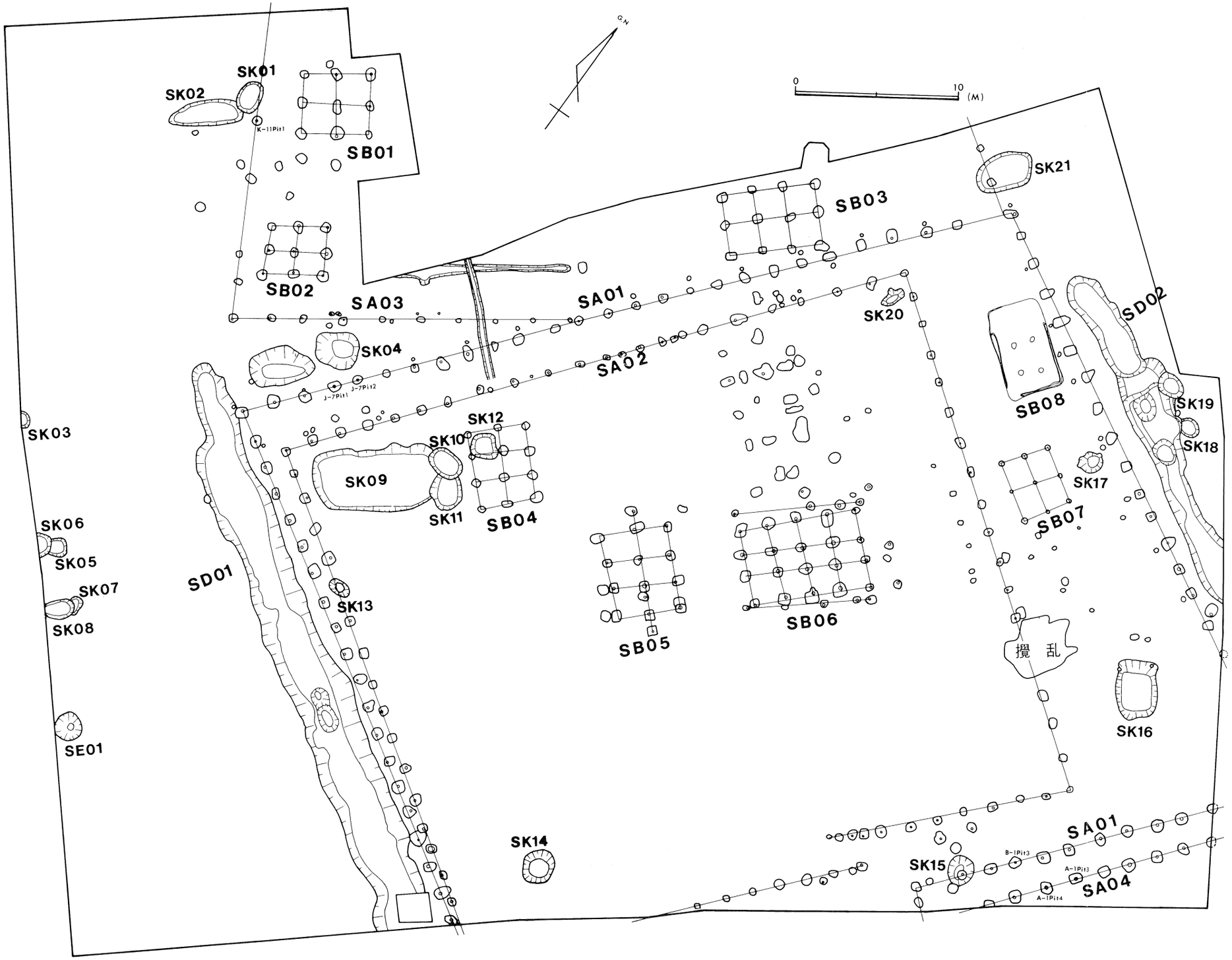
特に注目されるのは、SB05とSB06の存在である。宮本長二郎氏の復元によるとSB06は、奈良県佐味田宝塚古墳出土の家屋文鏡の入母屋屋根高床建築と同一形式とみられ、SB05は、現在知り得る棟持柱を有する最古の建築址例で、建築的には伊勢神宮本殿の祖形として位置付けられている。

近年、群馬県三ツ寺遺跡、原之城遺跡、和歌山県鳴滝遺跡などで古墳時代掘立柱建物址群が続々と検出されており、いずれも明確な区画を施している。

当遺跡の区画も非日常的な空間である可能性が高い。これらの歴史的背景や古墳時代集落構造を知る上で、当遺跡にも多くの課題が残されている。

fig. 139　松野遺跡全景

fig 140 松野遺跡第1トレンチ平面図



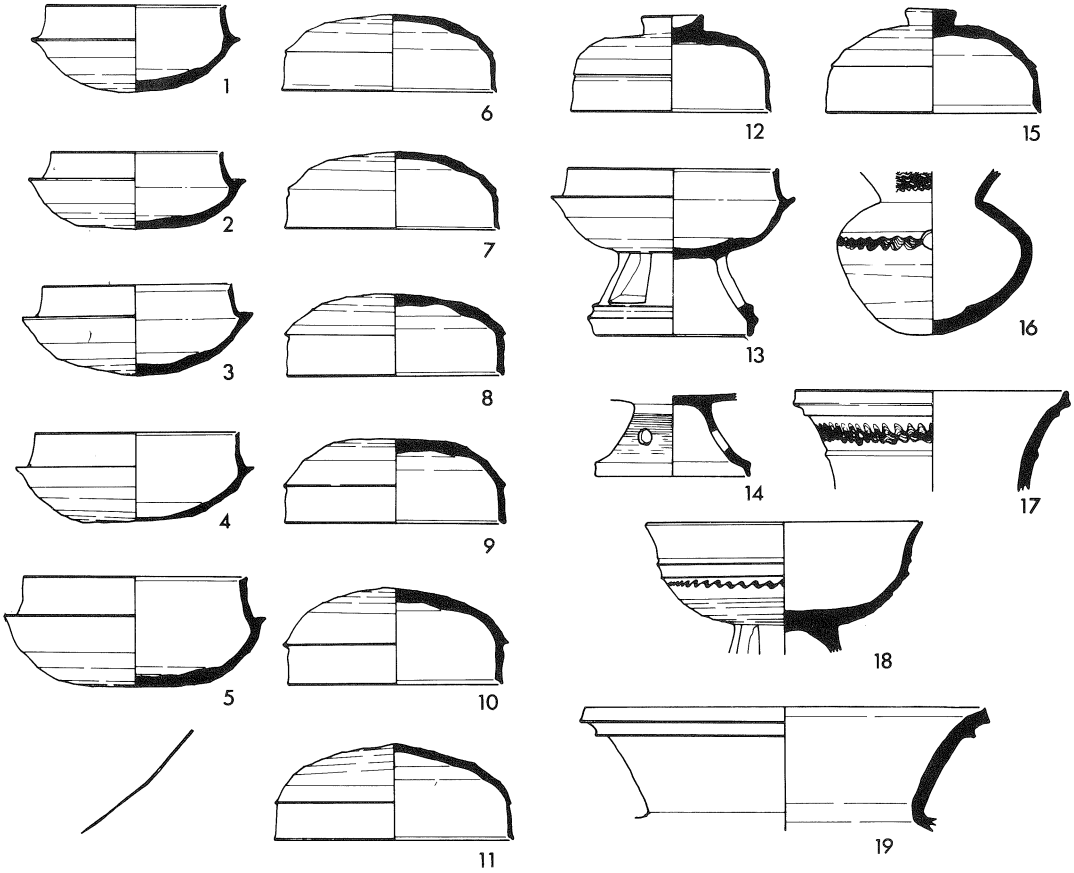


fig. 141　松野遺跡出土須恵器(２、14はＳＤＯ1、他はＳＤＯ2出土)Ｓ＝１：４

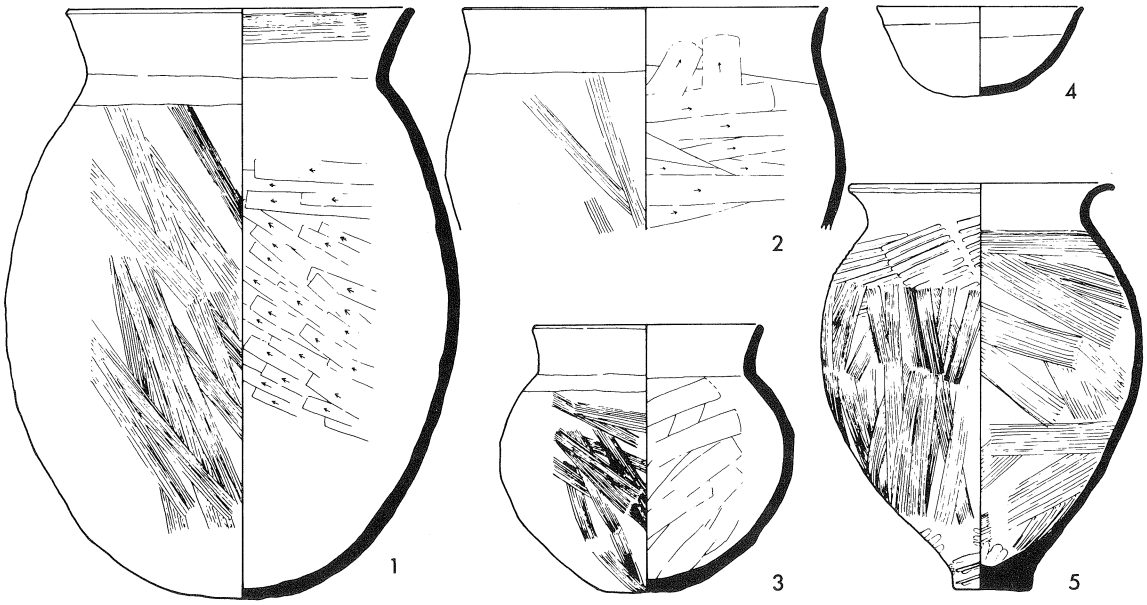


fig. 142　松野遺跡出土弥生土器、土師器（１～４はＳＤＯ2、5はＳＫ17出土）　Ｓ＝１：４

18. 滝ノ奥（たきのおく）遺跡

1．調査経過　滝ノ奥遺跡は、神戸市灘区高羽字滝の奥に所在する。かつて、当該地からは弥生式土器が採集され、弥生時代の遺構が存在するのではないかと考えられていた。

ところが当該地にマンション建設計画が立てられたため、昭和55年12月に試掘調査を実施した。その結果、平安時代のものと考えられる多量の土師器・須恵器と火葬墓・ピットを検出した。そのため、昭和56年４月から昭和57年２月にかけて全面発掘調査を実施した。

fig. 143　位置図

fig. 144　滝ノ奥遺跡遠景

2．調査概要　検出した遺構は、経塚１、掘立柱建物址２、火葬墓14、ピット多数である。

経　塚　経塚は、調査区北西から検出された。近世以降の開墾によって、上部が削平されていた。そのため経塚の上部構造と規模は不明瞭であるが、東方と南方で判断すると、一辺約3.8m程のものと考えられる。その中央からやや北寄りに1.1m×1.4mの台形状の掘形があり、そこに経筒を埋納する石室を造営し、その周辺に刀子・合子・和鏡を埋納している。

石室は、底石をおき南側、東側の側壁をおいて構築し、その際に和鏡を埋納

するスペースをわずかに底石横に残している。その後、北側、西側の側壁を底石の上にのせ、その裏にやや小振りの石をつめ、土を掘形内に充塡している。なお、南側、東側の側壁の裏には殆ど石をつめていない。

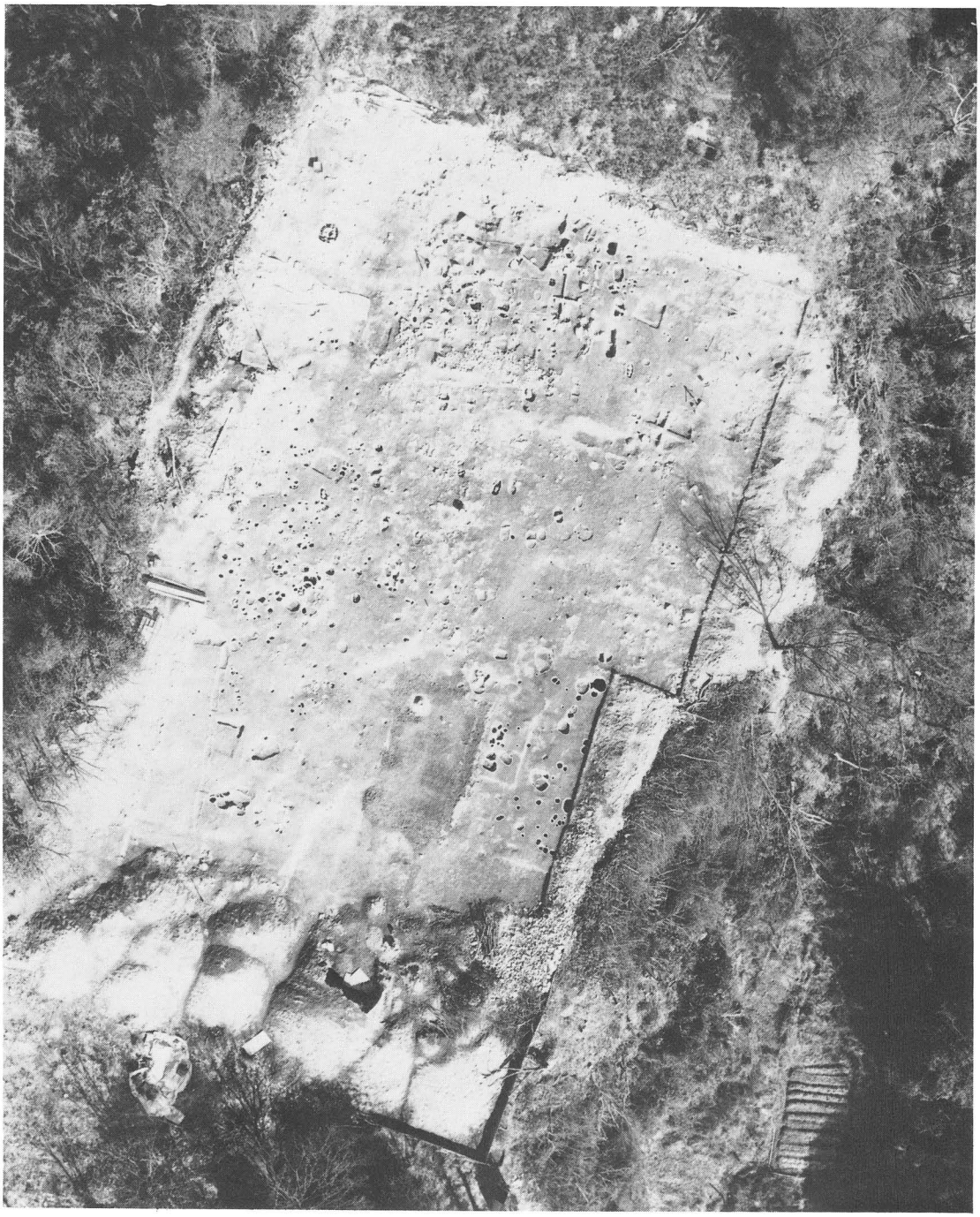


fig. 145　調査地全景